京都府遺跡調査報告集

第160冊

八幡インター線関係遺跡

（1）美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次

（2）美濃山瓦窯跡群

（3）美濃山遺跡第３次

２０１４

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

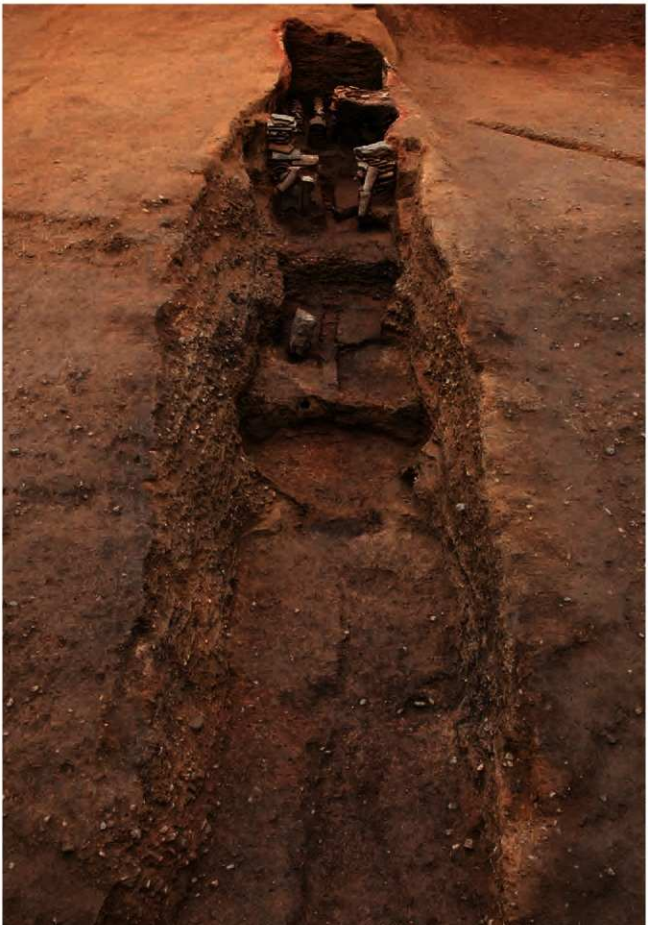
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年４月に設立されて以来、33年間にわたり、府内各地で公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行っています。業務の遂行にあたり、皆様方より賜りましたご理解とご協力に厚く感謝申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成23・24年度に京都府山城北土木事務所の依頼を受けて実施した美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡・美濃山瓦窯跡群・美濃山遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が、地域の埋蔵文化財への理解と関心を深めるうえで、多くの方々にご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された京都府山城北土木事務所をはじめ、京都府教育委員会、八幡市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成26年３月

公益財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　上　田　正　昭



美濃山瓦窯跡群２号窯全景（東から）

例　　言

1．本書に収めた報告は下記のとおりである。

八幡インター線関係遺跡

（1）美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次

（2）美濃山瓦窯跡群

（3）美濃山遺跡第３次

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺　跡　名	所　在　地	調査期間	経費負担者	執筆者
八幡インター線関係遺跡				
（1）美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次	八幡市美濃山古寺・細谷・大塚	平成23年８月８日～平成24年３月２日	京都府山城北土木事務所	小池　寛 竹原一彦 引原茂治
（2）美濃山瓦窯跡群 （3）美濃山遺跡第３次	八幡市美濃山古寺・出島	平成24年８月６日～平成25年１月26日		筒井崇史 加藤雅士 大高義寛

3．本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。

4．土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5．本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

6．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影と現場写真の一部は、調査課企画調整係主任調査員田中彰が行った。

本 文 目 次

（１）美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次 ---------- 10
（２）美濃山瓦窯跡群 ---------- 37
（３）美濃山遺跡第３次 ---------- 76

挿 図 目 次

第１図　調査地周辺地形分類図 ---------- 3
第２図　調査地及び周辺主要遺跡分布図 ---------- 5
第３図　調査次数別調査区配置図 ---------- 7
第４図　美濃山瓦窯跡群・美濃山遺跡ほか調査区配置図 ---------- 9
（１）美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次
第５図　１・２トレンチ実測図 ---------- 11
第６図　３・４トレンチ実測図 ---------- 12
第７図　６トレンチ地区割り図・地形図 ---------- 14
第８図　５・６トレンチ遺構配置図 ---------- 15
第９図　竪穴建物ＳＨ30実測図 ---------- 16
第10図　竪穴建物ＳＨ35実測図 ---------- 16
第11図　竪穴建物ＳＨ40実測図 ---------- 17
第12図　竪穴建物ＳＨ60実測図 ---------- 18
第13図　竪穴建物ＳＨ38実測図 ---------- 19
第14図　竪穴建物ＳＨ53・57・95・99、周壁溝ＳＤ70実測図 ---------- 20
第15図　掘立柱建物ＳＢ105・107、柵列ＳＡ106実測図 ---------- 21
第16図　柵列ＳＡ108・109実測図 ---------- 22
第17図　土師器焼成坑ＳＹ45実測図 ---------- 22
第18図　煙管状窯ＳＹ55実測図 ---------- 24
第19図　土坑ＳＫ32実測図 ---------- 25
第20図　落ち込みＳＸ80断面図 ---------- 25
第21図　11トレンチ実測図 ---------- 26

第22図　出土遺物実測図１（１・３トレンチ、６トレンチＳH30・35）……26
第23図　出土遺物実測図２（ＳH40）……27
第24図　出土遺物実測図３（ＳH60）……28
第25図　出土遺物実測図４（ＳH38・53）……29
第26図　出土遺物実測図５（ＳＹ45）……29
第27図　出土遺物実測図６（ＳＹ55）……30
第28図　出土遺物実測図７（ＳＫ32）……31
第29図　出土遺物実測図８（ＳＫ32）……32
第30図　出土遺物実測図９（遺物包含層）……33
第31図　美濃山廃寺下層遺跡遺構配置模式図……35
第32図　美濃山廃寺遺構配置模式図……35
（２）美濃山瓦窯跡群
第33図　２号窯実測図……38
第34図　２ａ号窯実測図……39
第35図　３号窯実測図……41
第36図　４号窯実測図……42
第37図　５号窯実測図……43
第38図　美濃山廃寺出土軒丸瓦分類図……45
第39図　美濃山廃寺出土軒平瓦分類図……47
第40図　２号窯出土軒丸瓦実測図１……49
第41図　２号窯出土軒丸瓦実測図２……50
第42図　２号窯出土軒平瓦実測図１……52
第43図　２号窯出土軒平瓦実測図２……53
第44図　その他の遺構出土軒瓦実測図……54
第45図　丸瓦・平瓦分類図……56
第46図　２号窯出土平瓦実測図１　分焔柱……58
第47図　２号窯出土平瓦実測図２　分焔柱……59
第48図　２号窯出土平瓦実測図３　隔壁……60
第49図　２号窯出土平瓦実測図４　隔壁……61
第50図　２号窯出土平瓦実測図５　２ａ号窯埋土……63
第51図　２号窯出土平瓦実測図６　埋土……64
第52図　５号窯出土丸瓦実測図１　分焔柱……65
第53図　５号窯出土丸瓦実測図２　分焔柱・隔壁……66
第54図　５号窯出土平瓦実測図１　分焔柱・隔壁……67
第55図　５号窯出土平瓦実測図２　隔壁……69

第56図　「西寺」銘瓦・塼・鴟尾実測図……70
第57図　鬼板・面戸瓦実測図……71
第58図　熨斗瓦実測図……72
第59図　出土遺物実測図……73
（3）美濃山遺跡第３次
第60図　土層断面実測図……78
第61図　12・13トレンチ実測図……80
第62図　遺構配置図……81
第63図　竪穴建物ＳＨ01・05実測図……82
第64図　土坑ＳＫ02・04、柱穴ＳＰ03実測図……83
第65図　出土遺物実測図１……84
第66図　出土遺物実測図２……85
第67図　出土遺物実測図３……86

付表目次

１．美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次

付表１　竪穴建物出土弥生土器数量表……34

２．美濃山瓦窯跡群

付表２　軒瓦出土点数表……44

図版目次

巻頭図版　美濃山瓦窯跡群２号窯全景（東から）

１．美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次

図版第１　(1) Ａ地区調査前南半部（南西から）
(2) Ａ地区調査前北半部（北東から）
(3) 竪穴建物ＳＨ30全景（北東から）
図版第２　(1) 竪穴建物ＳＨ30遺物出土状況（北西から）
(2) 竪穴建物ＳＨ60全景（北東から）
(3) 竪穴建物ＳＨ60遺物出土状況（北西から）

図版第３　(1)竪穴建物ＳＨ35全景(北西から)
(2)竪穴建物ＳＨ40全景(北東から)
(3)竪穴建物ＳＨ50・土坑ＳＫ38全景(南西から)
図版第４　(1)掘立柱建物ＳＢ105・107全景(北東から)
(2)溝ＳＤ039・土坑ＳＫ470遺物出土状況(北東から)
(3)土師器焼成坑ＳＹ45検出状況(北から)
図版第５　(1)土師器焼成坑ＳＹ45全景(北から)
(2)煙管状窯ＳＹ55全景(東から)
(3)煙管状窯ＳＹ55全景(南から)
図版第６　(1)煙管状窯ＳＹ55焼成室断面(東から)
(2)Ｂ地区調査前全景(南西から)
(3)１トレンチ全景(北東から)
図版第７　(1)２トレンチ全景(北東から)
(2)３トレンチ全景(北東から)
(3)４トレンチ全景(南東から)
図版第８　出土遺物１
図版第９　(1)出土遺物２
(2)出土遺物３
図版第10　(1)出土遺物４
(2)出土遺物５

２．美濃山瓦窯跡群

図版第11　(1)美濃山瓦窯跡群全景(空撮・北東から)
(2)２号窯検出状況(北から)
図版第12　２号窯全景(東から)
図版第13　(1)２ａ号窯全景(東から)
(2)２号窯正面景(東から)
図版第14　(1)２ａ号窯焚口崩落状況(北から)
(2)２ａ号窯焼成室側壁(北から)
(3)２ａ号窯焼成室(西から)
図版第15　(1)２ａ号窯隔壁(北東から)
(2)２ａ号窯隔壁構築状況(南から)
(3)２ａ号窯分焔柱構築状況(東から)
図版第16　(1)２号窯ひさご形土製品出土状況(北から)
(2)２号窯埋土断面(南から)
(3)２ｂ、２ｃ号窯(東から)

図版第17　(1) 2 a 号窯埋土断面(北から)
(2) 2 a 号窯焼成室遺物出土状況(北から)
(3) 2 a 号窯焚口構築状況(北東から)
図版第18　(1) 3 号窯検出状況(東から)
(2) 3 号窯埋土断面(南東から)
(3) 3 号窯灰原断面(南から)
図版第19　(1) 3 号窯遺物出土状況(東から)
(2) 3 号窯全景(東から)
図版第20　(1) 4 ・ 5 号窯検出状況(北から)
(2) 4 号窯全景(東から)
図版第21　(1) 4 号窯焼成室埋土断面および遺物出土状況(南から)
(2) 4 号窯焼成室埋土断面(東から)
(3) 4 号窯焼成室畦構築状況(西から)
図版第22　(1) 5 号窯全景(東から)
(2) 5 号窯燃焼室断面(東から)
図版第23　(1) 5 号窯焼成室埋土断面(北西から)
(2) 5 号窯燃焼室埋土断面(北東から)
(3) 5 号窯焼成室(西から)
図版第24　(1) 5 号窯焼成室須恵器出土状況(北から)
(2) 5 号窯燃焼室(東から)
(3) 5 号窯燃焼室側壁・天井部(北東から)
図版第25　(1) 5 号窯焼成室畦構築状況(西から)
(2) 5 号窯分焔柱断面(南から)
(3) 5 号窯窯体断面(北東から)
図版第26　出土遺物　軒瓦 1
図版第27　出土遺物　軒瓦 2
図版第28　出土遺物　軒瓦 3
図版第29　出土遺物　軒瓦 4
図版第30　出土遺物　平瓦 1
図版第31　出土遺物　平瓦 2
図版第32　出土遺物　平瓦 3 ・ 丸瓦
図版第33　出土遺物　鬼板・「西寺」銘瓦・塼
図版第34　出土遺物　斐斗瓦・押印平瓦
3．美濃山遺跡第 3 次
図版第35　(1) C 地区調査前全景(北東から)

(2) C地区全景(北東から)
(3) D地区全景(南東から)
図版第36　(1) E地区東半部調査前全景(東から)
(2) 1トレンチ全景(東から)
(3) 1トレンチ全景(西から)
図版第37　(1)竪穴建物SH01全景(西から)
(2)土坑SK02全景(東から)
(3)土坑SK02埋土断面および遺物出土状況(北東から)
図版第38　(1)土坑SK04全景(北から)
(2)竪穴建物SH05全景(南から)
(3) E地区西半部調査前全景(西から)
図版第39　(1) 2トレンチ全景(南から)
(2) 3トレンチ谷状地形(南西から)
(3) 4トレンチ全景(北西から)
図版第40　出土遺物

八幡インター線関係遺跡
平成23・24年度発掘調査報告

（美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次・
美濃山瓦窯跡群・美濃山遺跡第３次）

はじめに

今回報告する発掘調査は、平成23・24年度に八幡インター線道路整備促進業務に先立ち、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。道路建設予定地内には、新田遺跡、柿谷古墳、美濃山廃寺、美濃山廃寺下層遺跡、美濃山遺跡の５遺跡が周知されており、平成21年度から事前の発掘調査を行っている。平成21年度には新田遺跡、平成22年度には柿谷古墳と美濃山遺跡の調査を実施し、すでに報告したところである。(注1)

平成23年度は美濃山廃寺、美濃山廃寺下層遺跡、美濃山遺跡の調査を実施した。美濃山廃寺下層遺跡の調査中に新規に美濃山瓦窯跡群を確認し、部分的な調査を行った。

平成24年度には前年度に検出した美濃山瓦窯跡群、美濃山遺跡の発掘調査を実施した。平成25年度は、整理作業及び報告書作成を行った。なお、報告書作成にあたっては、平成25年11月15日に美濃山瓦窯跡群の遺跡検討会を実施した。この席上、当調査研究センター理事である上原真人をはじめ植山茂、小森俊寛、大洞真白、備前知世、古閑正浩（五十音順・敬称略）から多くのご教示を得た。

現地発掘調査と整理作業にあたっては、京都府教育委員会・八幡市教育委員会、大阪府枚方市教育委員会、地元自治会の皆様をはじめ各関係機関のご指導・ご協力を頂いた。また、上記の方々のほかに、中谷雅治当調査研究センター理事をはじめ井戸竜太、小澤　毅、木立雅朗、高正龍、鈴木智大、鷹野一太郎、西田敏秀、箱崎和久、菱田哲郎、向井佑介（五十音順・敬称略）のご教示を得た。記して感謝します。

なお、調査にかかる経費は、全額京都府山城北土木事務所が負担した。　（竹原一彦）

〔調査体制等〕

平成23年度

現地調査責任者　調査第２課長　水谷壽克

現地調査担当者　調査第２課課長補佐兼調査第１係長　小池　寛

同　主任調査員　引原茂治・竹原一彦

同　調　査　員　高野陽子・加藤雅士

調　査　場　所　八幡市美濃山古寺・細谷・大塚

現地調査期間　平成23年８月８日～平成24年３月２日
調　査　面　積　2,500㎡
平成24年度
現地調査責任者　調査第２課長　水谷壽克
現地調査担当者　調査第２課課長補佐兼調査第１係長　小池　寛
同　主任調査員　引原茂治・竹原一彦
同　調　査　員　牧田梨津子
調　査　場　所　八幡市美濃山古寺・出島
現地調査期間　平成24年８月６日～平成25年１月26日
調　査　面　積　2,085㎡

位置と環境

１）地理的環境

八幡市は、京都盆地の南西部に位置する。市域の西部から南部にかけて丘陵地が伸び、市域の東端部から北端部にかけて木津川が北流する。木津川はその後、桂川、宇治川と合流し、淀川となり大阪湾に注ぐ。また、丘陵と河川に挟まれた中心部から南東部には木津川の沖積地が広がり、丘陵から沖積地の一部地域では扇状地が形成されている。一方、八幡市は、乙訓郡大山崎町、久世郡久御山町、京都市、城陽市、京田辺市と境界を接するほか、大阪府の三島郡島本町及び枚方市とも隣接する。

美濃山瓦窯跡群が位置する八幡丘陵は、八幡市の南西部にあり、京都盆地と奈良盆地及び大阪平野を隔てる京阪奈丘陵に属する。(注2) また、京阪奈丘陵に属する市域北西部の石清水丘陵と京田辺市西部は田辺丘陵に連なっている。なお、丘陵東側斜面地帯及び丘陵縁辺部に取り巻く砂礫台地帯には樹枝状に発達した開析谷によって多くの丘陵支脈が形成されている。

美濃山瓦窯跡群周辺の砂礫台地帯は、礫、砂、シルトなどが基質となっているが、これは大阪層群と呼ばれる地層群に由来する。大阪層群は、京都府南部、滋賀県南部、奈良県北部、大阪府全域などに広く分布する、鮮新世から更新世にかけて堆積した地層群である。(注3) おもに湖沼成、河成による固結度の低い礫・砂・シルトの互層によって構成され、その間に約150層にのぼる火山灰層が確認されている。また、約100万年前以降に堆積した中・上部層では12層以上の海成粘土層も挟在する。(注4) 海成粘土は、当該地域が海底にあった期間に堆積した粘土層であり、約120万年前以降の地殻変動と気候変動などによって繰り返された海進・海退が堆積の主な要因である。(注5) 海底となっていた範囲に広く分布していること、含有する貝化石や珪藻化石の分析により同時期に堆積した海成粘土層が比定可能であることなどから、火山灰層と同じく堆積時期を判断する鍵層として認識されている。(注6) この海成粘土層のうち、八幡丘陵では約40万年前に堆積した海成粘土層（Ma９層）が丘陵最上部に分布していることが確認されている。(注7) また、砂礫台地帯の一部では大阪層群陸地化後に形成された高位段丘堆積層と中位段丘堆積層も認められる。(注8) 高位段丘堆積層の

第１図　調査地周辺地形分類図(S=1/50,000 1972 土地分類基本調査ほかを改変)

形成に関しては、いまだ不明瞭な点が多く、また地域によって形成過程が異なるなどの指摘がされており、実体は明らかにされていない[注9]が、八幡丘陵南東部の高位段丘堆積層は、大阪層群を不整合に覆っており、小・中礫を含む砂～シルト質砂である[注10]。中位段丘堆積層は高位段丘堆積層形成後に堆積した木津川の沖積層である。木津川河谷が形成される過程で取り残された堆積層が、木津川支流河川の側方浸食を受け段丘状に形成されたもので、現在では丘陵縁辺部で分布が確認されている[注11]。

以上のように砂礫台地帯の基盤層は大阪層群、高位段丘堆積層、中位段丘堆積層から構成されており、これらの各層は固結度が低く開析を受けやすい地質であったため、今日のような多くの丘陵支脈が形成されるに至った。美濃山瓦窯跡群は丘陵南東部に展開する支脈の標高35m付近に立地している。調査前の土地利用状況としては竹林が広がっていた。竹林土下には赤色ロース状を呈するシルト層があり、オリーブ色粘土層、礫混じり粗砂層、礫層と続く。竹林造成に伴う地形改変を受けていたが、広い範囲でみると赤色シルト層上面で平坦面を形成していることがみてとれた。丘陵裾部には大谷川、虚空蔵谷川などの小河川が北流し、今池や内里池、戸津池といった谷部を堰き止めた溜め池が点在している。（大高義寛）

2）歴史的環境

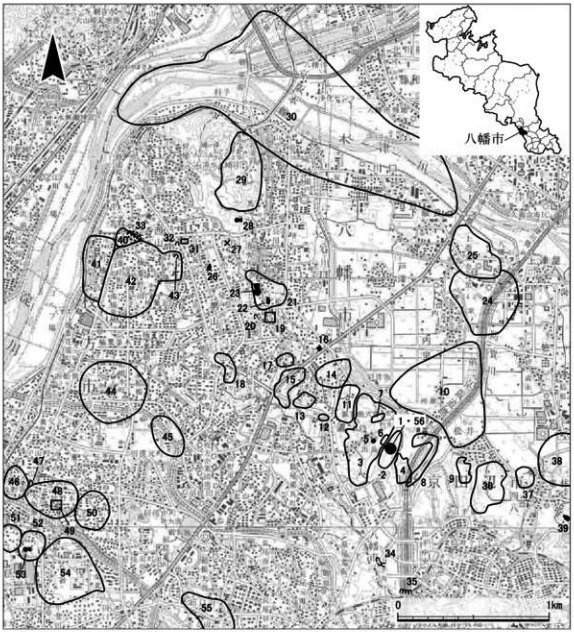
八幡市周辺では、美濃山丘陵を中心に旧石器時代後期の遺物が出土している。美濃山丘陵北西部の金衛門垣内遺跡ではサヌカイト製ナイフ形石器や翼状剥片が多数が出土している。また、周辺部の宮ノ背遺跡・美濃山廃寺下層遺跡・荒坂遺跡でもナイフ形石器が出土している。

縄文時代の金衛門垣内遺跡では草創期の有舌尖頭器や中期後半頃に多い切目石錘が出土している。

弥生時代に入ると遺跡数は飛躍的に増加する。丘陵部では中期～後期にかけて高地性集落が多数営まれる。中期の前半には金衛門垣内遺跡、中頃には井の元南遺跡、後半には中ノ山遺跡・狐谷遺跡で活動が開始される。井の元南遺跡では甕棺が検出されている。金衛門垣内遺跡は古くから多量の石器や石製品が出土し、当地の拠点的集落と考えられている。また、北隣に位置する幸水遺跡では方形周溝墓群が検出され、金衛門垣内遺跡の一部と考えられる。後期に入ると幣原遺跡・備前遺跡・南山遺跡・美濃山廃寺下層遺跡で竪穴建物が検出されている。

美濃山遺跡は、これまで八幡市教育委員会が実施した遺跡範囲確認調査で柱穴・土坑・溝等の遺構が検出されている。男山丘陵の正法寺裏山にある式部谷では、宅地造成工事中に後期に属する突線紐式袈裟襷文銅鐸が出土した。平野部では、後期後半から古墳時代前期にかけての木津川河床遺跡や後期末から古墳時代にかけての内里八丁遺跡などの集落遺跡がある。

古墳時代になると、男山から美濃山にかけての丘陵上に多くの古墳が築かれる。この地域の首長墳として、前期後半には男山丘陵に茶臼山古墳・石不動古墳・西車塚古墳・東車塚古墳など、前方後円（方）墳が築かれる。特に西車塚古墳は全長120mの前方後円墳で、木津川左岸最大規模を測る。前期末から中期には男山丘陵上に古墳が築かれなくなり、南の美濃山丘陵に大型の方墳であるヒル塚古墳や前方後円墳の美濃山大塚古墳などが築かれるようになる。後期前葉には方墳



第２図　調査地および周辺主要遺跡分布図
（国土地理院　1/50,000　京都東南部・京都西南部・大阪東北部・奈良）

1．美濃山廃寺
2．美濃山廃寺下層遺跡
3．美濃山遺跡
4．荒坂遺跡
5．美濃山王塚古墳
6．美濃山横穴群
7．孤谷横穴群
8．女谷・荒坂横穴群
9．松井横穴群
10．新田遺跡
11．金石衛門垣内遺跡
12．宮ノ背遺跡
13．西ノ口遺跡
14．幸水遺跡
15．備前遺跡
16．ヒル塚古墳
17．南山遺跡
18．幣原遺跡
19．志水廃寺
20．志水１号窯
21．女郎花遺跡
22．東車塚古墳
23．西車塚古墳
24．内里八丁遺跡
25．上奈良遺跡
26．茶臼山古墳
27．式部谷遺跡
28．石不動古墳
29．石清水八幡宮遺跡
30．木津川河床遺跡
31．西山廃寺（足立寺）
32．足立寺瓦窯跡
33．楠葉平野山瓦窯跡
34．交野ヶ原窯跡
35．松井窯跡
36．向谷遺跡
37．西村遺跡
38．門田遺跡
39．大住南塚古墳
40．楠葉東遺跡
41．楠葉野田西遺跡
42．楠葉野田遺跡
43．楠葉東瓦窯跡
44．船橋遺跡
45．招提中町北代遺跡
46．牧野阪遺跡
47．牧野阪瓦窯跡
48．九頭神遺跡
49．九頭神廃寺
50．招提中町遺跡
51．小倉遺跡
52．小倉東遺跡
53．牧野車塚古墳
54．交北城の山遺跡
55．田口山遺跡
56．美濃山瓦窯跡群

である柿谷古墳が築かれる。後期後葉に入ると古墳は築かれなくなり、かわって横穴が八幡市美濃山から京田辺市松井・大住にかけて多数築かれるようになる。八幡市域では狐谷横穴群、美濃山横穴群、女谷・荒坂横穴群が知られている。集落遺跡では、内里八丁遺跡で中期の竪穴建物が検出されている。

飛鳥時代になると男山丘陵の西側斜面の枚方市楠葉平野山瓦窯で、四天王寺の創建瓦が焼成された。　奈良時代に入ると丘陵上に美濃山廃寺、志水廃寺、西山廃寺(別名足立寺)といった古代寺院が創建される。志水廃寺では金堂もしくは講堂と考えられる瓦積基壇が検出されたほか、鬼面文軒丸瓦が出土している。志水廃寺の西隣には志水廃寺に瓦を供給したとされる志水１号窯が存在する。和気清麻呂の建立と伝えられる西山廃寺では塔跡や掘立柱建物が検出されたほか、塼仏や奈良三彩が出土している。西山廃寺の西隣には、同寺に瓦を供給したとされる足立寺瓦窯跡がある。八幡市の南に隣接する枚方市には７世紀に創建された九頭神廃寺があり、塔・金堂・回廊跡が検出されている。この志水廃寺・西山廃寺・九頭神廃寺の３寺では、いずれも美濃山廃寺と同文様の瓦が出土しており、その関連性が注目される。

平野部では、足利健亮氏によって古山陰道が八幡市域の木津川左岸に想定され、志水廃寺・西山廃寺・美濃山廃寺が所在する丘陵も近接することは、古代交通路と古代寺院の関連を考える上でも重要である。内里八丁遺跡では古山陰道の可能性がある道路状遺構と大型の掘立柱建物が検出されている。このほか、飛鳥～平安時代の集落遺跡である、戸津遺跡や上奈良遺跡、荒坂遺跡、女郎花遺跡で掘立柱建物などが確認されている。丘陵上の荒坂遺跡では、掘立柱建物が数棟検出されている。

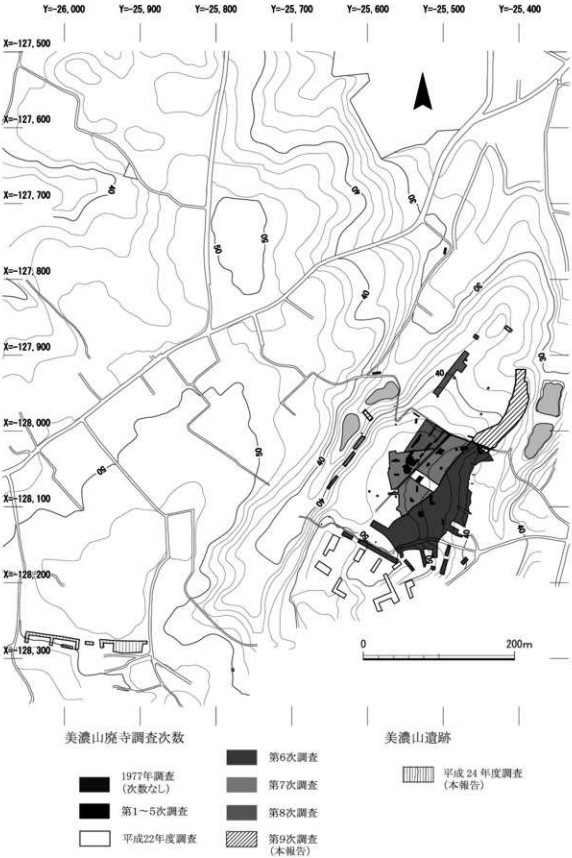
平安時代には、男山丘陵の北端に平安京の鎮護を目的として宇佐八幡宮の八幡神が勧請され、石清水八幡宮が創建された。山裾には、現在の市街地へと引き継がれる門前町が栄え、平地部では、社寺･貴族による荘園開発が盛んになった。上津屋遺跡では、中世の環濠や土坑が検出され、中世集落の一端がわかりつつある。

周辺発掘調査と調査経緯

１)既往の調査

美濃山廃寺の立地する丘陵一帯の小字名は「古寺」といい、古くから古代の瓦や覆鉢形土製品と呼ばれる特殊な遺物が出土することが知られていた。昭和52年に市史編纂事業の一環として発掘調査が実施され、奈良時代を中心とした掘立柱建物と土器・瓦類が発見されたとともに、弥生時代の竪穴建物も検出された。弥生時代の遺構については美濃山廃寺下層遺跡と命名された。当該地域に高速道路関連の大規模開発が計画され、それに先立ち八幡市教育委員会によって平成11年から５か年に渡わたり美濃山廃寺第１～５次の範囲確認調査が実施された。これらの成果によって、奈良時代から平安時代にかけての古代寺院跡であることや寺域の範囲が判明した。

平成22年度に新名神高速道路整備事業に伴い、当調査研究センターが美濃山廃寺下層遺跡第８次調査及び八幡インター線道路整備促進に伴い柿谷古墳・美濃山遺跡の発掘調査を実施した。美



第３図　調査次数別調査区配置図

濃山廃寺下層遺跡第８次調査では少量の瓦や弥生土器が出土しただけで、顕著な遺構は検出できなかった。柿谷古墳・美濃山遺跡では、古墳時代後期の６世紀前半に築造された方墳１基を調査し、馬具や鉄地金銅貼飾り金具を含む鉄器類や須恵器が出土した。美濃山遺跡では古墳時代から中世までの土坑や溝を検出した。

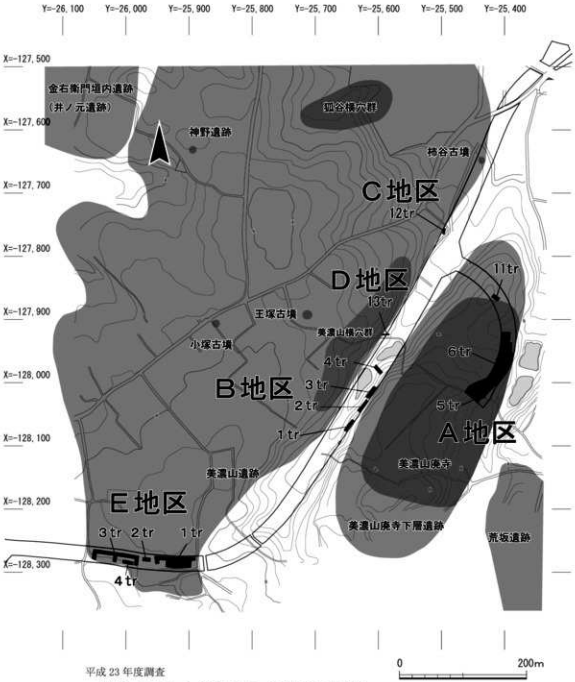
平成23年度には新名神高速道路建設に伴い美濃山廃寺第６次調査を当調査研究センターが実施し、美濃山閉鎖地区農地一時転用(盛土造成)事業で当調査研究センターが美濃山廃寺第７次調査を実施し、八幡市教育委員会が美濃山廃寺第８次調査を、推定寺域のほぼ全域の発掘調査を行った。この美濃山廃寺第６～８次調査の成果としては、後世の開発により塔跡、金堂跡を確認することはできなかったが、講堂の可能性が高い礎石・掘立柱併用建物を検出したほか、寺域北部から倉庫を含む多数の掘立柱建物群が検出できた。遺物では多量の瓦と土器のほか、塼仏・ひさご形土製品・覆鉢形土製品・鬼瓦・鴟尾など豊富な遺物が出土している。また、寺域に隣接した美濃山１号窯では美濃山廃寺創建瓦を供給していたことが明らかになった。

２)調査経緯

本報告書では、平成23年度の調査対象地である美濃山廃寺と美濃山廃寺下層遺跡について、丘陵上をＡ地区、丘陵西側裾部をＢ地区とした。平成22年度調査の美濃山廃寺下層遺跡第８次調査地の南西に位置する丘陵斜面の２地点をそれぞれＣ・Ｄ地区とし、平成24年度に調査した美濃山遺跡の調査地点をＥ地区とした。平成23年度の調査では、遺跡の周辺部で、斜面地も多いことから13か所に小規模な調査を実施して、その後面的な調査を実施した。Ａ地区は美濃山廃寺周辺部にあたり、５～11トレンチの７か所の小規模トレンチを設定し、その後面的調査に移行した。本報告では、拡張のため同一トレンチとなった場所もあり、当初の５・11トレンチは同じトレンチ番号を用い、６～10は６トレンチに統合した。Ｂ地区に設定した１～４トレンチは、対岸の丘陵斜面に美濃山横穴群があり、同様に横穴が存在しないか確認するために設定したが、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。Ｃ地区に設定した12トレンチは、整地された可能性のある平坦面に設定した。Ｄ地区の13トレンチは、地表面で古墳状の隆起が確認できたため設定した。Ｅ地区は平坦面を形成し、美濃山遺跡に含まれる。発掘年度が異なるため上記の小規模トレンチとは別に１～５の番号をふりトレンチを設定した。調査地は竹藪の土入れのため大きく土地改変されていることが予測されたことから、遺構面を確認するとともに遺構の分布する部分を拡張して調査を実施した。

平成23年度の美濃山廃寺、美濃山廃寺下層遺跡の調査では、丘陵東斜面部にあたる６トレンチで新たに奈良時代から平安時代にかけての瓦窯４基(美濃山２～５号窯)を検出した。平成23年度は２号窯の部分的な調査を行い、３～５号窯は検出時点で調査を一時中断し、平成24年度に調査体制を整え再開し、調査を実施した。

なお、Ｃ・Ｄ地区は、美濃山遺跡、美濃山横穴群、美濃山廃寺、美濃山廃寺下層遺跡に隣接する地域で、いずれの遺跡にも含まれていない。しかし、京都府教育委員会ならびに八幡市教育委員会を含む関係機関の協議により遺跡周縁地域として調査を実施することとなった。



平成23年度調査

A地区　5トレンチ（美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡）
　　6トレンチ（美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡・美濃山瓦窯跡群）
　　11トレンチ（美濃山廃寺下層遺跡）
B地区　1・2・3・4トレンチ（美濃山廃寺下層遺跡周辺）
C地区　12トレンチ（美濃山遺跡周辺）
D地区　13トレンチ（美濃山遺跡周辺）

平成24年度調査

A地区　6トレンチの瓦窯（美濃山瓦窯跡群）
E地区　1・2・3・4トレンチ（美濃山遺跡）

第4図　美濃山瓦窯跡群・美濃山遺跡ほか調査区配置図

（1）美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次

１．調査経過

美濃山廃寺と美濃山廃寺下層遺跡は、調査対象地のうち丘陵上をＡ地区、丘陵西側裾部をＢ地区とした。Ａ地区は美濃山廃寺外縁部にあたり、遺構の広がりが地形を明らかにするための調査を実施した。Ｂ地区は周辺丘陵斜面で多く発見されている横穴が存在するか否かを調査するために設定した。その結果、Ａ地区の５・６トレンチにおいて弥生時代後期・奈良時代・江戸時代の遺構を検出した。Ｂ地区では顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

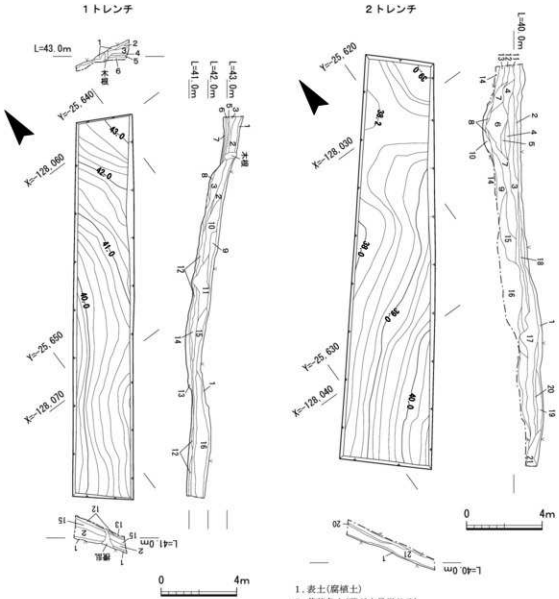
２．検出遺構

１）１トレンチ（第５図）　美濃山廃寺と美濃山廃寺下層遺跡の所在する丘陵西側裾のＢ地区に設けた４か所のトレンチ（１～４トレンチ）のうち、最も南に位置している。トレンチは丘陵裾斜面に等高線に沿って設定した。トレンチ規模は長さ20m、幅４ｍを測る。トレンチ内で確認した地山面は起伏に富み、南端と北端部は西側に張り出し、中央付近が窪む。堆積土は谷部に近い西側ほど堆積が厚みを増す。トレンチ南端では、地表下0.8～1.1m（標高39.7～41.0m）にかけて、西に向かって低くなる地山面を検出した。表土下には石混じりの暗茶色土（第２層）が厚く堆積し、土層中から布目瓦の破片が出土した。旧表土の直上に堆積した茶褐色土（第15層）から弥生土器（第22図１・２）が出土した。これらの遺物は、美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡の中心部が存在する丘陵上から転落してきたものと考えられる。遺構は確認できなかった。

２）２トレンチ（第５図）　１トレンチの北東側に位置し、両トレンチ間の距離は約14mを測る。トレンチは長さ20m、幅４ｍを測る。トレンチ南端では、地表下0.5～0.7m（標高38.5～40.6m）にかけて、西に向かって低くなる地山面を検出した。地山の傾斜面は起伏が著しい。遺構・遺物は確認できなかった。

３）３トレンチ（第６図）　２トレンチの北東側に位置し、両トレンチ間の距離は約４ｍを測る。トレンチは長さ20m、幅４ｍを測る。地山（第８層）上面は起伏が著しいが、１・２トレンチに比べ平坦である。トレンチ南東隅での地山面は標高35.8m、南西隅では標高36.3mを測る。ここでは、土質と色調から、第４層（灰黄色砂質土）が１トレンチ第15層（弥生土器包含層）に該当するとみられ、高杯の脚部（第22図３）が出土した。遺構は検出できなかった。

４）４トレンチ（第６図）　３トレンチから北に約30m離れた谷部に設けたトレンチである。現況では丘陵斜面と溜め池に挟まれた平坦面に位置する。１～３トレンチと異なり、谷筋に直交するようにトレンチを設定した。トレンチは長さ15m、幅5.5mを測る。丘陵に近いトレンチ東端部で、西方向に下がる丘陵斜面の地山を検出した。また、トレンチ西半では地表下約2.5m（標高33.6m）まで掘削を行った。谷部に近く、湧水が著しかったため、トレンチの中央部から西端部にかけての範囲では地山を確認できなかった。トレンチの中央部から西端部では、地表下1.5m



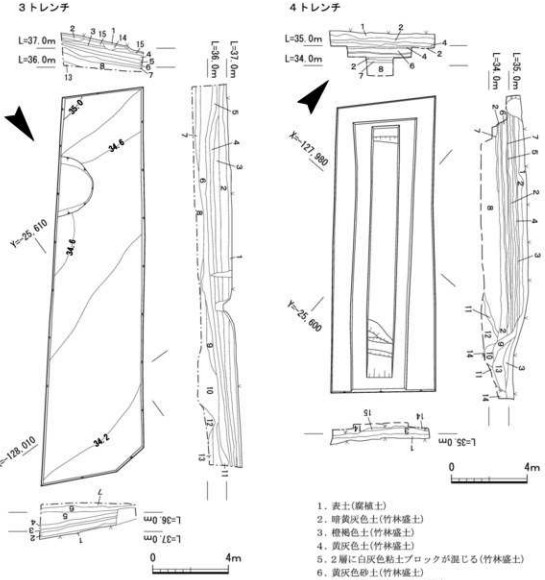
1．腐植土
2．暗茶色礫混じり土
3．暗茶黄色土(小礫混じり)
4．橙褐色粘質土
5．灰白色粘土
6．黄灰色粘質土
7．黄褐色土(礫混じり)
8．暗茶黄色土(やや粘質)
9．暗赤褐色土
10．赤褐色礫混じり土(径４～10cm 礫)
11．黄茶色礫混じり土(径４～10cm 礫を多量に含む)
12．暗黄灰色土(旧表土)
13．黄灰色土
14．暗茶灰色土
15．茶褐色土(礫混じり)
16．暗茶色礫混じり土

1．表土(腐植土)
2．黄茶色土(礫が少量混じる)
3．茶灰色土(小礫混じり)
4．茶灰色砂質土
5．暗茶灰色砂質土
6．茶灰色円礫(径3～6cm大)
7．茶灰色粗砂(径0.5～1cm礫混じる)
8．黄灰色砂
9．暗黄灰色砂礫
10．暗灰茶色砂礫
11．黄茶色砂質土
12．橙褐色粗砂質土
13．橙褐色粗砂(径0.5～1cm礫含む)
14．灰褐色粗砂(硬質)
15．暗黄灰色砂質土(径5cm礫含む)
16．黄色・褐色・灰色砂のラミナ
17．暗茶灰色砂礫(軟質)
18．暗黄茶色砂質土
19．黄灰褐色土
20．暗茶灰色土(旧表土)
21．暗茶色礫混じり土

第５図　１・２トレンチ実測図

（標高34.4m）～最深部（標高33.6m）の範囲で砂のラミナ層（第８層）を検出した。これは谷部の河川堆積層であり、遺物は含まれていない。ラミナ層の上部には竹林の土入れに伴う土が堆積している。（竹原一彦）

５）５トレンチ（第８図）　府道本線から八幡ジャンクション・インターチェンジへの分岐の南端部に、６トレンチとともに設定した調査区である。５・６トレンチ全域は美濃山廃寺及び美濃山廃寺下層遺跡に含まれ、それぞれの遺跡範囲の北東部に位置する。掘立柱建物群や鍛冶炉等が確認された美濃山廃寺第６～８次調査地は本トレンチの南西に隣接する。なお、５トレンチでは



1．表土（腐植土）
2．暗黄灰色土（竹林盛土）
3．橙褐色土（竹林盛土）
4．黄灰色土（竹林盛土）
5．２層に白灰色粘土ブロックが混じる（竹林盛土）
6．黄灰色砂土（竹林盛土）
7．淡黄灰色粘質土（竹林盛土）
8．白灰色砂・橙褐色粘質土のラミナ
9．暗黄茶色土
10．暗茶灰色土（礫多く含む）
11．茶黄色土（礫を含む）
12．11に石を多量に含む
13．暗灰茶色土
14．黄橙色砂土（地山）
15．暗茶褐色礫質砂（酸化鉄分）

1．表土（腐植土）
2．橙灰色土
3．橙黄灰色土
4．灰黄色砂質土（やや暗色）
5．灰黒色土（礫混じり、旧表土）
6．黄茶灰色土（礫混じり）
7．灰黄色砂質土（礫混じり）
8．暗灰黄色礫層
9．暗茶灰色砂
10．暗黄灰色砂礫
11．黄灰色粗砂（礫混じり）
12．灰黄色中粒砂
13．橙茶色砂礫
14．黄茶色砂質土
15．暗灰黄色砂質土（旧表土）

第６図　３・４トレンチ実測図

掘立柱建物・柱穴・土坑を検出したが、掘立柱建物の多くは第６次調査Ａ地区北部に延びている。詳細については既に報告されている。[註12]

柱穴ＳＰ６　美濃山廃寺６次調査で検出した掘立柱建物ＳＢ010の北東隅の隅丸方形柱穴である。一辺約0.6m、深さは約0.3mを測る。ＳＢ010は桁行５間（９m）、梁行３間（4.8m）で、主軸は北で５°西に振る。ＳＰ６では時期のわかる遺物が出土しなかったが、他の柱穴遺物と建物の主軸方向の検討から８世紀中頃～後半（美濃山廃寺Ⅱ-２～Ⅲ-１期）に位置づけられる。

柱穴ＳＰ481　美濃山廃寺６次調査で検出した掘立柱建物ＳＢ475の北東隅の隅丸方形柱穴である。１辺約0.8m、深さは約0.5mを測る。ＳＢ475は桁行３間（5.5m）、梁行２間（3.5m）の東西棟の建物で、軸は北で16°西に振る。ＳＰ481では時期のわかる遺物が出土しなかったが、他の柱穴遺物と建物の主軸方向の検討から８世紀前半（美濃山廃寺Ⅱ-１期）に位置づけられる。

溝ＳＤ090　美濃山廃寺６次調査部分と合わせ約12mを検出した。幅1～1.8m、深さ0.5mである。大量の瓦と土器が出土したが、大半が美濃山廃寺６次調査内から出土し、詳細な報告が既になされているため、図示を割愛した。８世紀前半（美濃山廃寺Ⅱ-１期）に位置づけられる。

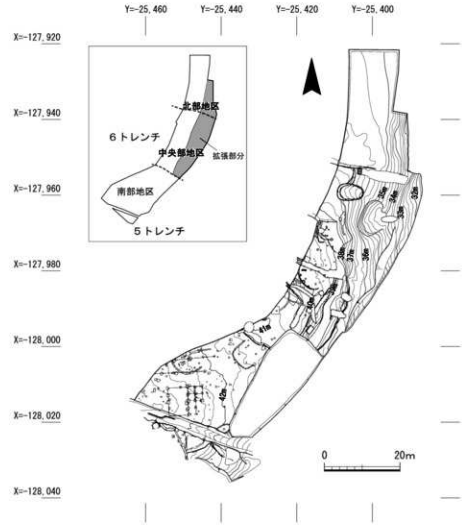
６）６トレンチ（第７・８図）　幅約３mの市道を挟んで、５トレンチの北に設定した調査区である。南西－北東に長く、弧状を呈するトレンチである。調査においては調査区の平面形と後世の開削により作られた段をもとに「北部地区」、「中央部地区」、「南部地区」の３地区に分けて調査を進めた。当初、南北長が115m、東西幅が南部地区で19～30m、中央部地区・北部地区で12mの調査区を設定していた。しかし、調査中に２号窯（ＳＹ50）が検出でき、他の瓦窯の有無を確認する必要が生じたため中央部地区・北部地区を東へ４～13m拡張した。

本トレンチは美濃山廃寺が立地する丘陵の東斜面北半部にあたることから、南部地区に標高42m台の平坦地があるほかは、東と北に向かって低くなる地形である。検出した竪穴建物の周壁溝の東側が著しく削平されており、丘陵の斜面に沿って後世に削平されたと考えられる。北部地区と中央部地区においては、調査区の東西の比高は４～６mある。南部地区では東側が大きく削られており、比高約３mの崖状を呈している。

調査地は、竹林に伴う開削により、３つの段が造成されている。南部地区の段は約0.2m、中央部地区の段は約0.7m、北部地区の段は約１mの比高でそれぞれ北が低い。この北部地区の段は大阪層群の砂礫層にまで達している。ここより北では遺構面を形成する層が残存しておらず、遺構・遺物の有無を確認できなかった。

基本層序は、最上層に竹林による腐植土が約0.2mの厚さで堆積する。表土下には有機質化の進んだ層が約0.3～0.5m堆積しており、その直下にやや粘質である橙色シルト質土の地山が存在する。この地山を先に述べた南部地区東側の崖面で観察すると、橙色シルト質土の厚さは約0.4mである。その下位には約1.3mの厚さで粘質の極細粒砂～シルトが続く。その下位はいわゆる砂層で、均質な細砂層を確認することができる。調査では竹の伐採後、表土層・有機質土層を重機により除去し、橙色シルト質土上で遺構の検出・掘削を行った。

調査の結果、南部地区から北部地区にかけて弥生時代後期の竪穴建物を９棟検出した。南部地



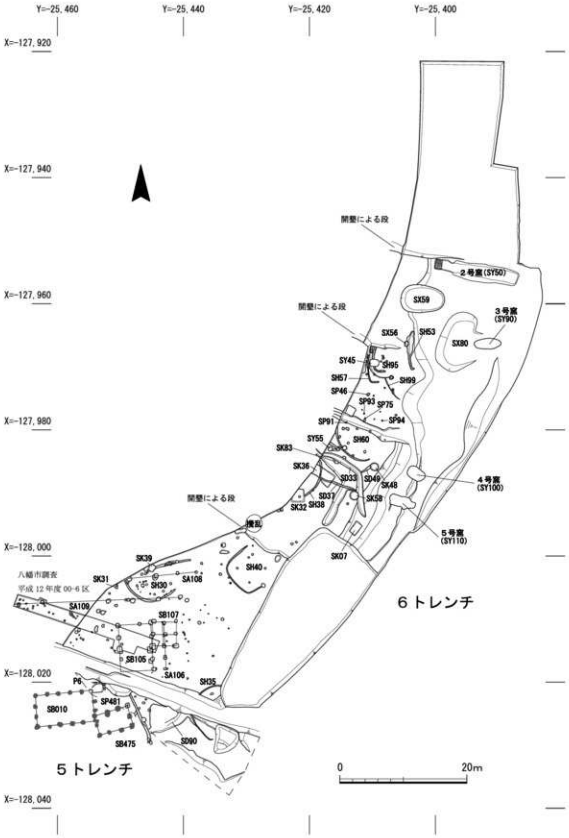
第７図　６トレンチ地区割り図・地形図

区では古代の掘立柱建物、柵列を、中央部地区では奈良時代から平安時代の瓦窯４基のほか、近世の煙管状窯などの特徴的な遺構を検出した。

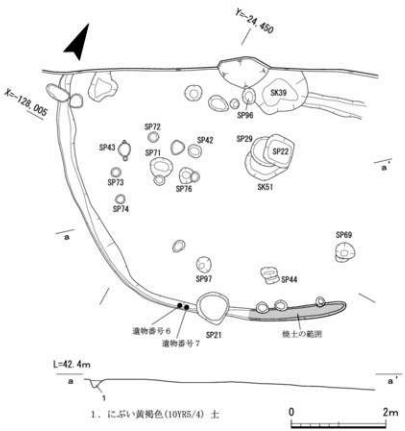
ａ．弥生時代の遺構

竪穴建物ＳＨ30（第９図）　南部地区の中央北端で検出した竪穴建物である。周壁溝のみを検出した。南の約1/2を検出し、北半分は調査区外へのびる。周壁溝の東側は不明瞭で検出できなかった。平面形は円形ないし緩やかな六角形であると考えられ、直径８ｍ程度に復元できる。周壁溝は幅0.24ｍ、深さ0.2ｍである。周壁溝は単純な一層の埋土で埋まっているが、溝内の南東部の一部では微細な焼土が集中して出土した。後述する土坑ＳＫ51やピットＳＰ72～74に由来する土が建物廃絶時に流入した可能性がある。遺物は周壁溝の南東部から弥生時代の甕（第22図６）と高杯（第22図７）が出土している。

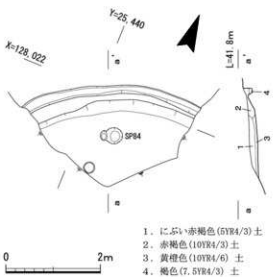
ＳＨ30関連遺構　周壁溝と同一面上で土坑・ピット等を多数検出したが、竪穴建物に伴うものと、そうではないものの区別が困難であった。このうち、内面が被熱で赤変した遺構がいくつかある。周壁溝埋土の一部に焼土が認められたこともあり、ＳＨ30に伴う可能性があるため、こ



第8図　5・6トレンチ遺構配置図



第９図　竪穴建物ＳＨ30実測図



第10図　竪穴建物ＳＨ35実測図

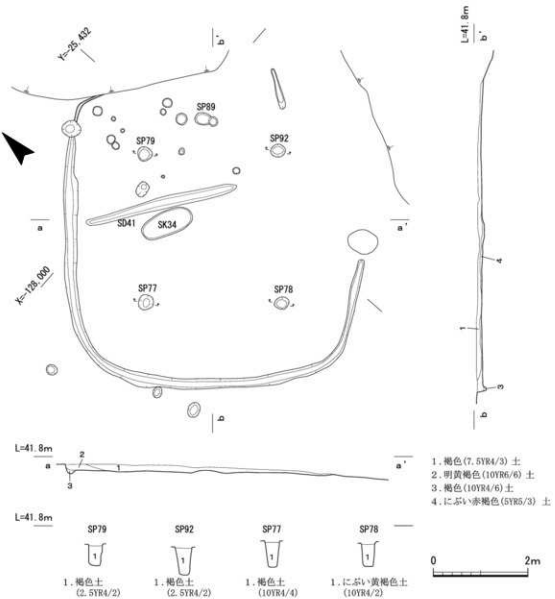
こで触れておく。

土坑ＳＫ51は竪穴建物のほぼ中央付近に位置する。長径は残存長0.72m、短径0.68m、深さ0.3mの長楕円形の土坑で、柵列ＳＡ108を構成する柱穴ＳＰ22、及び土坑ＳＫ29に東側を切られる。内側面は弱く赤変しており、建物の中央土坑の可能性がある。

柱穴ＳＰ72～74はＳＨ30の西よりにある、直径0.2m、深さ0.08～0.14mの小ピットで、内側面が赤変している。

竪穴建物ＳＨ35（第10図）　南部地区の南端で検出した竪穴建物である。周壁溝と竪穴部を検出した。南を市道に切られており、東も崖によって切られている。残存しているのは、全体の1/6ほどである。平面形は円形と推定され、直径８ｍ程度に復元できる。周壁溝は幅0.16m、深さ0.2mである。周壁溝は竪穴底面よりも0.15m高い位置にあり、特徴的である。周壁溝から竪穴床面の間は傾斜しており、幅0.3mの斜面として建物内を巡っている。竪穴の床面で柱穴を３基検出したが、主柱穴の判別はできなかった。柱穴の深さは0.13~0.24mである。遺物は、竪穴埋土から弥生土器が出土している。

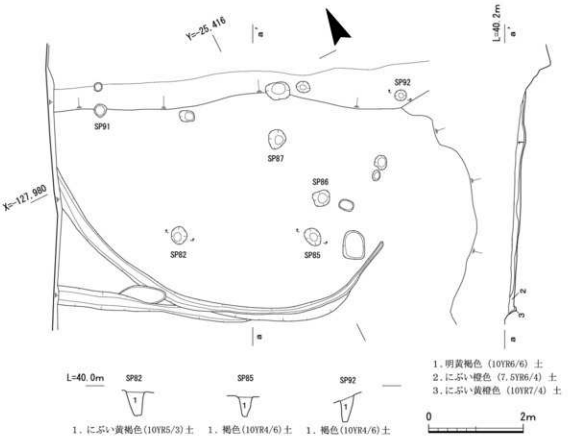
竪穴建物ＳＨ40（第11図）　南部地区の北東部で検出した竪穴建物である。竪穴と周壁溝、主柱穴を検出した。建物の北側は竹林の開削により削平されている。東側も丘陵の傾斜に沿うように削平されており、竪穴と周壁溝は検出できなかった。平面形は隅丸方形で、一辺は6.3mである。竪穴建物の埋土上から掘り込む土坑ＳＫ34と溝ＳＤ41をまず半裁・記録後に完掘し、のちに建物



第11図　竪穴建物ＳＨ40実測図

埋土を掘削した。建物の竪穴床面では、柱穴を多数検出した。このうち柱穴ＳＰ77～79・ＳＰ92は方形に配列し、褐色系の同種の埋土を有することから、４本柱の主柱穴と考えられる。柱穴の掘形は円形で、直径0.14～0.18m、深さ0.4～0.6mで、竪穴床面は削平を受けていないことから柱穴本来の深さを示している。周壁溝は幅0.2m、検出面からの深さ0.3m、竪穴部底面で深さは0.1mである。遺物は、竪穴部と主柱穴から弥生土器が出土している。

竪穴建物ＳＨ60（第11図）　中央部地区で検出した竪穴建物である。竪穴と周壁溝、柱穴を検出した。西側は調査区外に延び、東側は地形の傾斜に沿って削平されている。平面形は、不整形な円形であり、径６m程度に復元できる。竪穴床面で柱穴を多く検出した。このうち柱穴ＳＰ82は径0.42mの円形で深さ0.5m、柱穴ＳＰ85は径0.32mの円形で深さ0.4m、柱穴ＳＰ92は径2.8mの円形で深さ0.6mである。竪穴床面からの深さが0.4～0.6mと一定の深さがあり、主柱穴の可能性



第12図　竪穴建物ＳＨ60実測図

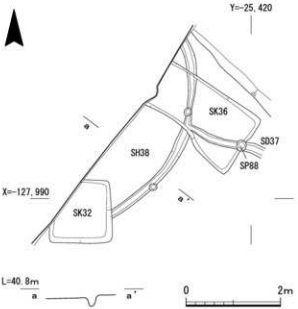
がある。この場合、主柱穴の配置は多角形を呈するものであったと考えられる。遺物は竪穴埋土中から弥生土器が多く出土している。

竪穴建物ＳＨ38（第13図）　中央部南端部のトレンチ北壁付近で検出した竪穴建物である。周壁溝のみで、南西部の約1/6を検出した。大部分は調査区外に延びているほか、南部は土坑ＳＫ32に、東部は土坑ＳＫ36に切られる。平面形は円形で、直径６ｍ程度に復元できる。周壁溝は幅0.2m、深さ0.25mである。この周壁溝に接続し、傾斜の低い東に続く溝ＳＤ37が存在している。周壁溝との切り合い関係の有無は確認できなかったが、排水溝の可能性がある。遺物は周壁溝から弥生土器、土製円盤が出土している。

竪穴建物ＳＨ53（第14図）　中央部北端で検出した竪穴建物である。周壁溝のみを検出した。東側は丘陵の傾斜に沿って削平されているため、「コ」字状を呈する。西側は土坑ＳＸ56に一部を切られる。東の立ち上がりが緩くなる部分は、当初別の遺構（ＳＤ54）と認識していたが、断面を検証した結果、竪穴建物の一部であることが判明した。ＳＨ53は立ち上がりが明瞭なところで測ると周壁溝はの幅0.3m、深さ0.28mである。建物は、一辺６ｍの隅丸方形の平面形に復元できる。遺物は弥生土器片が出土している。

竪穴建物ＳＨ95（第14図）　中央部北端で検出した竪穴建物である。周壁溝（ＳＤ70）と、その外側にある落ち込み状の掘形（ＳＨ95）を検出した。落ち込みは北から大きく弧を描いて東にのびる。北側は調査区外にのび、地形が傾斜する東側は削平されている。深さは0.12mである。周壁

溝は北側を開削の段に削平され、東側も地形の傾斜に沿って削平されているため、「L」字状を呈している。幅0.28m、検出面からの深さ0.24mである。周壁溝の南北の残存長は3.8mで、それ以上の規模をもつ隅丸方形の平面形に復元できる。当初、SH95とSD70はそれぞれ別の遺構と認識していたが、周壁溝が落ち込みに沿って位置することから、SD70を周壁溝とする竪穴建物の廃絶や建替に関わる遺構がSH95であると判断した。遺物は、弥生土器とみられる土器片が出土している。



第13図　竪穴建物SH38実測図

竪穴建物SH57（第14図）　中央部北端で検出した竪穴建物である。周壁溝のみを検出した。北側は調査区外に延び、東側は地形の傾斜に沿って削平されており、「L」字状を呈する。幅0.2m、深さ0.1mで、南北の残存長は3.6mである。一辺がそれ以上の規模をもつ、隅丸方形の平面形に復元できる。遺物の出土はない。

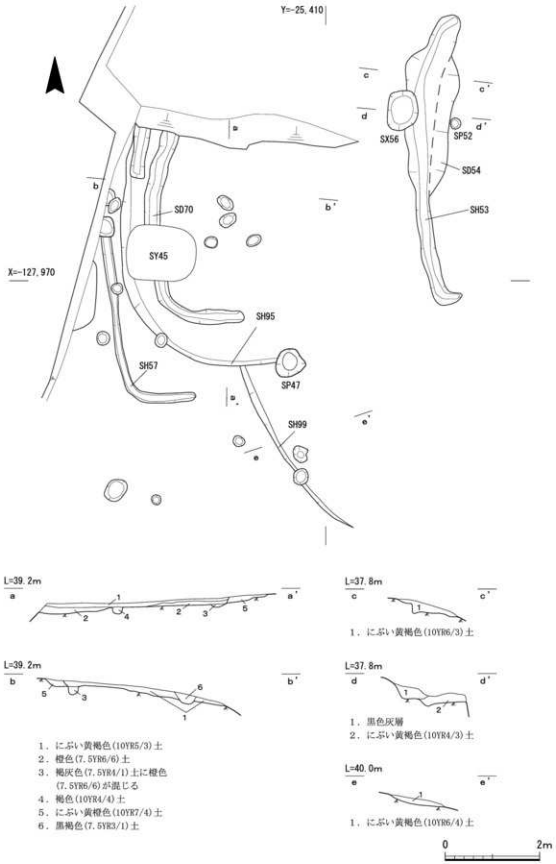
竪穴建物SH99（第14図）　中央部北端で検出した弧状の落ち込みである。北をSH95に切られ、南西は地形に傾斜に沿って削平される。深さは0.12mである。弧状を呈することから竪穴建物とした。遺物の出土はない。

b．奈良時代の遺構

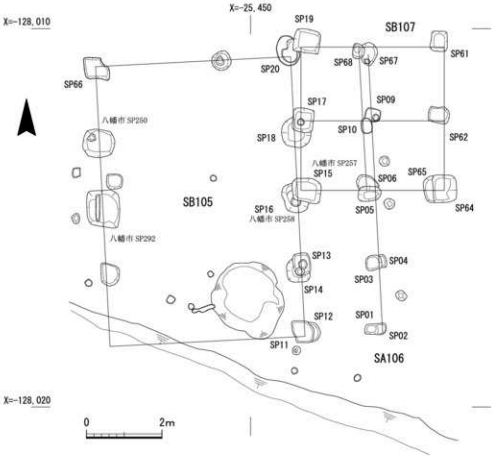
掘立柱建物SB105（第15図）　南部地区の南端にある、梁行2間×桁行4間の南北棟の掘立柱建物である。11基の柱穴を検出した。南西角の柱穴は市道によって削平されている。また南妻は柱穴を認識することができなかった。西側柱列の北第2柱穴・第3柱穴は、八幡市による平成12年度調査00-6区の柱穴SP250と柱穴SP292にあたる。東側柱列の北第3柱穴は同じく八幡市調査の柱穴SP258にあたる。規模は桁行4間が、柱間1.8m（6尺）の等間である。梁行2間分は、東から1.8m（6尺）と3.3m（11尺）で等間にならない。東側柱列の第1～3柱穴は総柱建物SB107の柱穴に切られる。方位は北で3°西に振れる。

柵列SA106（第15図）　南部地区SB105の東2mで検出した、南北方向の4間の柱穴列である。柱間は1.8m（6尺）の等間である。方位は北で3°西に振れる。SB105と柱筋を合わせることから東廂とするのも一案であるが、SB105の側柱を構成する柱穴と比べると掘形が小さいこと、6～8次調査地において廂を有する掘立柱建物がほとんどないにも関わらず、寺域の北東辺である本地点で廂付建物を想定するのは不自然であることから、目隠し塀的な性格が考えられる。

総柱建物SB107（第15図）　南部地区で検出した南北2間×東西2間の総柱建物である。SB105とSA106を切る。南西隅の柱穴SP15は八幡市の平成12年度調査00-6区の柱穴SP257に該



第14図　竪穴建物ＳＨ53・57・95・99、周壁溝ＳＤ70実測図



第15図　掘立柱建物ＳＢ105・107、柵列ＳＡ106実測図

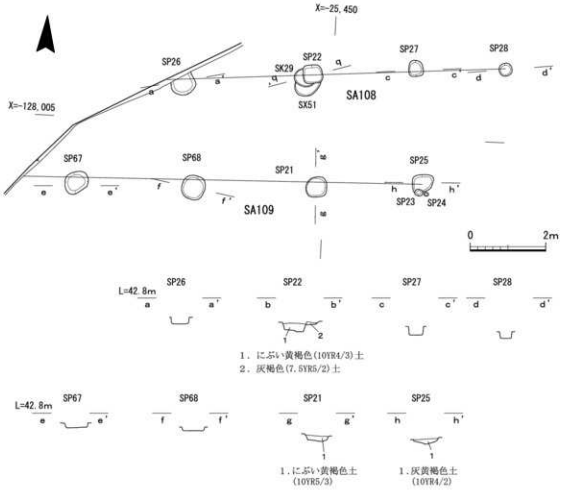
当する。建物の隅にあたる柱穴は掘形が大きく、それ以外はやや小ぶりである。柱間は南北の２間がそれぞれ1.9mである。東西は東の１間分が2.1m（７尺）、西は1.7mである。柱間は一定しないが、全体としては3.8m四方の建物となっている。方位はほぼ正方位である。

柵列ＳＡ108・109（第16図）　南部地区の掘立柱建物群の北で検出した、東西方向の２条の柵列である。いずれも調査区外の西に延びる。

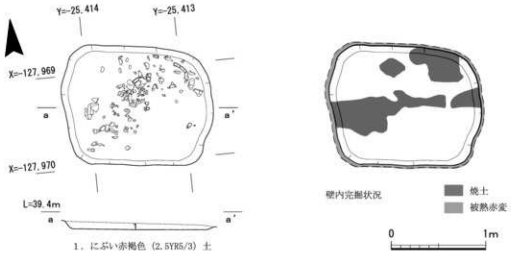
ＳＡ108は３間分を検出した。東の２基の柱穴は、掘形がやや小さいが、同一線上にあることから柵列として復元した。柱間は西から3.0m（10尺）、2.7m（９尺）、2.4m（８尺）とばらつきがある。方位は東で５°北に振れる。

ＳＡ109は３間分を検出した。柱間は3.0m（10尺）の等間である。柱筋の延長線上には、柱間間隔が若干乱れるものの八幡市平成12年度調査00-6区の柱穴ＳＰ253と柱穴ＳＰ252があり、ここまで柵列が延びていたものと考えられる。方位は東で３°北に振れる。

ＳＡ108・109は柱穴列が近接し、方位が異なることから時期差を有しているとみられる。寺域北方における東西方向の柱穴列は、八幡市による美濃山廃寺第８次調査においても柱穴列ＳＡ１・２が検出されており、北を画す柵等の施設であったと考えられている。図上で復元するとＳＡ108・109ともにＳＡ１・２とは柱筋が合わない。つまり同一に連なる遺構ではないが、南北の位置関係は大きく違わない。掘立柱建物がこれより北に広がらないことから、ＳＡ１・２と同じく



第16図　柵列ＳＡ108・109実測図



第17図　土師器焼成坑ＳＹ45実測図

北を画する性格が考えられる。

土師器焼成坑ＳＹ45（第17図）　中央部地区の北西で検出した方形の土坑である。掘形は東西3.2m、南北2.45mの隅丸長方形で、深さは0.15mである。竪穴建物ＳＨ70・95を切っている。平面的に検出した際には、3cm幅で隅丸長方形の環状にめぐる焼土と、その内側の埋土を確認した。

焼土の外側は弱く赤変する。埋土は単純な１層で、焼土や炭化物はほとんど混じっていない。これを除去すると、土坑の側面や底面に、微細な炭化物を伴う焼土が広がる状況を確認した。焼土は土坑の内側面のほぼ全面で認められ、特に北・西辺部では比較的整った形で残っている。一方、土坑底面の焼土は部分的で、全体の1/4程度にとどまる。焼土の厚さは側面・底面ともに２cmほどであるが、側面は赤黒いのに対し、底面は赤褐色の色調でより被熱している。底面の焼土上には土器が面的に広がっている。器種は土師器の杯・甕類がある。奈良時代のものである。土器片は細片化したものが多く、完形品には復元できないが、接合した土器の復元率が比較的高い。また土器の損耗の度合いが低い。３つの認定条件(注13)を満たしており、土師器を焼成する遺構であると考えられる。（加藤雅士）

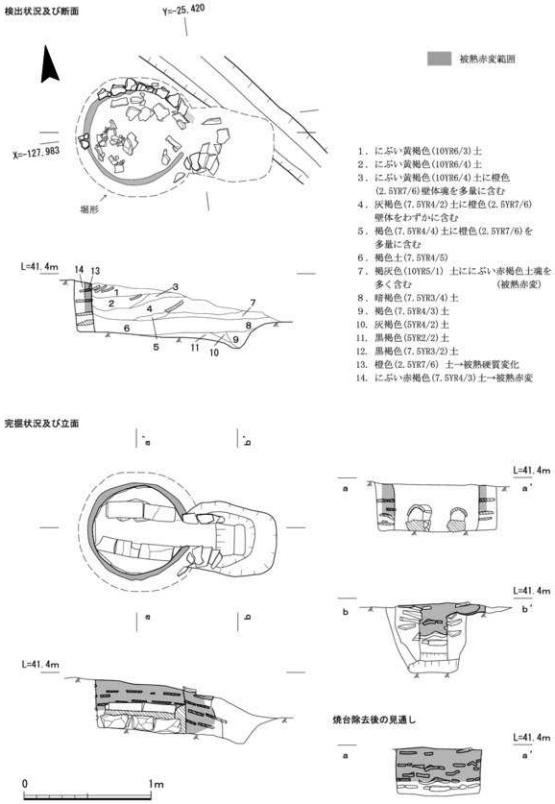
c．近世の遺構

煙管状窯ＳＹ55（第18図）　６トレンチの東部、丘陵平端部の東縁辺付近で検出した小型の窯跡である。窯の東側は緩やかに下がる斜面となる。窯の焼成室は円筒形を呈し、一回り大きい窯掘形内に構築されているが、上部は後の削平によって失われている。窯の焚き口は東側に位置している。焼成室の掘形は、直径0.95m、深さは検出面から0.38mを測る。円筒形の焼成室は、窯壁を厚みのあるスサ入り粘土と桟瓦を交互に積み上げて構築する。燃焼室の内法は直径0.68mを測る。燃焼室床面はほぼ平坦であるが、焚き口方向に向かってやや下がる傾斜が認められる。床面上には角礫と丸瓦を使用した平行する２本の焼台が据えられ、焚き口両側壁の延長線上に設けられている。この２本の焼台は約0.2mの間隔を取り、床面から0.2mの高さを測る。焼台は、床面に長方形の角礫（0.1×0.1×0.2m）３個を直線的に並べ、その上にスサ入り粘土を置き、さらに２～３枚の丸瓦を乗せて構築している。焼成室壁面は床面から0.15mまでの範囲は特に激しく焼けた状態には無いが、0.15mを境に上部の壁面は被熱による赤変が著しい。

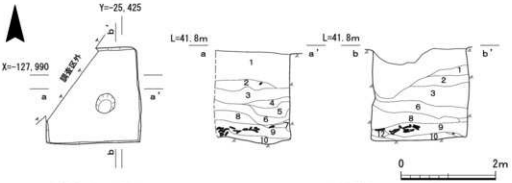
窯の東側（丘陵斜面）に設けられた焚き口は、地表面から一段深く掘り下げられている。隅丸方形の掘形は、長さ0.7m、幅0.55m、深さ0.3mを測る。焚き口底面は東端付近が一段深く掘り下げられ、東側壁面のみが斜めに立ち上がる。燃焼室に接する焚き口部分の南北側面は、燃焼室と同様にスサ入り粘土と桟瓦を積み上げている。当初は天井が存在したとみられるが、後世の削平ですでに失われている。

焼成室の埋土中から窯壁構築材の桟瓦や焼土塊が出土したが、いずれも上層付近から出土している。床面に近い埋土は褐色系の土砂が堆積し無遺物であることから、窯が操業を終えた後、一定期間は放置されていたとみられる。２本の焼台には焼成前の土師器等を置く格子状の焼台が存在したと推測するが、今回の調査ではその存在を示す破片は出土していない。

土坑ＳＫ32（第20図）　煙管状窯ＳＹ55から南西に約７m離れた尾根上で検出した土坑で、粘土採掘坑の可能性が高い。平面形は方形で、北西角部分が調査地外に位置する。土坑の規模は一辺２m、深さ1.5mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は水平である。底面の中央から南東にやや偏って、直径0.4m、深さ0.3mの円形ピットを１基検出した。深い土坑であるため梯子の固定に関連したピットと判断される。土坑壁面の観察では、検出面下0.6m以下に灰白色



第18図　煙管状窯ＳＹ55実測図



1．黄褐色（10YR5/9）土
2．褐色（7.5YR4/4）土
3．黄褐色（10YR7/8）粘質土
4．明黄褐色（10YR7/6）土に黄褐色（2.5Y8/4）粘土ブロック混じる
5．暗褐色（10YR3/3）土
6．暗褐色（7.5YR3/3）土に黄橙色（10YR8/6）土混じる
7．にぶい褐色（7.5YR 5/4）砂質土
8．橙色（7.5YR6/6）砂質土
9．褐灰色（7.5YR4/1）土
10．黄橙色（7.5YR7/8）土
11．暗灰黄色（2.5YR5/2）土
12．にぶい黄橙色（10YR7/2）土

第19図　土坑ＳＫ32実測図

第20図　落ち込みＳＸ80断面図

（7.5YR8/1）シルト質極細粒砂の厚い堆積がみられ、このシルト質極細砂の採掘を目的とした土坑とみられる。土坑底面付近の埋土中には多量の桟瓦とともに近世陶磁器・伏見人形などの遺物が含まれていた。瓦には桟瓦狭端面に第29図に掲載している「義安」と押印されたものがある。

（竹原一彦）

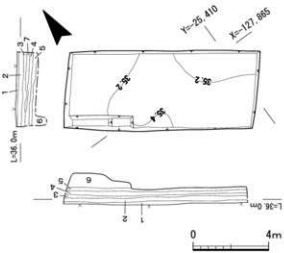
土坑ＳＫ07（第９図）　中央部地区の南端で検出した長方形の土坑である。長軸2.05m、短軸1.21m、深さ1.6mで、近世瓦が出土している。大阪層群の粘土層に達するまで深く掘られており、ＳＹ55が近世の焼き物生産に関連する遺構であることから、粘土採掘坑の可能性がある。

落ち込みＳＸ80（第20図）　北部地区の３号窯（ＳＹ90）の西にある落ち込みである。西から東へ緩やかに傾斜しており、落ち始めは、南北9.5m、東西５mの楕円形を呈している。西は３号窯の上にまで達している。埋土は0.2mの厚さで近世瓦を含んでいる。ただし、八幡市による第８次調査では弥生時代の竪穴建物の窪地が古代まで残存していたとされるなど、丘陵上で堆積環境が緩慢であり、平面的な位置関係が３号窯と対応することから、ＳＸ80が本来的には３号窯と関連する可能性もある。

（加藤雅士）

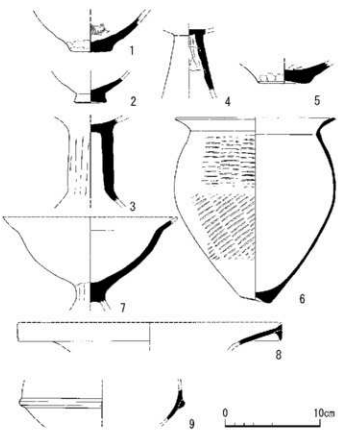
７）11トレンチ（第21図）

丘陵高所の５・６トレンチから北東方向に約50m離れた、丘陵先端に近い位置に設けたトレンチである。トレンチは長さ10m、幅４mを測る。地表下0.8m（標高35.4m）で平坦な地山面を検出



1．暗褐色(10YR3/4)土腐植土
2．褐色(7.5YR4/6)土赤褐色(5YR4/8)土のブロック混じる
3．褐色(10YR4/4)砂質土橙色(5YR6/8)土が混じる
4．暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土
5．にぶい褐色(7.5YR5/3)土
6．明褐色(7.5YR5/6)土径5cm大の円礫混じる
7．4に橙色(5YR6/8)土が混じる

第21図　11トレンチ実測図



第22図　出土遺物実測図１
（１・３トレンチ、６トレンチＳＨ30・35）

したが、遺構・遺物は確認できなかった。地山面の上には竹林の土入れに伴う土が複数回にわたり盛られている。　（竹原一彦）

３．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器・土師器・陶磁器・瓦などコンテナ198箱分である。報告にあたっては、弥生土器については、森岡秀人氏の編年(注11)によった。弥生土器は山城第Ⅴ様式にあてはまるが、細別が不明の場合はⅤ－１・２様式を前半、Ⅴ－３・４・５を後半とする大別に従った。古代の土器の器種分類については、奈良文化財研究所の分類(注12)に準拠した。

１）１トレンチ出土遺物（第22図）　１は壺の底部である。旧表土の直上に堆積した茶褐色土（第15層）から出土した。内面はハケ調整、外面底部際にはユビオサエの痕跡が残る。底部径4.4cmを測る。２は鉢の底部である。１と同様の層中から出土した。調整は摩滅のため不明である。撥形に開く脚部を付す。底部径3.4cmを測る。３は高杯の脚部である。脚柱は筒状である。脚柱径は4.7cmを測る。以上の土器は弥生時代末頃のものとみられる。

２）３トレンチ出土遺物（第22図）

４は高杯の脚部である。裾開きの形状である。外面はナデ調整である。杯部際の脚径は３cmを測る。弥生時代末頃のものとみられる。

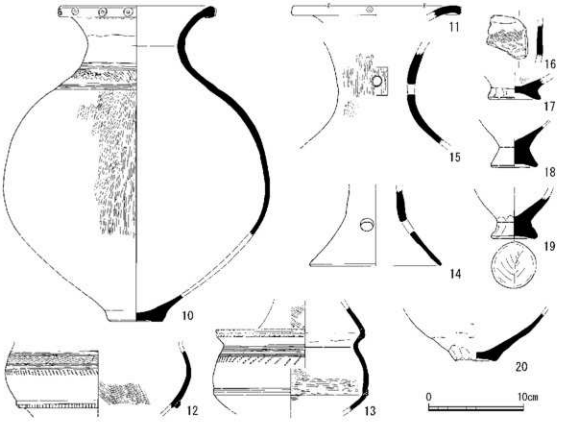
３）６トレンチ出土遺物

竪穴建物ＳＨ30出土遺物（第22図）　５は壺底部で周壁溝から出土した。内面にはハケ調整の痕跡が残

る。外面底部際はユビオサエで、それ以上はナデ調整である。6は甕で周壁溝の南東部から出土した。胴部下半が周壁溝底面に接した斜位の状態にあった。遺構の削平に対応するように、口縁から胴部下半にかけての部分が斜めに欠失している。器高は19.5cmで、口径は復元で16.7cmである。外面の体部下半は右上がり、上半は平行タタキである。体部外面の最大径より以下は、底部を除いてススが付着する。内面は摩滅しており調整は不明である。肩部内面には斜めに帯状のコゲがつく。7の高杯も周壁溝内において、甕のすぐ東から出土した。溝底面には接していない、正位の状態で検出した。口縁端部及び脚を欠いている。杯部は深い皿形で、短い脚部をもつ小型品であろう。内外面が摩滅しており、調整は不明である。山城Ⅴ-3・4様式にあたる。

竪穴建物ＳＨ35出土遺物（第22図）　8は広口壺ないし器台の口縁部で、全面が著しく摩滅しており、本来の器壁の厚さを残していない。粘土を貼り付けて垂下する口縁をつくる様子が観察できるが、文様等の有無は不明である。9は鉢体部の小片で、手焙形土器の可能性もある。貼り付けの突帯をめぐらすが、全面が摩滅しており、突帯の刻みの有無や内外面の調整は不明である。時期は、鉢が受口状口縁をもつものとみられ、同様の鉢が増加するのが山城第Ⅴ様式後半であることから、この時期が考えられる。

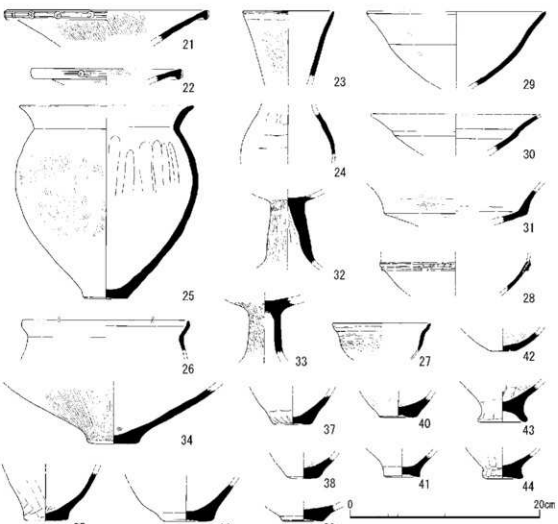
竪穴建物ＳＨ40出土遺物（第23図）　10は広口壺で主柱穴ＳＰ78から出土した。口縁部～体部片と、それの同一個体とみられる底部片である。口縁部は肥厚する端部に円形竹管浮文を貼り付ける。頸部から肩部にかけての外面に２帯の櫛描直線文を描き、その間に櫛描波状文をめぐらせ



第23図　出土遺物実測図２（ＳＨ40）

る。体部外面はミガキ調整で、内面はナデ調整である。11～20は竪穴部埋土から出土した。11は広口壺ないし器台の口縁部の小破片であり、口径は不明である。口縁部端部に円形竹管浮文を貼り付ける。12は鉢ないし手焙形土器で、体部上半に櫛描直線文・櫛描波状文、列点文を描く。体部下半には突帯を貼りつけ、突帯上を刻む。内面にはハケメを残す。13は手焙形土器の覆部から底部下半までの破片である。受口状を呈する口縁部には列点文を施し、頸部には櫛描直線文と列点文を施す。胴部最大径の屈曲部には低い突帯をめぐらせる。外面はハケ調整ののちナデ調整である。内面にはハケメを残す。14は高杯の脚部である。円形のスカシが3か所施される。外面は摩滅しており、内面はナデ調整である。15は器台の脚部で、円形のスカシが5～6か所施される。外面は縦方向のミガキ調整で、内面はナデ調整である。16の土器片は波状文と綾杉状の文様を施すものである。天地は不明である。17～20は底部片である。19はやや凹む底部の外面に、細く鋭い線による木の葉状の痕跡を残す。時期は、手焙形土器の存在から山城Ⅴ-3様式以降であり、球胴化した広口壺も同様である。

竪穴建物ＳＨ60出土遺物（第24図）　21・22は広口壺ないし器台の口縁部で、肥厚する口縁端



第24図　出土遺物実測図3（ＳＨ60）

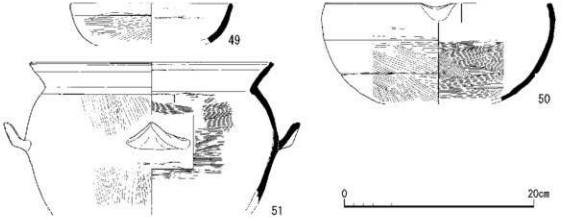
部に擬凹線文を施し、円形竹管浮文を貼り付ける。ともに口縁部の内外面をミガキ調整する。23は長頸壺の口縁部で、口縁部外面に２条の弱い沈線が横走する。外面はミガキ調整である。24は壺の肩部ないし胴部下半と思われる破片である。内外面をナデ調整し、外面には接合痕を残す。25は甕で、全体の約1/2が残存している。外面はハケ調整で、内面はナデ調整である。26は受口状口縁の甕の小破片であり、口径は不明である。内外面とも摩滅している。27は受口状口縁の小型鉢である。口縁部外面には低い幅広の突帯を貼り付ける。頸部から体部にかけては太いハケ調整をし、列点文を施す。内面はナデ調整である。28は鉢ないし手焙形土器の体部片で、貼りつけた突帯上に沈線を横走させた後に刻みを施す。29は高杯の杯部が深い皿形となる破片である。内外面とも摩滅している。30・31は皿形の杯部で、いずれも内外面が摩滅している。31は不明瞭ながら波状文をもつようにもみえる。32・33は高杯の脚部で、ともに外面をミガキ調整し、32は内面に絞り目をもつ。34～44は底部片である。時期は甕がハケ調整であることから古くみられるが、口縁端部を丸くおさめられており山城Ｖ－３・４様式ごろと考えられる。

竪穴建物ＳＨ38出土土器（第25図）　45は広口壺ないし器台の口縁部で、肥厚する口縁端部に３条の擬凹線文を巡らせ、竹管円形浮文を貼り付ける。内面に波状文を施す。46は底部片である。47は有孔の土製円板で、半分ほどが欠失している。全体に扁平であるが、孔の周辺のみ凹凸がある。焼成前の穿孔に関わるものと思われる。全体をナデ調整しており、外縁部には面をもつ。復元径は5.3cmである。

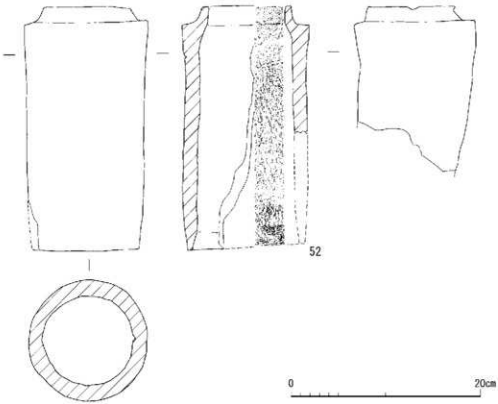
竪穴建物ＳＨ53出土遺物（第25図）　48は受口状口縁の破片である。全体に摩滅している。

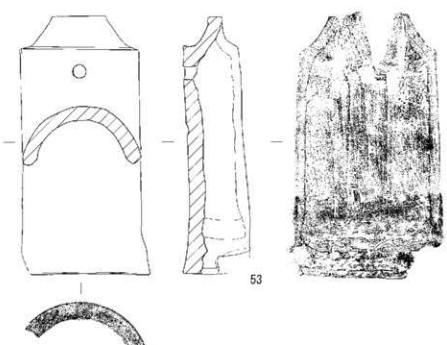
土師器焼成坑ＳＹ45出土遺物（第26図）　49は小型の土師器鉢で、口径23.8cm、残存高4.0cmである。50は土師器鉢で、内湾する口縁をもったボウル形のものである。残存する口縁の一部が歪んでいることから、片口付であるとみられる。体部外面の下半に、弱い沈線を横走させた後、ハケ調整する。内面もハケ調

第25図　出土遺物実測図４
（ＳＨ38・53）



第26図　出土遺物実測図５（ＳＹ45）





第27図　出土遺物実測図6（ＳＹ55）

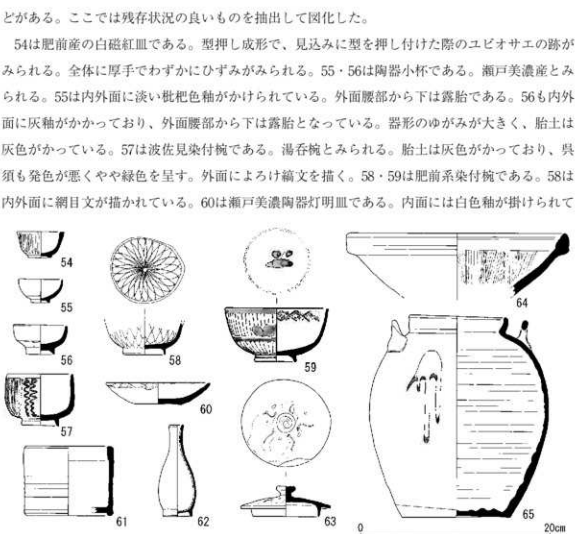
整である。口径23.9cm、残存高10.4cmを測る。51は土師器甕Ｂで、把手が２つ付く。把手の形状は三角形を呈し、外側面が下に垂れる。口径25.2cm、残存高15.2cmを測る。把手の形状から奈良時代のものとみられる。（加藤雅士）

煙管状窯ＳＹ55出土遺物（第27図）　52は瓦質土管、53は軒丸瓦で、煙管状窯ＳＹ55の焼台として使用されていた。52は土管を縦に半裁したものである。全長25.6cm、胴部直径12.8cm、胴部の厚さ1.6cmを測る。片方の先端部は結合部として玉縁状の突起部を設ける。突起部は直径9.5cm、長さ2.0cmを測る。内面には布目圧痕が残り、突起の反対側下端は斜めに面取りする。53は玉縁を有する軒丸瓦で、瓦当面を欠く。全長27.2cm、幅12.4cm、胴部の厚さは1.6cmを測る。胴部の長さは23.8cm、玉縁の長さは3.4cmを測る。胴部玉縁近くに固定用の孔がある。外面はケズリで、内面には縦方向の横骨痕が残る。焼台据付時の内側に位置する部分の内外面は、二次焼成に伴い黒色炭素が抜けて胎土の白色に戻っている。この白色化は52にも同様に認められる。

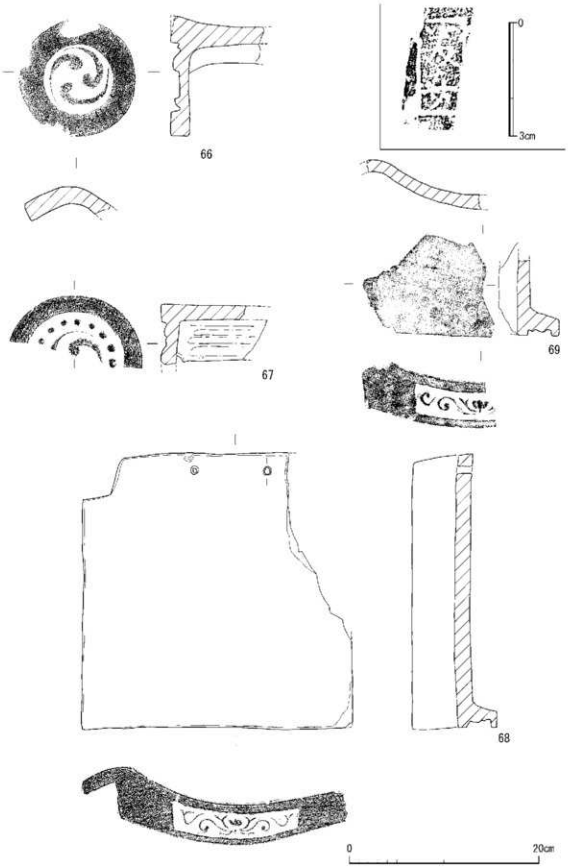
（竹原一彦）

土坑ＳＫ32出土遺物（第28図）　土坑ＳＫ32から出土した遺物には、陶磁器、瓦、伏見人形などがある。ここでは残存状況の良いものを抽出して図化した。

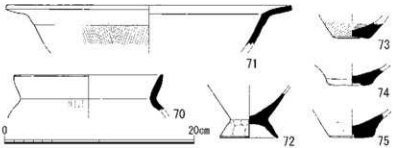
54は肥前産の白磁紅皿である。型押し成形で、見込みに型を押し付けた際のユビオサエの跡がみられる。全体に厚手でわずかにひずみがみられる。55・56は陶器小杯である。瀬戸美濃産とみられる。55は内外面に淡い枇杷色釉がかけられている。外面腰部から下は露胎である。56も内外面に灰釉がかかっており、外面腰部から下は露胎となっている。器形のゆがみが大きく、胎土は灰色がかっている。57は波佐見染付椀である。湯呑椀とみられる。胎土は灰色がかっており、呉須も発色が悪くやや緑色を呈す。外面によろけ縞文を描く。58・59は肥前系染付椀である。58は内外面に網目文が描かれている。60は瀬戸美濃陶器灯明皿である。内面には白色釉が掛けられて



第28図　出土遺物実測図７（ＳＫ32）



第29図　出土遺物実測図８（ＳＫ32）



第30図　出土遺物実測図９（遺物包含層）

おり、外面は口縁部以外露胎である。見込みに目跡が３つみられる。口縁部には煤が付着している。61は瀬戸美濃陶器筒型香炉である。内面口縁部から外面体部にかけて鉄釉をかける。体部には圏線を３本巡らす。底部には墨書が確認できるが、判読不明である。62は陶器徳利である。信楽産とみられる。いわゆる御神酒徳利と呼ばれる小型の徳利である。外面には濃い緑色釉がかけられており、高台は露胎である。内面は口縁部にのみ釉がかかる。63は京・信楽系陶器蓋である。土瓶の蓋で、つまみをもつ。上面にのみ灰オリーブ色の釉薬がかけられ、イッチンで模様が描かれる。64は堺擂鉢である。小型の擂鉢で、胎土に１mmほどの長石を含む。65は瀬戸美濃陶器壺である。光沢のある褐釉が内外面に施され、さらに鉄釉が掛け流されている。外面底部は露胎である。耳を２つもつ。陶磁器以外の遺物では伏見人形が出土している。形がわかるものとしては、眷属狐が少なくとも２個体分ある。

これらの組成からみて、ＳＫ32から出土した土器・陶磁器類は、いわゆる日用雑器で占められていることがわかる。また、時期については江戸時代後期に収まるものである。　（岡田健吾）

66は桟瓦の丸瓦瓦当部である。文様は三つ巴文のみであり、尾は左巻きである。外縁は幅広い。直径12.2cmを測る。67は巴文軒丸瓦である。瓦当面は直径12.5cmを測る。文様は右巻きの三つ巴と珠文からなる。68・69は桟瓦である。68はほぼ完形であるが、右尻隅部分を欠損する。規模は、幅29cm、長さ28.8cm、厚さは1.5～1.7cmを測る。左尻隅を３×４cmの範囲で方形に切り欠く。尻部の中央付近に２孔を空ける。瓦当部は幅22cm、高さ4.2cmを測る。文様部は中央付近に狭く配置され、両脇の外縁部が広い。

68は唐草文の先端部が分岐して終わるが、69は唐草文の先端が内側に反転して丸くおさめる。また、端面に長方形枠内に「義安」の文字を配した押印をもつ瓦が出土している。　（竹原一彦）

包含層出土遺物（第30図）　70は中央部地区を精査中に出土した。土師器の甕である。71も中央部地区を精査中に出土した。古代の土師器の鍋である。72～75は底部である。75は中央部地区を精査中に出土したもので、72～74は中央部地区から北部地区にかけての、竪穴建物ＳＨ60から２号窯（ＳＹ50）の間を精査中に出土したものである。　（加藤雅士）

４．小結

１）弥生時代の竪穴建物

八幡市による美濃山廃寺下層遺跡第11次調査では弥生時代後期の竪穴建物を９棟検出している。[注16] また、当調査研究センターによる美濃山廃寺下層遺跡第９・10次調査では15棟の竪穴建物を検出

している。[注17] 本報告の美濃山廃寺下層遺跡第12次調査でも弥生時代の竪穴建物を報告したが、明瞭な周壁溝を検出したものがある一方、断片的な溝や落ち込みを積極的に竪穴建物と評価したものも含まれている。また、ＳＨ57とＳＨ99は遺物の出土がない点に注意が必要である。しかし、周辺での検出状況等から、いずれも弥生時代後期の竪穴竪物と判断して合計９棟を報告した。よって一連の調査で検出した弥生時代後期の竪穴建物は合計で33棟となる。竪穴建物から出土した遺物の量は付表１のとおりである。

２）奈良時代の遺構

６トレンチでは掘立柱建物を２棟検出した。目隠し塀である柵列ＳＡ106を伴う２間×４間の掘立柱建物ＳＢ105と、総柱建物ＳＢ107である。この北方では東西塀を２条検出している。それぞれの柱穴からは、遺構の年代を決定できる遺物の出土はないが、美濃山廃寺第６～８次調査区の状況から、美濃山廃寺の一角を構成する建物群であることは間違いない。まず６トレンチで検出した掘立柱の遺構の先後関係を整理する。遺構の切り合いから確実に分かるのは、「ＳＢ105・ＳＡ106→ＳＢ107」という順序である。建物方位は、ＳＢ107がほぼ正方位で、ＳＢ105・ＳＡ106は北で３°西に振れている。

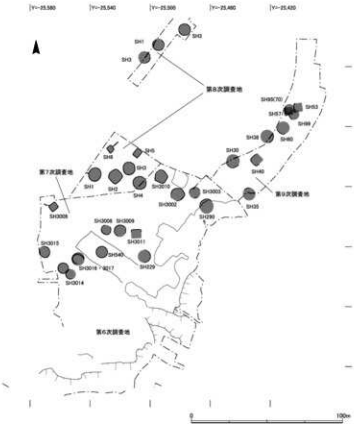
このＳＢ105・ＳＡ106の主軸に対して直角になるのは、東で３°北に振れる柵列ＳＡ109である。どちらも美濃山廃寺における建物群の北東端部に位置し、距離も離れていないことから、ＳＢ105・ＳＡ106とＳＡ109が同時期とみなすことができるだろう。つまり「ＳＢ105・ＳＡ106＝ＳＡ109→ＳＢ107」となる。残る柵列ＳＡ108は東で５°北と振れが大きいことから、正方位をとるＳＢ107より新しくは位置づけにくい。もっとも新しいＳＢ107が正方位をとることから、ＳＡ106との比較で単純に方位の振れが大きい方が古いと考えると、「ＳＡ108→ＳＢ105・ＳＡ106＝ＳＡ109→ＳＢ107」となる。ここで第６～８次調査の成果を参照してみよう。第Ⅱ－２期は第７次調査区の北方で総柱建物が多く建てられている点を評価すると、総柱建物ＳＢ107があてはま

付表１　竪穴建物出土弥生土器数量表

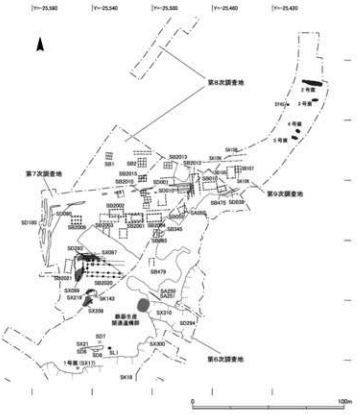
	口縁部					合計	底部				合計
	a	b	c	d	その他不明		a	b	c	その他不明	
	精製器種	肥厚	甕（外反）	甕（受口）			平・窪	高台	高杯器台		
ＳＨ30	1		1		3	5	5				5
ＳＨ35	1	1		1		3					0
ＳＨ40	3	3	5	2	4	17	13	5			18
ＳＨ60	1	3	3	2	2	11	24	2		2	28
ＳＨ38	1	1	1		2	5	3				3
ＳＨ53						0	3				3
ＳＨ57						0					0
ＳＤ70	4		2	1	2	9	4			1	5
ＳＨ95						0					0
ＳＨ99						0	1				1

※土器片は、おおむね2cm以上を対象として、個体数を数えた。口縁部から底部まで残存しているものは、口縁部とした。
　口縁部は、口縁端部が残存している破片を対象とした。aは精製器種と考えられる口縁片のうち、bにあてはまるものを除いたものである。bは口縁端部を肥厚させた口縁片で、広口壺や器台と考えられるものである。cは外反する甕の口縁片。dは受口状の口縁片で、甕ないし鉢である。
　底部はaが平底と窪み底のもの。bは高い高台状の形態をとるもの。cは高杯や器台と考えられるものである。

る可能性がある。しかしこれには、第Ⅱ－２期の建物方位で正方位をとるものが少ないという難点がある。ただし、第Ⅱ－２期や第Ⅲ期において掘立柱建物が東西棟を指向するのに対し、第Ⅱ－１期では南北棟の建物が比較的建てられており、ＳＢ107に先行するＳＢ105・ＳＡ106は南北棟で、第６・７次調査区のＳＢ2012などと対照的に位置しており、想定として最も調和的である。ＳＡ108が第Ⅰ期まで遡るかについては不明である。これら掘立柱建物群は、第６・７次で検出された掘立柱建物群とあわせて、生活空間である「大衆院」（第Ⅰ群）と先の報告では評価されている。東西塀であるＳＡ108・109の北方では掘立柱建物が検出できないが、瓦窯群や土師器焼成坑ＳＹ45を検出しており、生産に関連する遺構がひろがる。よってＳＡ108・109は、生活空間と生産空間を画する塀であったと考えられ、仏地・僧地としての寺域の北を画する塀であると評価できる。ただし八幡市による第８次調査で検出された柱穴列１・２とは柱筋を違えており、寺域の北を画すのは断続的な塀であった可能性があ



第31図　美濃山廃寺下層遺跡遺構配置模式図（注12文献より引用・加筆）



第32図　美濃山廃寺遺構配置模式図（注12文献より引用・加筆）

る。

土器焼成坑ＳＹ45は方形の掘形をもち、側面と底面に焼土が認められる。掘形の各辺が立ち上がっており、奥壁・前壁をもたない。土師器焼成坑の分類で、ＣⅠ類[注18]にあてはまるとみられる。底面の焼土直上に広がる土師器は甕類を中心に杯・鉢がある。とくに甕類の破片は２～３cmに細片化したものが多く、焼成に失敗したものが取り上げられず残された可能性がある。また、甕の口縁部が口縁内面を下に、直接焼土の上に残っていることから、焼成にあたって甕が逆位に据えられたとみられる。先に述べたように、ＳＡ108・109によって美濃山廃寺の生活空間と生産空間が画されていたと考えられるが、ＳＹ45によって、それは瓦のみではなかったことがわかる。ＳＹ45の検出は美濃山廃寺全体を考えるうえでも重要な発見の一つである。

３）その他の遺構

煙管状窯ＳＹ55と土坑ＳＫ07・32を検出した。煙管状窯ＳＹ55は、焼台の丸瓦などから19世紀の年代が与えられる。土師器窯などが大型化するのに対して、小型窯とされるもので、土師器や土人形の焼成、あるいは陶磁器の素焼きや色絵焼成に用いられるものである。窯の基本構造や焼成方法には、これらの用途の間で大きく変わらないため、ＳＹ55に関してもその構造のみでは何を焼成していたかは不明である。

土師器・土人形・陶磁器などは、いわば“京都らしい”ものである。一方でその生産遺構の検出が限られており、なかでも類例のあまり知られていない南山城地域において、本例は貴重な検出例になる。（加藤雅士）

（２）美濃山瓦窯跡群

1．調査経過

平成23年度に実施した美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次調査に際して、同遺跡が位置する丘陵の東斜面部で瓦窯４基（２～５号窯）を検出した。美濃山廃寺第６次調査において寺域の南西で検出した１基（１号窯）に加え、寺域の北東で新たに検出した４基の瓦窯（２～５号窯）を含め、これら５基の瓦窯を美濃山瓦窯跡群と称することとなった。新たに見つかった４基の瓦窯は、協議の結果、平成23年度には２号窯の窯体及び灰原の一部の調査で完了するとともに、３～５号窯については上面輪郭の検出のみにとどめた。平成24年度は、２～５号窯の窯体内の完掘調査を行った。その結果、２号窯では平窯が少なくとも２回造り替えられていることが判明するとともに、３号窯は窖窯、４・５号窯は平窯であることがわかった。また、整理作業の段階で、４号窯から出土した瓦に「西寺」の押印があることが判明した。

2．瓦窯跡の調査

今回は、美濃山２～５号窯の４基の瓦窯の調査を行った。１号窯についてはすでに報告をしているので[注19]、今回は２～５号窯について報告する。なお、窯跡番号は検出順に付した。

１）２号窯（第33・34図）

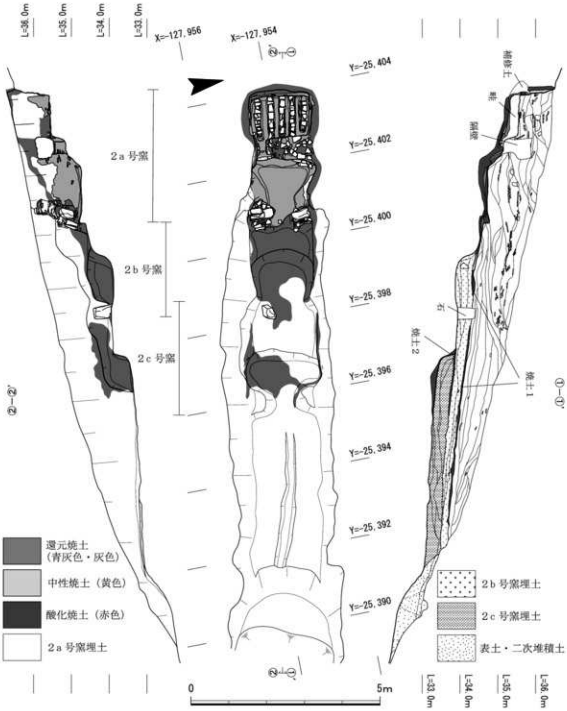
２号窯は、窯跡群の北端に位置する。検出長は13mである。調査の進展に伴い、丘陵斜面を溝状に掘り込んで構築されたもので、有畦式平窯が東から西の丘陵部に向かって順次焼成室を掘り進めて改築したもので、少なくとも２回造り替えられていることが判明した。窯の主軸はＮ－79°－Ｗで、ほぼ東西方向である。東側に焚口を開口する。それぞれの窯にａ、ｂ、ｃの枝番号を付した。断面観察によると、最も西側に構築された２ａ号窯の焚口から東側斜面に向かって堅く締った焼土１が下降気味に延びる。この焼土１の表面が２ａ号窯の操業面と考えられる。この焼土１の下層には２ａ号窯構築時の盛土及び２ｂ号窯操業時の堆積土がみられる。この層中から美濃山廃寺軒平瓦Ｖ型式が出土している。さらに焼土１から0.48m下層に堅く締った焼土２が２ｂ号窯焚口と考えられる部分から東側斜面に向かって下降気味に延びる。この焼土２の表面が２ｂ号窯の操業面と考えられる。この焼土２の下層には２ｂ号窯構築時の盛土及び２ｃ号窯操業時の堆積土がみられる。焼土２の0.4m下層は大阪層群の地山である。このような状況から、２号窯は、２ｃ→２ｂ→２ａの順に構築されたことがわかる。

２ａ号窯は、全長3.5mを測る。窯体は地山をほぼ垂直に掘り込み、掘り込んだ窯壁には薄く粘土を貼って構築していたものとみられる。また、操業中に崩落した壁面に暗赤色の焼土を詰めて、瓦片で押えて粘土を塗り込めた状況が残存する。焼成室は長さ1.25m、幅1.6mを測る。床面には平瓦片と粘土を積み上げて構築した５条の畦を設け、炎道６条で構成させている。隔壁は厚さ0.6mで、平瓦片と粘土を交互に積み上げて構築する。下部に３口の通焔孔を設ける。炎道２

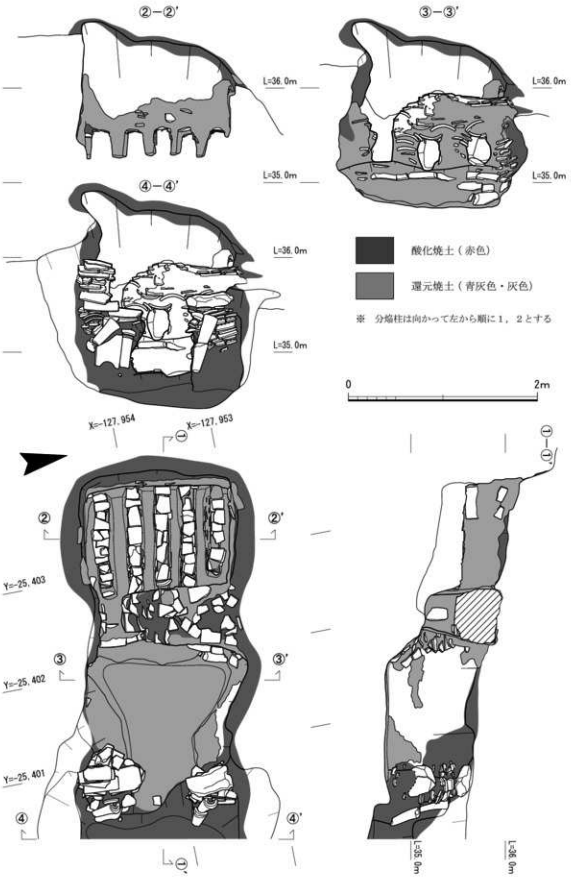
条に１口の通焔孔が対する。

燃焼室は長さ1.65m、最大幅1.7mを測る。焼成室床面と燃焼室床面は0.4mの段差がある。東側中央に焚口を設ける。焚口壁は石材を芯にして粘土や瓦片を積み上げて構築する。外側には鬼板などを貼り付ける。焚口には、両側に瓦当部のはずれた軒丸瓦２本を門柱状に立てる。

２ｂ号窯は、側壁の被熱痕跡や凹凸などから、２ａ号窯の焚口付近を焼成部奥壁としていたも



第33図　２号窯実測図



第34図　２ａ号窯実測図

のとみられる。焚口と考えられる部分には立石が残存する。全長2.5m、焼成部長1.3m、焼成部幅1.6m、燃焼室長1.2m、燃焼室幅1.6mを測る。焼成室床面と燃焼室床面の段差は0.5mである。なお、規模は、当初の壁面などが残存していないので、あくまで推定である。焼成室長には隔壁を含む。

２ｃ号窯は、側壁の被熱痕跡や凹凸などから、２ｂ号窯の焚口付近を焼成部奥壁としていたものとみられる。全長３m、焼成室長1.6m、焼成室幅1.8m、燃焼室長1.4m、燃焼室幅２mを測る。焼成室と燃焼室の床面の段差は0.45mである。２ｃ号窯焚口から東側斜面に向かって幅0.2～0.4m、深さ0.1mの素掘り溝が3.5mにわたって延びる。２ｃ号窯に伴う排水溝と考えられる。なお、規模は、当初の壁面などが残存していないので、あくまで推定である。焼成室長には隔壁を含む。

２）３号窯（第35図）

３号窯は、２号窯の南側９mに位置する窖窯である。近世の土取りによって焼成部の上半が削平されている。残存長は4.1mである。焼成部の一部と燃焼部、焚口、前庭部が残る。窯体主軸はN－94°－Wで、ほぼ東西方向である。東側に焚口を開口する。窯体内には天井部とみられる窯壁片が落ち込んでいる。窯壁片にはスサが含まれており、天井部をスサ入り粘土で構築した半地下式窖窯とみられる。

焼成部は長さ1.8m分が残存している。最大幅は1.3mを測る。床面傾斜角は19.5°である。床面には高さ0.1mの段を設ける。段幅は0.2～0.3mである。５段分が残存する。有段式窖窯である。

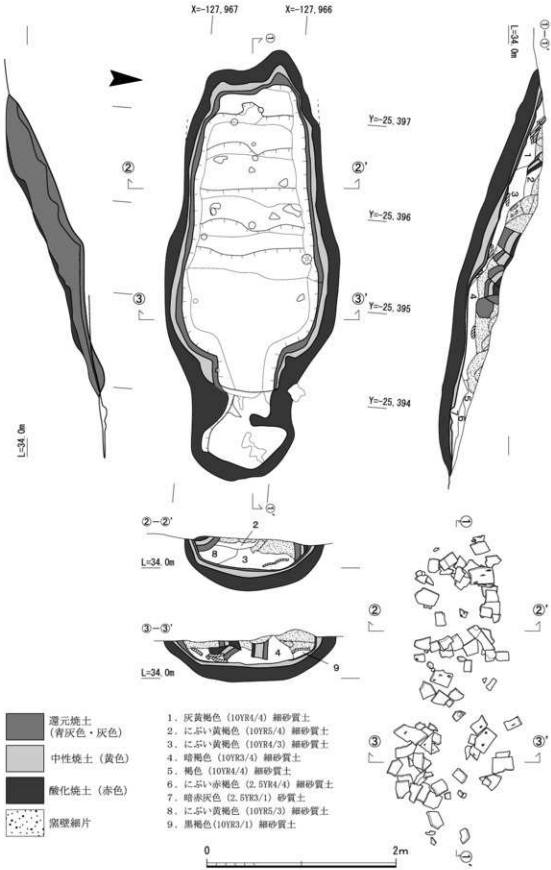
燃焼部は長さ１m、最大幅1.4mを測る。西側は焼成部に向かってスロープ状になる。東側は南北両側から窯壁が窄まり、中央部が焚口となる、焚口は、長さ0.5m、幅0.6～0.7mを測る。焚口の西側には長さ0.8m、幅0.85mにわたって前庭部が残存している。前庭部の東側斜面には、黒色砂質土の灰原がわずかに散在している。最大層厚は0.2mであり、遺物はわずかである。

焼成部から燃焼部にかけて、瓦が多数出土した。ほとんどが平瓦であり、丸瓦は少ない。平瓦は、凸面に平行タタキ（H-B1類）、もしくは平行タタキ・縄タタキ（H-B2類）を併用するものが多数を占める。

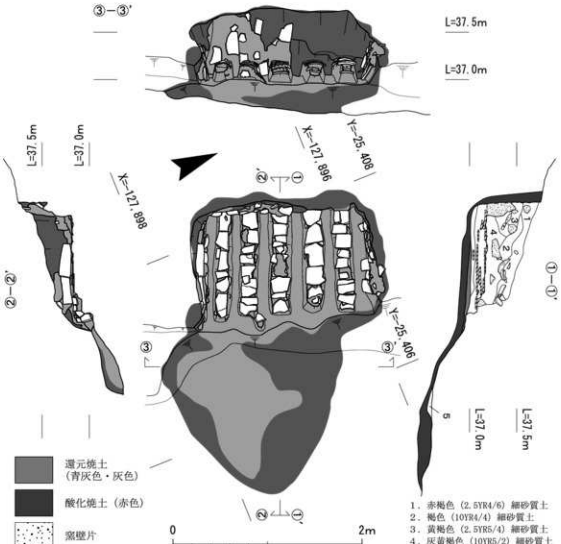
３）４号窯（第36図）

４号窯は、３号窯の南側21mに位置する有畦式平窯である。後世の削平のため残存状況は良くなく、燃焼室が残存するのみである。燃焼室は、底部の焼土がわずかに残存する。残存長は3.05mである。窯の主軸はN－66°－Wで、ほぼ東西方向である。東側に開口する。窯壁は地山をほぼ垂直に掘り込み、薄く粘土を貼って構築していたものとみられる。奥壁や側壁には、２ａ号窯と同じく、瓦片や粘土で補修した痕跡が残る。

焼成室は長さ1.2m、幅1.75mを測る。床面には平瓦片と粘土を積み上げて構築した５条の畦を設け、炎道６条を構成する。隔壁は残存していない。この畦には、それぞれに分焔柱が取り付いていたものとみられる。後述する５号窯と同様の形態であったものと考えられる。１か所の通焔孔に１条の炎道が対応していたものとみられる。なお、北側の畦から、「西寺」銘瓦が、構築材として出土した。


X=-127,967
X=-127,966
Y=-25,397
Y=-25,396
Y=-25,395
Y=-25,394
L=34.0m
②—②'
③—③'
L=34.0m
還元焼土
(青灰色・灰色)
中性焼土（黄色）
酸化焼土（赤色）
窯壁細片
1．灰黄褐色（10YR4/4）細砂質土
2．にぶい黄褐色（10YR5/4）細砂質土
3．にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂質土
4．暗褐色（10YR3/4）細砂質土
5．褐色（10YR4/4）細砂質土
6．にぶい赤褐色（2.5YR4/4）細砂質土
7．暗赤灰色（2.5YR3/1）砂質土
8．にぶい黄褐色（10YR5/3）細砂質土
9．黒褐色(10YR3/1）細砂質土
0
2m

第35図　3号窯実測図

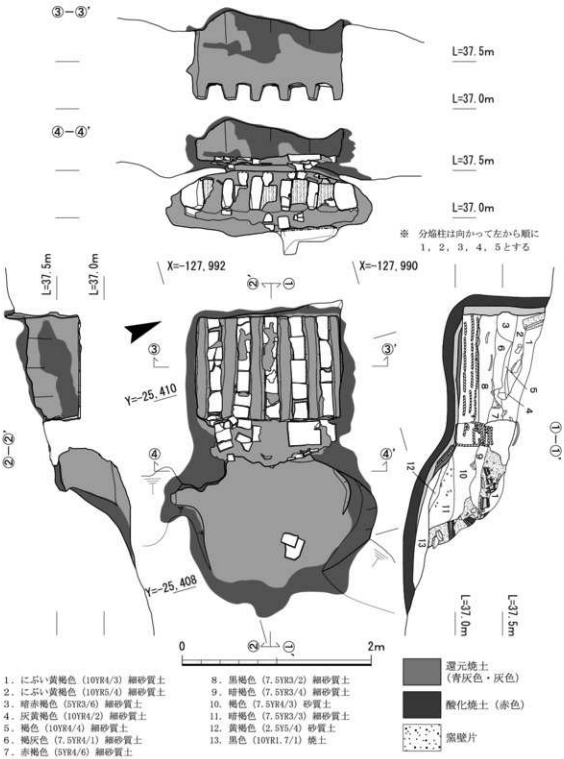


第36図　4号窯実測図

4）5号窯（第37図）

5号窯は、4号窯の南側3mに隣接して位置する有畦式平窯である。窯の主軸はN－78°－Wで、ほぼ東西方向である。東側に開口する。燃焼室の東半部が削平され、その部分は床面の焼土が残る。残存長は3.2mである。燃焼室は、天井部の南西部分が比較的良く残存している。窯壁は地山をほぼ垂直に掘り込み、薄く粘土を貼って構築していたものとみられる。

焼成室は長さ1.1m、幅1.6mを測る。床面には平瓦片と粘土を積み上げて構築した5条の畦を設け、炎道6条を構成する。燃焼室側に5本の分焔柱を立て、6口の通焔孔を設ける。分焔柱は、平瓦片と粘土を交互に平積し、燃焼室側には丸瓦を立てて貼り付け、焼成室側には平瓦片を立てて貼り付けて構築する。炎を滑らかに焼成室に導く工夫と考えられる。分焔柱の焼成室から燃焼室にかけての厚さは0.3mである。分焔柱の上に平瓦片と粘土を交互に積み上げて隔壁を構築する。分焔柱には畦が取り付いている。炎道1条に1口の通焔孔が対応する。なお、焼成室埋土から9世紀頃と考えられる須恵器杯が出土した。



第37図　5号窯実測図

燃焼室は長さ1.8m、最大幅2.15mを測る。焼成室と燃焼室の床面は0.4mの段差がある。床面から残存している天井部までの高さは0.7mを測る。燃焼室は操業停止後焼成室側から土が流入してある程度埋まってから、天井部が崩落した状況が観察できる。　（引原茂治）

3．出土遺物

1）瓦類

美濃山瓦窯跡群で出土した瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦をはじめ、大量の丸瓦・平瓦、面戸瓦・熨斗瓦などの道具瓦がある。軒瓦や丸瓦・平瓦の分類については、昨年度報告した美濃山廃寺の分類に準じるものとする。[注20] また、必要に応じて、美濃山廃寺の時期区分を使用する場合がある。[注21]

A．軒瓦

美濃山瓦窯跡群で出土した軒瓦の種類と点数を付表２にまとめた。軒瓦が出土した窯跡は２号窯が圧倒的に多いが、これは窯本体の遺存状況によるためで、焼成室の一部しか遺存していなかった４号窯や、灰原が遺存していなかった５号窯ではほとんど出土していない。２号窯で焼成された軒瓦の大半は美濃山廃寺に供給されたのではなく、同廃寺以外の寺院や官衙等に供給されたと思われるが、供給先を明らかにできた軒瓦は多くない。また、２・４・５号窯は平窯であるが、その構築材として美濃山廃寺の第Ⅰ期の軒瓦が転用されている場合もあった。

①軒瓦の分類

美濃山廃寺や美濃山瓦窯跡群の調査を進めていた平成23年度の時点で、美濃山瓦窯跡群が美濃山廃寺の造営に伴って操業されていた窯跡であろうという前提に立って、美濃山廃寺出土の軒瓦に、美濃山瓦窯跡群出土の軒瓦も加えて型式分類を行った。その結果、軒丸瓦を９型式、軒平瓦を６型式に分類した。以下では、その概要を説明する。[注22] なお、今回新たに確認した軒瓦型式はない。

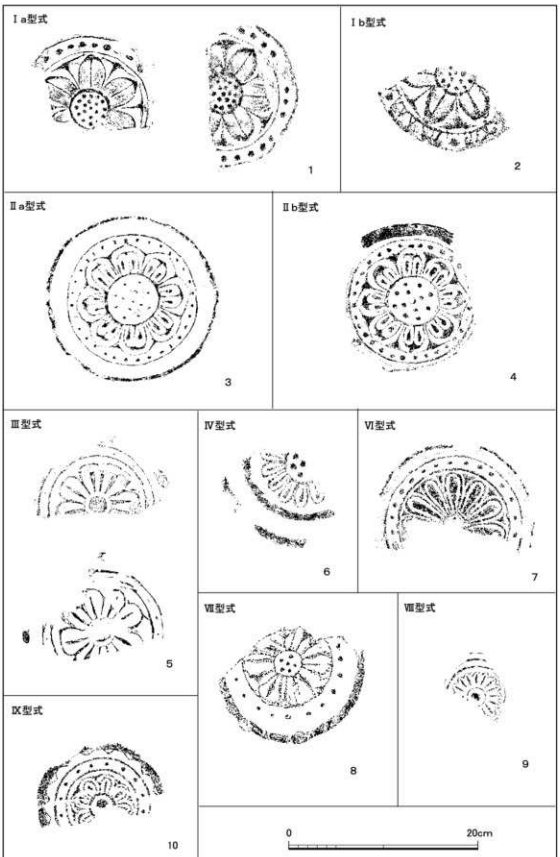
a．軒丸瓦の型式分類（第38図）

美濃山廃寺ならびに美濃山瓦窯跡群の発掘調査で出土した軒丸瓦は９型式に分類できる。このうち、Ⅰ・Ⅱ型式は細部の違いにより細分できる。なお、美濃山瓦窯跡群では軒丸瓦Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ型式は出土していないので、以下の記述では省略する。

Ⅰ型式（第38図１・２）　単弁六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は16cm前後に復元できる。蓮弁は中央に稜線を入れ、根元が窪み、弁端にいくに従って徐々に反り上がる、受け花状で、６弁である。中房の蓮子は1+6+16である。外区には大粒の珠文が密に巡る。外区に線鋸歯文を施すものがある。線鋸歯文が圏線上にはみだしている例があることから、線鋸歯文がみられないものをⅠａ型式、線鋸歯文がみられるものをⅠｂ型式とする。Ⅰｂ型式はⅠａ型式の笵に手を加えたと考えられる。瓦当と筒部は、瓦当裏面上端で接合する。接合部である瓦当裏面にはヘラにより刻みを入れる。瓦当部側面はケズリあるいはナデ、裏面の調整はナデである。胎土は密であまり砂粒を含まないものや、砂粒を含むやや粗いものなどがある。焼成は軟質のものが多い。色調は灰色や黄灰色を呈する。大阪府枚方市九頭神廃寺と同文様[注23]であるが、九頭神廃寺の瓦当径は17.1cm前後と美濃山廃寺のものよりも一回り大き

付表２　軒瓦出土点数表

	軒丸瓦				軒平瓦				
型式名	Ⅰｂ型式	Ⅲ型式	Ⅶ型式	Ⅷ型式	Ⅰｂ型式	Ⅱａ型式	Ⅳ型式	Ⅴ型式	Ⅵ型式
出土点数	1	2	12	2	1	1	3	12	3



第38図　美濃山廃寺出土軒丸瓦分類図(注20文献53頁より引用)

く、別の笵によるものと考えられる。Ⅰａ・Ⅰｂ型式ともに美濃山廃寺第Ⅰ期に位置づけられ、創建時の軒丸瓦の１つである。美濃山瓦窯跡群ではⅠｂ型式が１点確認されたのみである。

Ⅲ型式（第38図５）　単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径15cm前後を測り、瓦当厚は3.4～3.7cmと厚手である。外縁は直立し外区には間隔広く小さな珠文を巡らす。内区には弁外郭と弁央を凸線で表現し、中房は小さな半球状を呈する。瓦当裏面には丸瓦部まで布目が連続しており、横置きの一本作り丸瓦である。色調は黄色から黄灰色である。胎土は微細な砂粒を多く含む。Ⅲ型式の瓦当文様は平城宮式6313型式の影響を受けている可能性が高い。Ⅲ型式は美濃山廃寺第Ⅲ－１期に位置づけられ、美濃山廃寺の礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020の建立に伴い、導入されたと思われる。美濃山瓦窯跡群では２点確認されたのみで、いずれの窯でも軒丸瓦Ⅲ型式を生産していたことは確認できなかった。

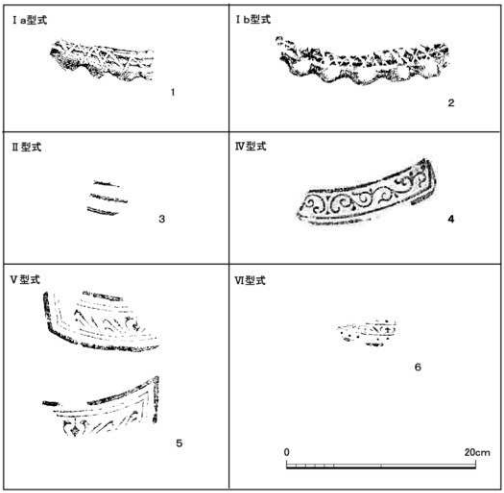
Ⅶ型式（第38図８）　単弁十八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は16cm前後に復元できる。外縁は直立縁であるが、端部は丸みを帯びている。中房は小さく、1+5の蓮子がある。瓦当と丸瓦を別々に作る接合式である。接合部には特に調整を施していないようである。なお、出土資料によると丸瓦部の型式は玉縁を有さない行基式である。色調は灰白色で、焼成は軟質のものが多い。このため、表面はかなり摩滅しており、調整については不明である。山背国分寺（恭仁宮跡）KM11と同文様で、おもに塔跡などで出土しているほか[注24]、八幡市志水廃寺、京田辺市興戸廃寺・普賢寺跡などでも出土している[注25]。Ⅶ型式は美濃山廃寺第Ⅲ－２期に位置づけられる。また、美濃山２号窯から出土しており、同窯で焼成されたものと考える。

Ⅷ型式（第38図９）　単弁十六葉蓮華文軒丸瓦である。瓦当径は13cm前後に復元できる。外縁は突出しており、直立縁ではあるが、内側の角は丸い。外区に二重の圏線がある。内区は４葉以上の蓮華文がある。弁は独立しておらず、弁の根元から中央までは稜線を入れ、弁端は別々に表現している。中房は遺存していない。瓦当と丸瓦部は、瓦当裏面上端で接合される。瓦当裏面の調整はナデである。丸瓦部凸面の調整はケズリ、またはケズリ後ナデである。良好な資料がないため、丸瓦部の型式は不明である。胎土は密で、砂粒をあまり含まない。焼成は良好で、色調は黒灰色ないし暗灰色である。また、胎土や色調は後述する軒平瓦Ⅴ型式に類似しており、セットになる可能性が高い。美濃山２号窯から出土しており、軒平瓦Ⅴ型式とともに同窯で焼成されたものであろう。美濃山廃寺の報告では礎石・掘立柱併用建物ＳＢ2020の補修瓦と考えたが[注26]、美濃山２号窯での出土状況等から美濃山廃寺に供給するためではなく、その他の寺院等に供給するために焼成された可能性が高いと考えられる。なお、Ⅷ型式は美濃山廃寺第Ⅲ－２期に位置づけられる。

ｂ．軒平瓦の型式分類（第39図）

美濃山廃寺ならびに美濃山瓦窯跡群の発掘調査で出土した軒平瓦は６型式に分類できる。このうち、Ⅰ・Ⅱ型式は細部の違いにより細分できる。なお、美濃山瓦窯跡群では軒平瓦Ⅲ型式は出土していないので、以下の記述では省略する。

Ⅰ型式（第39図１・２）　波状重弧文軒平瓦である。瓦当面に３～４条の凹線を施した後、ヘラ



第39図　美濃山廃寺出土軒平瓦分類図(注20文献53頁より引用)

で文様を施すが、文様や粗密などに違いがあるため、３型式に細分できる。Ⅰａ型式は瓦当面にヘラで鋸歯文を施すものである。顎部は3.2～3.4cm間隔に指頭で強く押さえて波状にする。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色ないし黄灰色である。Ⅰｂ型式は瓦当面にヘラで「×」印を密に施す。顎部はおよそ3.6cm間隔に指頭で強く押さえ波状の文様を施す。胎土は密で微細な砂粒を含む。焼成は良好で、色調は灰色ないし青灰色である。Ⅰｃ型式は瓦当面にヘラで「×」印を大きく粗く施す。顎部は3.6～4.0cm間隔に指頭で強く押さえ波状の文様を施す。胎土は密で、焼成はやや軟質で、色調は淡黄色である。美濃山瓦窯跡群ではⅠｂ型式が１点出土したのみである。Ⅰ型式の波状重弧文軒平瓦に類例としては奈良県久米寺瓦窯に出土例がある。(注27)

Ⅱ型式(第39図３)　重弧文軒平瓦である。三重弧文と見られ、弧の先端は尖り気味の形状である。製作技法により２型式に細分できる。Ⅱａ型式は桶巻き作りで凸面に平行タタキを施すものである。胎土は密で、砂粒をあまり含まない。焼成は堅緻なものが多く、色調は灰色である。顎を貼り付ける前にも平行タタキが確認できる。平行タタキを凸面に施す平瓦H-B1類と技法が類似することから、軒平瓦Ⅱａ型式と平瓦H-B1類は同時期のものである可能性が高い。Ⅱｂ型式は凸面に縄目タタキを施すもので、１枚作りの可能性があるものである。ただし、Ⅱｂ型式の出土例は美濃山廃寺でも非常に少なく、詳細は不明である。美濃山瓦窯跡群ではⅡａ型式が１点出

土したのみである。

Ⅳ型式（第39図４）　唐草文軒平瓦である。同笵のものが八幡市志水廃寺で出土しており[28]、同文様のものとしては山背国分寺KH05がある[29]。山背国分寺例に比べると、美濃山瓦窯跡群出土例は外区上辺を省略し、右側辺上部が狭くなっている。胎土は密で微細な砂粒を含み、まれにやや大きな粒径のものが含まれる。焼成は良好で、色調は灰色ないし暗灰色である。美濃山瓦窯跡群で焼成された可能性はあるものの、出土点数が少なく、詳細は不明である。なお、美濃山廃寺では出土していない。

Ⅴ型式（第39図５）　唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向したＣ字の中央に花頭形を配置する。外区の圏線は二重で、唐草文は両側に２転する。胎土や色調、焼成の点で、軒丸瓦Ⅶ型式に類似しており、軒丸瓦Ⅶ型式と軒平瓦Ⅴ型式が組み合う可能性が高い。軒平瓦Ⅴ型式は美濃山２号窯の焼土１下層で多数出土した。出土層位をみると、焼土２直上層からの出土が多く、この層位は２ｂ号窯の操業時に形成された灰原と考えられることから、軒平瓦Ⅴ型式は２ｂ号窯で焼成された軒瓦と考えられる。なお、同笵や同文様の例は知られていない。

Ⅵ型式（第39図６）　均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向したＣ字で、その中にクルス文を置く。外区に珠文を配する。胎土は密で微細な砂粒を含む。焼成は良好で、色調は灰色である。美濃山２号窯から出土したものの、同窯以外の出土例は知られていない。また、小破片の出土のため、美濃山瓦窯跡群で焼成されたものかどうかも不明である。なお、美濃山廃寺では出土していない。

②２号窯出土軒瓦（第40～43図）

76は軒丸瓦Ⅰｂ型式である。２号窯の焼土１下層から出土した。瓦当の1/6程度の破片で、外区の大粒の珠文と内区の弁の一部が残存する。胎土はやや粗く、焼成は良好である。灰黄色を呈する。美濃山廃寺第Ⅰ期の軒丸瓦であるが、本窯跡で出土した経緯については不明である。

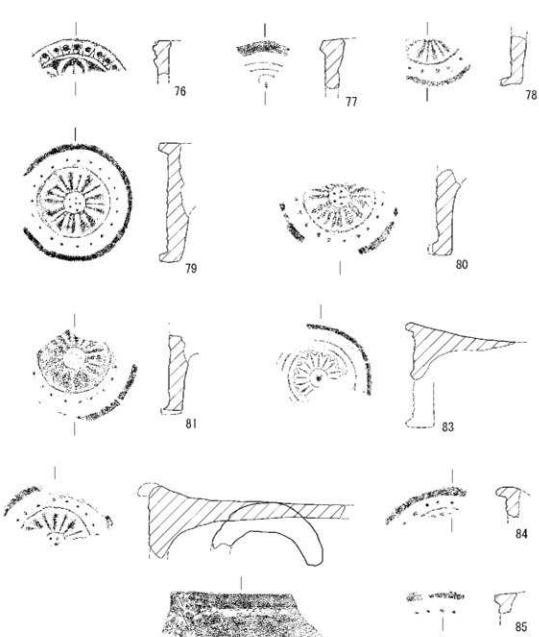
77は軒丸瓦Ⅲ型式である。２ａ号窯の焼成室から出土した。瓦当の1/10程度の破片で、内区のほとんどを欠損する。胎土は密で、焼成は良好である。オリーブ灰色を呈する。美濃山廃寺第Ⅲ－１期の軒丸瓦であるが、本窯跡で出土した経緯は不明である。

78～82は軒丸瓦Ⅶ型式である。79は２ａ号窯焼土１上の黒灰色土、81は焼成室、78・80・82は東端の二次堆積土から出土した。後述する軒平瓦Ⅴ型式に次いで多くの出土点数がある。いずれの個体も、胎土は密であまり砂粒を含まないが、いずれも焼成が軟質で、摩滅の著しいものが多い。灰色ないし灰白色を呈するものが多い。

78は瓦当の1/4程度の破片である。79はほぼ瓦当が遺存する資料である。裏面には丸瓦部との接合あのためのヘラによる切り込み等は確認できない。瓦当径は15.6cm、瓦当厚さ2.9cmである。80は瓦当の1/2程度の破片で、丸瓦部との接合部分が欠損する。81は瓦当の下半部の破片である。

82は瓦当の1/3程度と丸瓦部の一部が残存する。残存長は26.0cmである。丸瓦部凸面は縦方向のナデを施す。瓦当裏面は接合に伴うナデがみられ、丸瓦部の凹面には布目が残る。

84～86はいずれも軒丸瓦Ⅶ型式と推定される小破片である。これらも焼成室や灰原から出土し



第40図　2号窯出土軒丸瓦実測図1

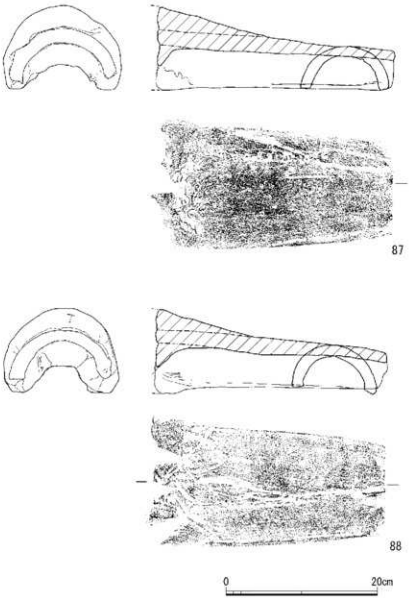
た。84・85は外区の一部、86は内区の一部が残存する。胎土や焼成は79～82に類似する。

83は軒丸瓦Ⅷ型式である。外区の2/3と内区の1/3ほどを欠損するが、瓦当の直径は13cmほどに復元できる。瓦当と丸瓦部の接合方法は不明である。丸瓦部凸面の調整はケズリである。

87・88は瓦当が剥離しているため、詳細な型式は不明であるが、胎土や焼成、色調などから軒

丸瓦Ⅶ型式の丸瓦部である可能性が高い。87・88ともに２ａ号窯の焚き口の正面に立てられていた。両資料とも瓦当と丸瓦部の接合状況ならびに粘土の継ぎ足し状況などが明瞭にわかる資料である。丸瓦部の凸面は摩滅が著しいが、ナデを施すようである。凹面には布痕跡が残る。側面はケズリで仕上げる。なお、88は凸面に粘土紐の接合痕らしきものがあるが、87には認められず、両者の間で製作技法が異なっている可能性もある。87は残存長31.7cm、狭端幅9.5cm、瓦当接合部幅15.5cmである。88は残存長31.5cm、狭端幅9.3cm、瓦当接合部幅15.0cmである。

89は軒平瓦Ⅰｂ型式である。２ａ号窯の焼成室の畦に転用されていた。瓦当の2/3程度が残存する破片である。凹面の瓦当側の２cm前後にケズリを施す。凹面には枠板痕が残る。残存瓦当幅18.0cm、残存調18.5cmである。美濃山廃寺第Ⅰ期の軒平瓦であるが、本窯跡で焼成したものではなく、２ａ号窯の構築に際して、美濃山廃寺で不要となったものを再利用したと考えられる。



第41図　２号窯出土軒丸瓦実測図２

90・91は軒平瓦Ⅳ型式である。90は２ａ号窯埋土、91は２ａ号窯埋土最下層から出土した。90は中心飾りから右側が残存する比較的大きな破片である。凹面の瓦当側の５cm前後にナデを施す。上外区や右脇区がなく、段顎である。残存瓦当幅18.0cm、残存長11.3cmである。類例として八幡市志水廃寺出土例があるが、現物を確認したところ、本資料と同笵であることが確認できた。[注30] 91は向かって右側の下半部の破片で、唐草文の一部が認められる。90とは異なり、下外区がないタイプであるため、異

笵のものであろう。

92～94は軒平瓦Ⅵ型式である。92は２ａ号窯埋土、93・94は東端の二次堆積土から出土した。92は上外区の珠文と内区の唐草文の一部が残存する破片である。93は内区の中心飾りと唐草文の一部、下外区の珠文の一部が残存する破片である。94は上外区と脇区の珠文、内区の唐草文の一部が残存する破片である。

95～106は軒平瓦Ⅴ型式である。２号窯では最も多く出土している軒瓦である。95～99・106は２号窯焼土１下層から、100～105は２号窯焼土１下層最下層ないし焼土２上面から出土した。いずれの個体も、胎土は密であまり砂粒を含まず、焼成も良好である。瓦当にも笵傷の進行等は認められず、すべて同笵と思われる。95は軒平瓦全体の形状がわかる唯一の例であるが、瓦当の一部と凹面の瓦当側1/3程度を欠損する。95では残存していないが、ほかの個体の調整の観察結果から、凹面瓦当側の５cm前後に横方向のケズリを加えていたと考えられ、それよりも狭端側では布目の痕跡や粘土板の糸切り痕跡が確認できる。凸面は斜めないし横方向に縄タタキを施した後に凸面の大半にナデを施す。顎は粘土を継ぎ足して形成しており、その断面形は平瓦部から緩く瓦当下端に至る。残存瓦当幅22.6cm、全長32.9cmである。96は瓦当の大半が残存する資料だが、平瓦部は狭端側1/2程度を欠失する。凹面の瓦当側の５cm程度に横方向のケズリを施す。凹面に布目と粘土板の糸切り痕が残る。瓦当幅23.0cm、残存長14.0cmである。97も瓦当が良好に残存するが平瓦部のほとんどを欠失する。凹面に布目が一部確認できる。瓦当幅23.0cm、残存長9.4cmである。98は瓦当の下半部を欠損する資料である。凹面の瓦当側の３～６cm程度に横方向のケズリを施すが、部分的にケズリが及ばずに布目が残っている。99は瓦当の一部が欠損する資料で、平瓦部はほとんど残存しない。

100は中心飾りより右側のうち、下外区を欠損する破片である。101は中心飾りよりも左側が残存する。102は中心飾りとその周辺が残存する。103は中心飾りより左側のうち上外区を欠損する破片である。104は向かって左側の外区と内区の唐草文の一部の破片である。105は向かって右下隅の外区と内区の唐草文の一部の破片である。106は向かって右側の下外区と内区の一部である。顎の部分の破片である。

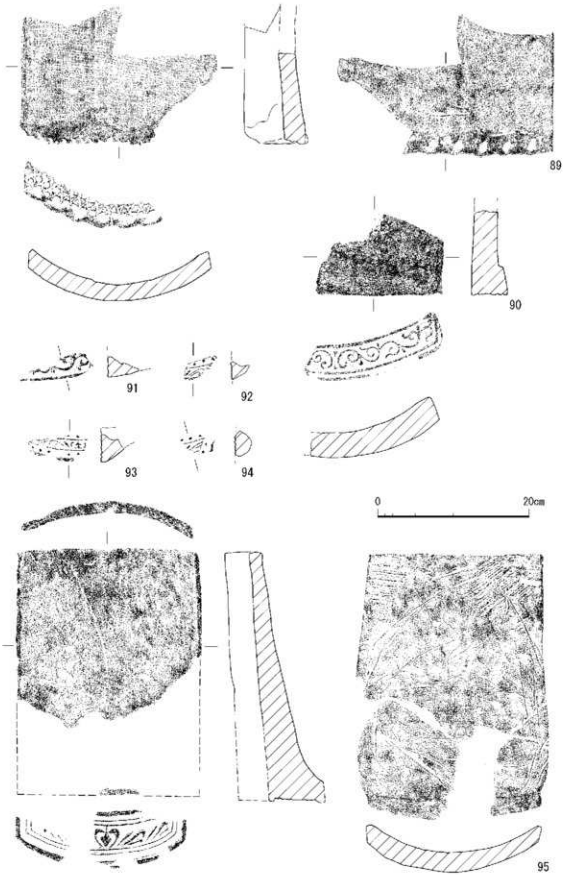
軒平瓦Ⅴ型式は中心飾りの遺存する資料が多く、その数で個体数を数えると、少なくとも９点存在する。なお、Ⅴ型式は２ａ号窯をはじめとして平窯の構築材に転用されたものはなかった。

③その他出土軒瓦（第44図）

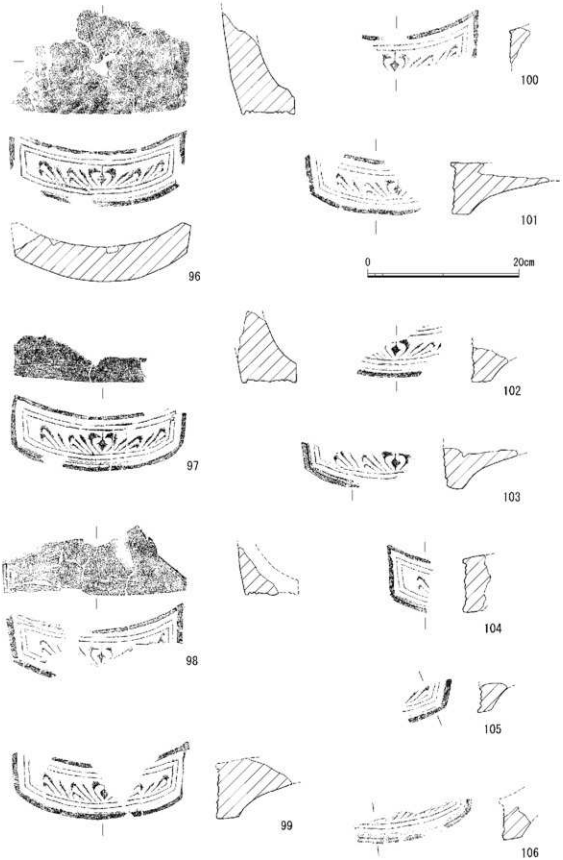
107は軒丸瓦Ⅶ型式である。２号窯と３号窯の間で出土した。瓦当の1/3程度の破片である。丸瓦部が接合部で剥離している。胎土や焼成は79～82に類似するが、色調は暗灰色とやや暗めである。

108は軒丸瓦Ⅲ型式である。３号窯西側の丘陵斜面（ＳＸ80）で出土した。瓦当の1/4程度の破片である。胎土は密で、砂粒を少し含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。美濃山廃寺第Ⅲ－１期の軒丸瓦であるが、この地点で出土した経緯は不明である。

109は軒丸瓦Ⅶ型式と推定される。108と同じく、３号窯西側の丘陵斜面（ＳＸ80）で出土した。



第42図　2号窯出土軒平瓦実測図1



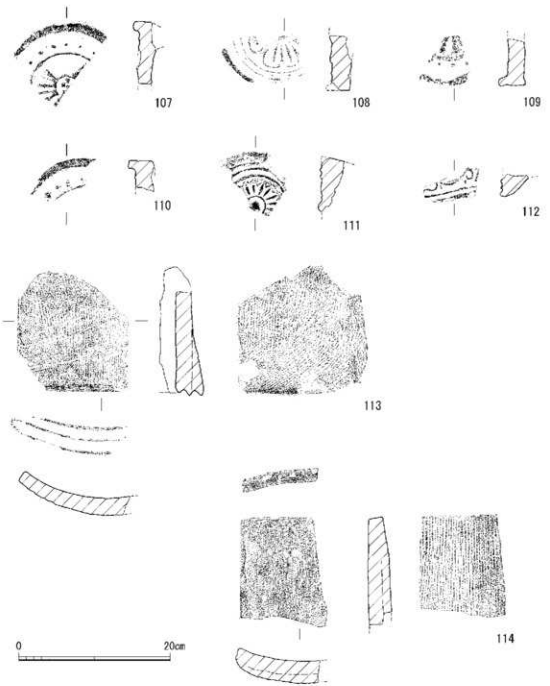
第43図　２号窯出土軒平瓦実測図２

瓦当の1/6程度の破片である。胎土や色調は79～82に類似する。

110も軒丸瓦Ⅶ型式と推定される。ＳＸ59で出土した。外縁と外区の一部の破片である。胎土や色調は79～82に類似する。

111は軒丸瓦Ⅷ型式である。３号窯周辺の重機掘削中に出土した。1/4程度が残存するが、外縁を欠損する。３号窯は美濃山廃寺第Ⅰ期に操業していたと考えられるので、111は３号窯で焼成されていたとは考えにくい。

112は軒平瓦Ⅳ型式である。表採品であり、どの窯跡に伴うものか不明である。向かって右側



第44図　その他の遺構出土軒瓦実測図

の下半部の破片で、唐草文の一部と下外区が認められる。90と同じ瓦当文様と推定されるが、顎の形状が異なるようにみえ、製作技法などが異なる別タイプのものかもしれない。

113は軒平瓦Ⅱ型式である。５号窯の分焔柱１に使用されていたものである。凸面に縄タタキを施し、一部は側縁まで及んでいる。ただ、側縁の縄タタキをみると、側縁にケズリを施して整えた後に縄タタキを加えており、かつそれが顎部の接合後であることがわかる。胎土は密で、焼成は堅緻である。瓦当残存幅15.5cm、残存長17.1cmである。美濃山廃寺第Ⅰ期の軒平瓦であるが、本窯跡で焼成したものではなく、５号窯の構築に際して、美濃山廃寺で不要となったものを再利用したと考えられる。

114は瓦当面を欠損するため詳細な型式は不明である。瓦の厚さを増すために粘土板を継ぎ足しており、軒平瓦の平瓦部と推定した。凸面に縄タタキを施し、側縁にはケズリを施す。胎土は後述する平瓦のＣ群と類似しており、焼成は良好である。５号窯の焼成室の畦に使用されていたものである。

Ｂ．丸瓦・平瓦

まず、丸瓦・平瓦と胎土の分類の概要を述べ、次に実測図を提示した資料について述べる。

①丸瓦・平瓦の分類

丸瓦・平瓦の分類に当たっては、美濃山廃寺の報告と同様の方法で行った。(脚注)

ａ．丸瓦の分類(第45図)

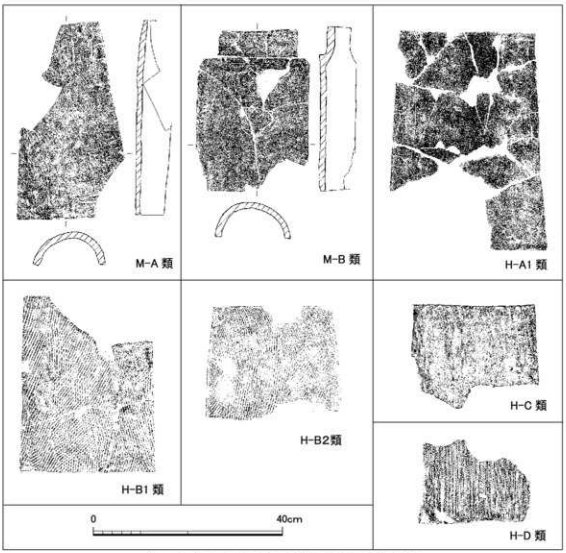
まず、形態上の分類として、狭端側の玉縁の有無によって、無段式(=M-A類、いわゆる行基式)と、有段式(=M-B類、いわゆる玉縁式)の２つに大別した。 なお、美濃山廃寺の報告では、上記の分類ごとに、成形方法や凸面の調整にもとづく分類を行ったが、一方の例がほとんどないことから、美濃山瓦窯跡群の報告ではこの分類は使用しない。なお、美濃山瓦窯跡群出土の丸瓦も破片資料が多く、そもそもM-A類なのかM-B類なのかさえ判別できなかったものが多い。

ｂ．平瓦の分類(第45図)

平瓦については製作技法上の相違をもとに、桶巻作りか一枚作りかということについて判定する必要がある。美濃山廃寺では、残存状況等により、判別しにくいものが多かったが、美濃山瓦窯跡群では、完形に近い資料が多かったため一枚作りの例を多く確認できた。美濃山瓦窯跡群では美濃山廃寺の平瓦の分類と同じく、凸面の最終調整から、ナデのもの(=H-A類)、平行タタキのもの(=H-B類)、縄タタキのものに分類し、縄タタキのものは桶巻き作りのもの(H-C類)と一枚作りのもの(H-D類)に分類した。H-A類とH-B類は桶巻作りと考えられる。以下ではこれらの分類ごとに説明する。

H-A類　基本的に凸面全面にナデを施すもので、桶巻作りと考えられるが、出土点数はそれほど多くない。ナデに先行してタタキが施されている例もある。

H-B類　基本的に凸面全面に平行タタキを施すもので、２つに細分できる。H-B1類は、一方向にタタキを施すものや、タタキを交差させて菱形状の文様を作り出すものである。H-B2類は平行タタキの後に縄タタキを施すものである。



第45図　丸瓦・平瓦分類図(注20文献68頁より引用)

H-C類　凸面に縄タタキを施し、桶巻作りと判断されるものである。縄タタキは、桶巻作りに伴い弧状を呈し、1つ1つの縄タタキの原体の長さが4～6cmと、H-D類の縄タタキ原体に比較すると短いものが多い。成形技法として、確実に粘土紐を巻きつけて製作されたものがあり、細分が可能である。粘土板による桶巻作りのものをH-C1類 、粘土紐による桶巻作りのものをH-C2類に分類する 。なお、美濃山廃寺出土例でも同様であるが、H-C2類は広端側が厚く、狭端側に向かって薄くなる。

H-D類　凸面に縄タタキを施し、一枚作りと判断されるものである。縄タタキの原体の長さは20cm前後と、H-C類の縄タタキ原体に比べると長いものが多い。また、枠板痕が認められるものと、枠板痕が認められないものがある。ただ、製作技法や胎土などの点から詳細な細分基準を抽出するための時間的余裕がなかったため、細分は行っていない。

②胎土による分類

美濃山瓦窯跡群で出土した平瓦を中心に、胎土の分類を行った。出土量が膨大であるため、すべての資料について観察できたわけではないが、ここでは報告資料を中心に分類する。このため、

下記の群に含まれないものも多く、それらの分別は「その他」として扱う。

A群…微細な砂粒を多く含むもの。焼成は良好であるが、堅緻なものは少ない。色調も灰黄色や褐灰色を呈するものが多い。図示して報告したものには含まれないが、２号窯灰原出土資料を中心に多数みられる。

B群…白色粒（＝長石か）などの砂粒を少量含むもの。H-B1・2類に特徴的な胎土である。焼成そのものは堅緻で、瓦の色調は灰色ないし青灰色のものが多い。

C群…砂粒を含むが、D群ほど目立たないもの。原因は不明だが、焼成すると胎土の一部が墨痕のような黒色を呈する部分が生じる。焼成そのものは良好で、堅緻というほどではない。瓦そのものの色調は灰白色のものが多い。

D群…砂粒（特に白色粒（＝長石か）が目立つ）多く含まれるもの。焼成も堅緻なものが多い。色調は灰色ないし青灰色のものが多い。

E群…砂粒ほとんど含まないもの。焼成後、瓦の表面が黒色ないし黒灰色を呈し、やや燻された感があるもの。焼成は良好であるが、堅緻ではない。軒丸瓦Ⅶ型式・軒平瓦Ⅶ型式に対応するものと考えられる。

F群…白色粒（＝長石か）がやや多く含まれるもの。H-C2類に特徴的な胎土である。色調は淡青灰色ないし青灰色を呈する。焼成そのものは良好であるが、堅緻なものが多い。胎土はC群に近い。

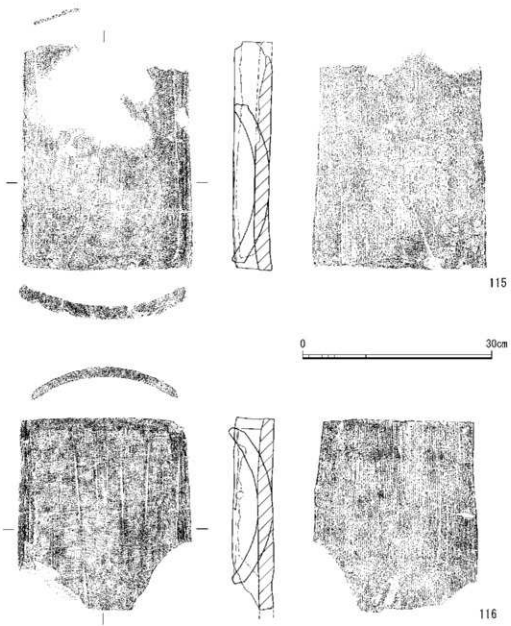
③２号窯出土平瓦（第46～51図）

115・116は２ａ号窯の分焔柱１（向かって左側）に使用されていた平瓦で、どちらもH-D類である。115は凹面の広端側３cm前後に横方向のケズリを施す。凹面の側縁には布端が認められる。側面には縦方向のケズリを２回施す。胎土はC群と推定され、焼成は良好である。色調は灰白色である。全長36.4cm、広端幅25.8cm、厚さ2.3cm前後である。115と製作技法・胎土・焼成・色調が類似したものとして、後述する117・118があり、122も同じ一群の可能性がある。116は凹面の狭端側1.5cm前後に横方向のケズリを施す。凹面にはわずかに枠板痕跡が認められる。側縁には縦方向のケズリを２回施す。胎土はC群で焼成は良好である。色調は灰白色ないし浅黄色である。残存長30.5cm、狭端幅23.3cm、厚さ2.3cm前後である。

117・118は２ａ号窯の分焔柱２（向かって右側）に使用されていた平瓦で、どちらもH-D類である。117は凹面の広端側３cm前後に横方向のケズリを施すが、狭端側は剥離のため不明である。凹面の側縁には布端が認められる。側面には縦方向のケズリを１回施す。胎土がC群で焼成は良好である。色調は灰色である。全長36.5cm、広端幅26.7cm、厚さ2.7cm前後である。118は凹面の狭端側１cm前後に横方向のケズリを施す。凹面の側縁と広端側には布端が認められる。胎土はC群と推定され、焼成は良好である。色調は灰白色ないし灰色である。全長37.0cm、中央の幅24.7cm、厚さ1.9cm前後である。

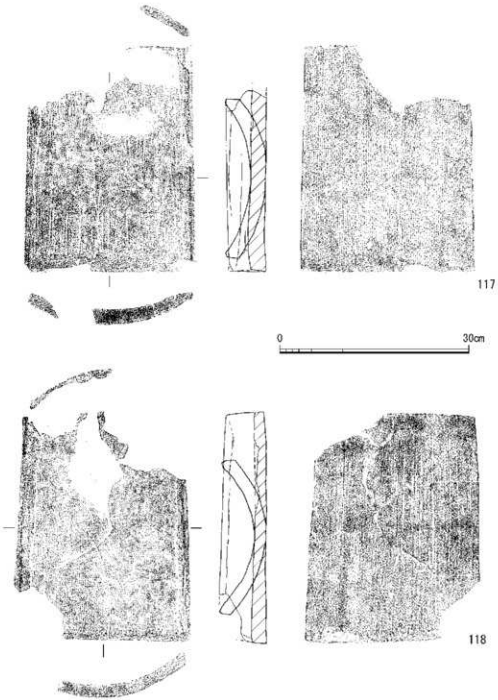
119～123は２ａ号窯の隔壁に使用されていた平瓦である。119はH-B1類、120～123はいずれもH-D類である。119は凹面側に粘土板の糸切り痕が明瞭に残る。凸面には幅4.5cm前後、長さ

6.5cm前後の原体による平行タタキを右下から左上に向かって弧状に施す。側面には縦方向のケズリを１回施す。部分的に火脹れをした箇所がある。胎土はＢ群で、焼成は良好である。色調は暗灰色である。残存長27.5cm、狭端幅23.0cm、厚さ2.5cm前後である。120は凹面の側縁と広端側に布端が認められる。側面には縦方向のケズリを１回ないし２回施す。断面形は強い弧状を呈する。胎土はＤ群と推定され、焼成は堅緻である。色調は灰色ないし灰白色である。全長35.2cm、狭端幅21.8cm、厚さ2.5cm前後である。121は凹面の中央には長さ5.5cm、幅3.3cmの押印箇所がみられ、その一方に偏って「T」字状を呈してわずかに凹む。この押印は文字ではなく、記号と考えられるが、その意味等は不明である。また、非常に粗い縄タタキ原体を使用しており、115～118や120などの縄タタキ原体とは大きく異なる。この原体の平瓦については美濃山廃寺で

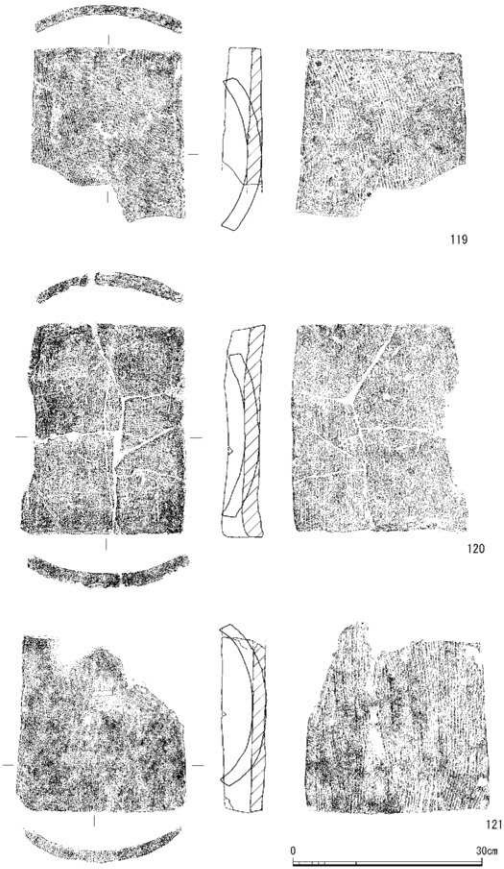


第46図　２号窯出土平瓦実測図１　分端柱

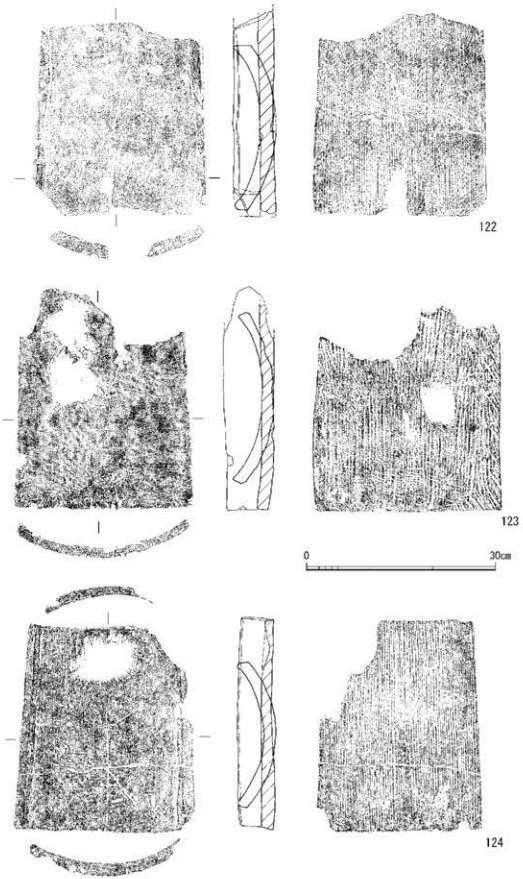
はほとんど出土していないため、この原体を使用した平瓦が美濃山瓦窯跡群で焼成されたものかどうかは不明である。122は凹面の広端側に6cm程度の横方向のケズリを施す。凹面の側縁には布端が認められる。側面には縦方向のケズリを1回施す。胎土はC群と推定され、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。残存長32.2m、最大幅25.6cm、厚さ2.5cm前後である。123は凹面の狭端側と広端側に布端が認められる。凸面の縄タタキ原体は121と同様のやや粗いものである。側面には縦方向のケズリを1回施す。胎土の群別はその他で、焼成は良好である。色調は黄灰色



第47図　2号窯出土平瓦実測図2　分端柱



第48図　2号窯出土平瓦実測図3　隔壁



第49図　2号窯出土平瓦実測図4　隔壁

ないし浅黄橙色を呈する。残存長36.6cm、広端幅27.4cm、厚さ2.0cm前後である。

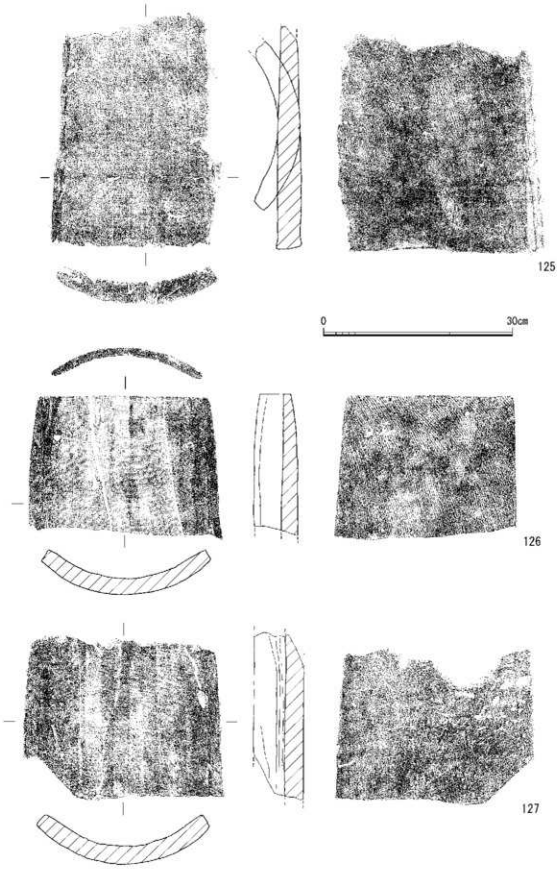
124は２ａ号窯の燃焼部で出土した平瓦で、H-D類である。凹面の側縁には布端が認められる。凸面の縄タタキ原体はやや粗いものであるが、121・123と同じ原体ではない。側面には縦方向のケズリを１回施す。胎土の群別はその他で、焼成は良好である。色調は浅黄色を呈する。全長33.9cm、狭端残存幅16.7cm、広端幅23.6cm、厚さ2.0cm前後である。

125～129は２号窯の埋土から出土したものである。125はH-C2類である。凹面側を観察すると幅３cm前後ごとに粘土紐の接合痕が確認できる。凹面の側縁側3.5cm程度にケズリを施す。凸面には幅３cm前後、長さ５cm前後の原体による縄タタキを右下から左上に向かって弧状に施す。側面には縦方向のケズリを２回施す。胎土がＦ群で焼成は良好である。色調は灰白色である。残存長37.7cm、残存最大幅27.0cm、厚さ2.6～3.5cmである。126はH-C2類と推定されるが、粘土紐の接合痕跡は不明瞭である。狭端側の厚さが著しく薄くなっている。凹面の側縁側２cm前後にケズリを施す。凸面には幅４cm前後、長さ６cm前後の原体による縄タタキを右下から左上に向かって弧状に施す。側面には縦方向のケズリを１回施す。胎土がＦ群と推定され、焼成はやや堅緻である。色調は灰色である。残存長22.6cm、広端幅26.7cm、厚さ1.2～2.7cmである。127もH-C２類と推定されるが、粘土紐の接合痕跡は不明瞭である。凹面の側縁両側2.5cm前後にケズリを施す。凹面には布の綴じ合わせ目や枠板痕跡が認められる。凸面には幅3.5cm前後、長さ６cm前後の原体による縄タタキを右下から左上に向かって弧状に施す。側面には縦方向のケズリを１回施す。胎土はＦ群と推定され、焼成は良好である。色調は灰白色である。残存長26.5cm、最大幅27.5cm、厚さ2.6～3.0cmである。128はH-C1類である。凹面の側縁の一部にケズリを施すが、欠損部分が多く詳細は不明である。凹面側に粘土板の糸切り痕が認められる。凸面には幅５cm前後、長さ７cm前後の原体による縄タタキを右下から左上に向かって緩やかに弧状に施す。側面には縦方向のケズリを１回施す。胎土の群別はその他で、焼成はやや軟質である。色調は灰白色ないし淡黄色である。全長39.0cm、最大幅31.0cm、厚さ2.2cm前後である。129はH-D類である。凹面の側縁と狭端には布端が認められる。凸面には縄タタキを施すが、狭端から10cmほどのところよりも広端側では、より太めの縄を使用した原体が狭端側のみでみられる原体に重なっているようである。側面には縦方向のケズリを２回施す。胎土の群別はその他で、焼成は良好である。色調は灰白色ないし褐灰色である。残存長27.2cm、残存幅23.7cm、厚さ1.6～2.1cmである。

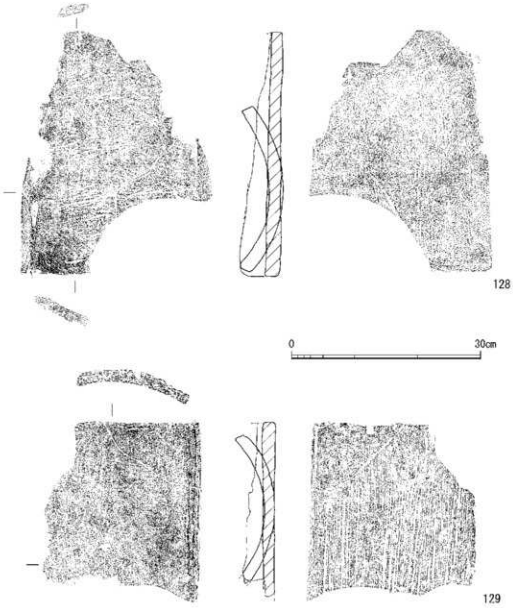
④５号窯出土丸瓦・平瓦（第52～55図）

130は５号窯の分焔柱１に使用されていた丸瓦で、M-B類である。広端側の一部と玉縁部を欠損する。凸面には縄タタキの後に軽くナデを施す。凹面には布目が残る。筒部側面にはケズリを施す。胎土は砂粒を含み、まれに大粒の砂粒が混じるものの密で、焼成は良好である。色調は灰白色ないし灰色である。残存長28.1cm、筒部幅16.1cm、厚さ1.8cm前後である。

131は５号窯の分焔柱２に使用されていた丸瓦で、M-B類である。広端側を欠損する。玉縁部の側面は切り落としている。凸面には縄タタキの後に軽くナデを施す。凹面には布目が残る。筒部側面にはケズリを施す。胎土は砂粒を少し含むが密で、焼成は良好である。色調は灰色である。



第50図　２号窯出土平瓦実測図５　２ａ号窯埋土

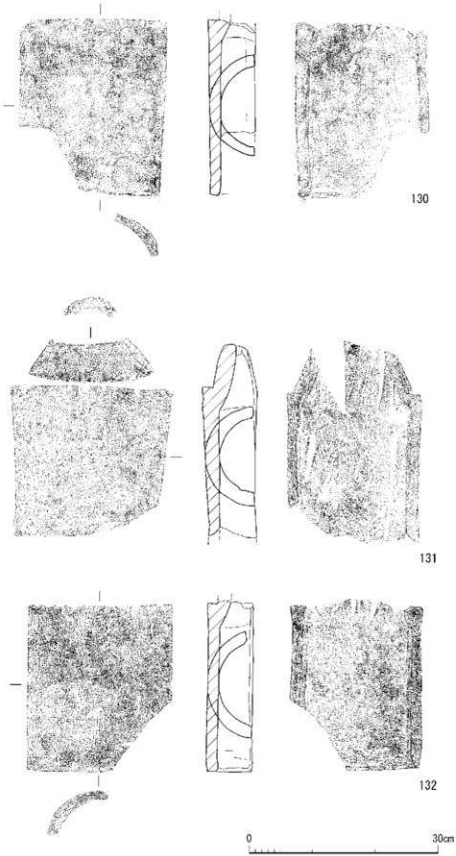


第51図　２号窯出土平瓦実測図６　埋土

残存長30.6cm、狭端幅8.7cm、筒部幅15.8cm、厚さ2.3cm前後である。

132は５号窯の分焔柱４に使用されていた丸瓦で、M-B類である。広端側の一部と玉縁部を欠損する。凸面には縄タタキの後に軽くナデを施す。凹面には布目が残る。筒部側面にはケズリを施し、凹面側の１cm前後に面取りを施す。胎土は細かな砂粒を含むが密で、焼成は良好である。色調はやや暗めの灰白色ないし灰色である。残存長26.9cm、筒部幅17.1cm、厚さ1.9cm前後である。

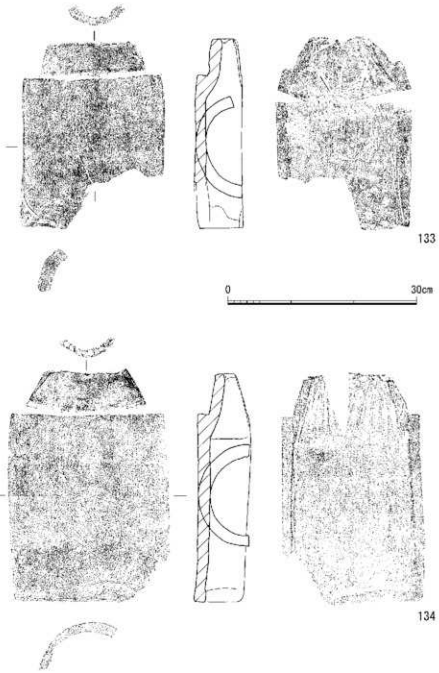
133は５号窯の分焔柱５に使用されていた丸瓦で、M-B類である。広端側が焼け歪みで若干変形している。玉縁部の側面は切り落としている。凸面には縄タタキの後に軽くナデを施す。凹面には布目が残るが、中央の一部にナデまたはケズリらしき痕跡が見られる。筒部側面にはケズリを施す。胎土の群別はその他で、焼成は良好である。色調は灰白色ないし灰色である。全長



第52図　５号窯出土丸瓦実測図１　分塩柱

30.3cm、狭端幅9.2cm、筒部幅16.3cm、厚さ1.7cm前後である。ほかの例に比べ、やや全長が短い個体である。

134は５号窯の隔壁に使用されていた丸瓦で、M-B類である。玉縁部の側面は切り落としている。凸面には縄タタキの後に軽くナデを施す。ナデの方向は広端側７cmほどが横方向、それよりも狭端側が縦方向である。玉縁部の凸面は軽いケズリである。凹面には布目が残るが、広端側で布端が確認できる。筒部側面にはケズリを施す。胎土の群別はその他で、焼成は良好であるがやや生焼けのようである。色調は灰白色ないし灰色である。全長36.5cm、狭端幅9.0cm、筒部幅

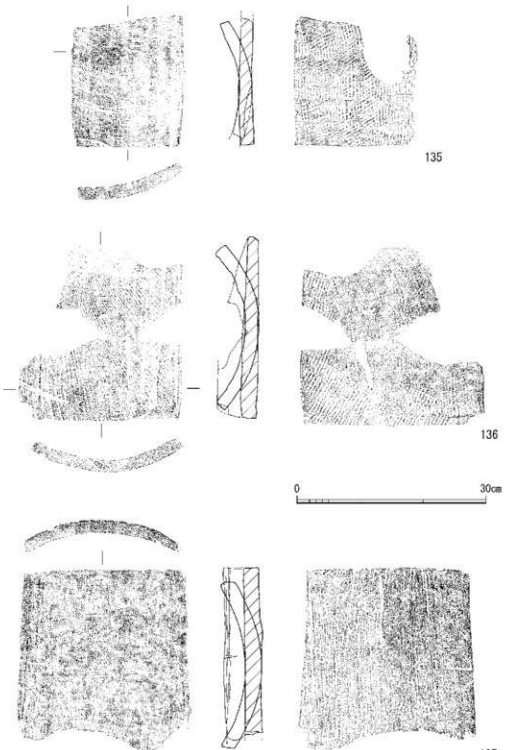


第53図　５号窯出土丸瓦実測図２　分焔柱・隔壁

16.3cm、厚さ1.9cm前後である。

以上の５点の丸瓦はいずれも法量・胎土・焼成・調整が類似しているが、すべて窯の構築材として使用されているため、いずれの窯で焼成されたものか不明である。

135は５号窯の分焔柱４に使用されていた平瓦で、H-B1類である。凹面に３cm四方ほどの押



第54図　５号窯出土平瓦実測図１　分焔柱・隔壁

印の痕跡を確認できる。押印箇所の狭端側の辺に沿って、幅７mmほどにさらに一段凹んでいる。凹んだ箇所は121のように「T」字状にはなっていない。凸面には幅3.5cm前後、長さ3.5cm前後の原体による平行タタキを右下から左上に向かって弧状に施し、さらに交差して施す。側面には縦方向のケズリを１回ないし２回施す。胎土がC群と推定されるが、B群にも近い。焼成は良好で、色調は灰黄色ないし灰色である。残存長20.4cm、広端残存幅16.8cm、厚さ2.0cm前後である。

136は５号窯の分焔柱５に使用されていた平瓦で、H-B2類である。凹面側に粘土板の糸切り痕が明瞭に残る。凹面の両側縁端付近に分割界線の痕跡が認められる。凹面に３cm四方ほどの押印の痕跡を確認できるが左側1/3程度は押し切れていない。押印箇所の狭端側の辺に沿って、幅７mmほどにさらに一段凹んでいる。おそらく135と同一のものを使用したのであろう。凸面には幅５cm前後、長さ2.5cm前後の幅の広い原体による平行タタキの後に幅３cm前後、長さ６cm前後の原体による縄タタキを右下から左上に向かって弧状に施す。側面には縦方向のケズリを１回施す。胎土がC群と推定され、美濃山廃寺出土H-B2類と同一のものであるかどうかは不明である。焼成は良好で、色調は灰白色である。残存長29.0cm、広端幅24.1cm、厚さ2.5cm前後である。

137は５号窯の隔壁に使用されていた平瓦で、H-D類である。側面には縦方向のケズリを１回施すが、側面にも布目痕跡が認められる。胎土がC群で焼成は良好である。色調は灰色ないし灰白色である。残存長30.2cm、狭端幅24.6cm、厚さ2.5cm前後である。138は５号窯の隔壁に使用されていた平瓦で、H-D類である。凹面中央には縦方向に２種類の布を綴じ合わせた痕跡があり、左側が目の細かい布、右側が目の粗い布である。側面には縦方向のケズリを１回施すが、側面にも布目痕跡が認められる。胎土がC群と推定され、焼成はやや軟質である。色調は灰白色である。全長33.6cm、広端幅25.6cm、狭端幅23.4cm、厚さ2.5cm前後である。139は５号窯の隔壁に使用されていた平瓦で、H-D類である。凹面の広端側には布端が認められる。側面には縦方向のケズリを１回施す。胎土がC群と推定され、焼成は良好である。色調は灰白色ないし黄灰色である。全長35.0cm、広端残存幅19.3cm、狭端幅24.0cm、厚さ2.1cm前後である。

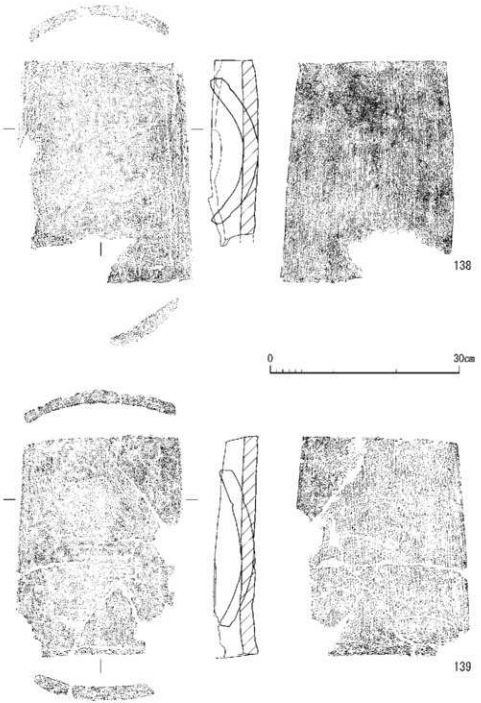
⑤「西寺」銘瓦（第56図）

140は「西寺」と押印された平瓦である。４号窯の畔に使用されていた。平瓦の分類としてはH-D類に該当する。凸面に縄タタキを施し、凹面に布目が残る。胎土はやや粗く、径１～３mmの石英や長石などの砂粒を多く含む。焼成は堅緻である。残存長15.4cm、残存幅17.9cm、厚さ1.6cmである。本資料の「西寺」と同じ押印をもつものとして西寺跡出土例がある。[(18)32] なお、当該資料が４号窯で焼成されたか否かについては検討を要するが、美濃山瓦窯跡群で出土した瓦類に、140と同じような胎土の瓦類を確認することができた。

C．道具瓦

①塼（第56図）

141は塼で、５号窯の焼成室から出土した。胎土は砂粒を多く含んでおり、D群に近いが、焼成は軟質である。色調は灰白色である。全長24.8cm、幅12.7cm、厚さ2.7～4.1cmである。美濃山廃寺を含めても塼の出土例はほとんどなく、美濃山瓦窯跡群で焼成されたものかどうか不明であ

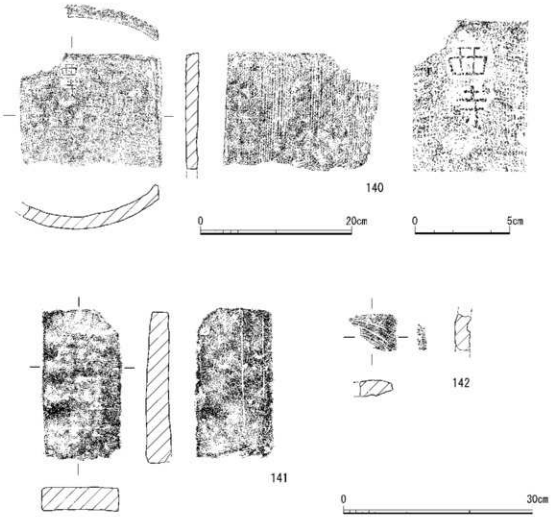


第55図　5号窯出土平瓦実測図2　隔壁

る。

②鴟尾（第56図）

142は鴟尾の破片と推定される。4号窯の畦に使用されていた。外面にはナデを施し、ヘラによる線刻が施されている。燃されているため、近世以降の瓦のようであるが、出土地点から古代のものと判断した。残存高6.0cm、残存幅7.2cm、最大厚さ2.4cmである。142が仮に鴟尾だとし



第56図　「西寺」銘瓦・塼・鴟尾実測図

ても、他に破片がほとんど出土しておらず、美濃山瓦窯跡群での焼成は考えにくい。

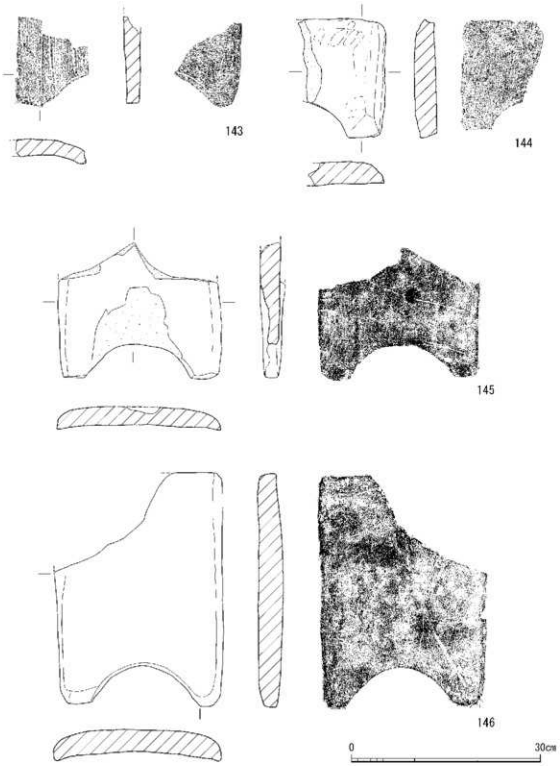
③面戸瓦（第57図）

143は平瓦と同様の製作技法が認められる面戸瓦である。２ａ号窯の燃焼部で出土した。凸面に縄タタキを施し、凹面には布目痕が認められる。抉り込みに沿って沈線状の縁取りが認められる。胎土や焼成・色調は軒丸瓦Ⅶ型式・軒平瓦Ⅴ型式に類似する。残存長14.5cm、残存幅11.5cm、厚さ2.3～2.9cmである。144は４号窯の畦に使用されていた。次に述べる鬼板（145・146）に類似した特徴を持つが、全長が19.4cmと短いことから面戸瓦の一種と判断した。凸面は、おもにナデを施し、砂粒の動きから部分的にケズリを施していたと考えられる。胎土は密でＣ群と考えられ、焼成は良好である。色調は暗灰色を呈する。全長19.4cm、残存幅12.2cm、厚さ3.6cmである。

④鬼板（第57図）

145は２ａ号窯焼土１上の黒灰色土から出土した。上半部を欠損し、凸面側にも大きな剥離部

分がある。下部には半円状の抉り込みがある。抉り込みの高さは5.5cmである。凸面は摩滅気味であるが、ナデによって仕上げている。凹面には布目が残る。胎土は密であるが、やや砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は灰色である。残存長21.8cm、幅25.3cm、厚さ2.4～3.3cmである。146は２ａ号窯焚き口で南壁に貼り付けられていたものである。凸面側からみて左隅部を欠損す

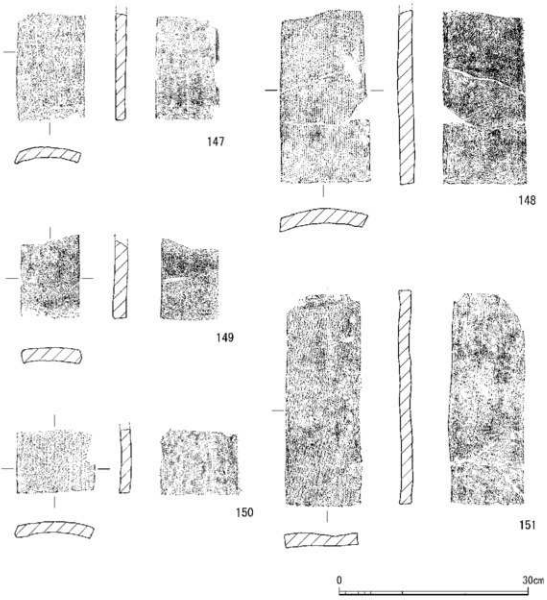


第57図　鬼板・面戸瓦実測図

る。右隅部が直角を呈することから頂部は水平であったと考えられる。下部には半円状の抉り込みがある。抉り込みの高さは7.4cmである。凸面はナデで仕上げ、凹面には布目が残る。胎土は密であるが、やや砂粒を多く含む。焼成はやや堅緻で、色調は灰白色ないし灰色を呈する。全長37.2cm、幅26.8cm、厚さ2.9～4.0cmである。

⑤熨斗瓦（第58図）

147～151はいずれも当初から熨斗瓦として製作されたものである。平瓦と同様の製作技法で作られており、胎土も類似するものが多い。原則として凸面に縄タタキ、凹面に布目が残存する。これらの熨斗瓦は、瓦窯の構築材として使用されていたものが多いが、胎土等が平瓦に類似するものが多いことから、美濃山瓦窯跡群のいずれかの窯跡で焼成されたものと考えられる。147は２ａ号窯の畦に使用されていた熨斗瓦である。胎土の群別はその他であるが、焼成は良好である。

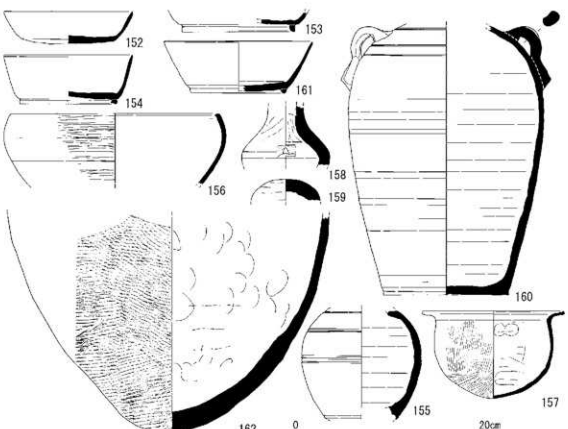


第58図　熨斗瓦実測図

残存長17.5cm、幅10.7cm、厚さ1.5～1.7cmである。148は２号窯の焼土１下層から出土した。胎土はＥ群で、焼成はやや軟質である。色調は暗灰色を呈する。胎土・焼成とも軒平瓦Ｖ型式に類似する。残存長28.2cm、広端幅14.3cm、厚さ1.9～2.5cmである。149は４号窯の畦に使用されていた熨斗瓦である。胎土の群別はその他であるが、焼成は堅緻である。全長13.4cm、幅9.6cm、厚さ2.0～2.2cmである。150は５号窯の隔壁に使用されていた熨斗瓦である。胎土はＤ群と推定され、焼成は堅緻である。全長10.4cm、幅12.8cm、厚さ1.7～1.9cmである。151も５号窯の隔壁に使用されていた熨斗瓦である。胎土はＤ群と推定され、焼成はやや堅緻である。全長34.3cm、幅12.3cm、厚さ1.7～2.2cmである。（筒井崇史）

２）土器・土製品（第59図）

152～159は２号窯から出土した。152は須恵器杯で、やや丸味を持った器形である。口径13.5cm、器高3.4cmを測る。焼土１の下層から出土した。153は高台付の須恵器杯で、底部外周のやや内側に高台を付す。高台径11.8cmを測る。焼土１の下層から出土した。154は高台付の須恵器杯で、口径13.5cm、器高5.2cm、高台径10cmを測る。焼土１直上層から出土した。155は須恵器瓶で、外面に沈線を施す。浄瓶のような器形とみられる。胴部最大径12.6cmを測る。焼土１下層から出土した。156は鉄鉢形の須恵器鉢で、外面調整は横方向のミガキである。口径21.9cmを測る。２ａ号窯焼成窯埋土から出土した。157は土師器甕で、強く外反する口縁部を持つ。外



第59図　出土遺物実測図

面調整は胴部が縦方向のハケ、底部が斜め方向のハケである。口径14.8cm、器高9.3cmを測る。２ａ号窯埋土から出土した。158は須恵質の土製品で、ひさご形土製品の一部とみられる。胴部に穿孔がみられる。胴部最大径9.3cmを測る。２ａ号窯埋土から出土した。159は須恵質の土製品で、覆鉢形土製品の頂部とみられる。中実である。残存径7.3cmを測る。２ａ号窯埋土から出土した。

160は須恵器壺で、４号窯焼成室埋土から出土した。肩部に縦耳を付す。残存高28.4cm、胴部最大径20.6cm、底部径13cmを測る。

161･162は５号窯焼成室埋土から出土した。161は高台付の須恵器杯で、底部外周に高台を付す。底部から口縁部が直線的に斜め上方に立ち上がる。口径15.6cm、器高5.5cm、高台径9.8cmを測る。162は須恵器甕の下半部で、底部が厚手である。外面は平行タタキ、内面には当て具痕跡が残る。残存高23cm、胴部残存径33.8cmを測る。

４．小結

１）瓦窯について

美濃山瓦窯跡群を構成する５基の窯のうち、１号窯は美濃山廃寺の中心伽藍があったと推定される部分の南側に近接して位置する。窖窯の燃焼部が残存するのみであったが、美濃山廃寺創建期の軒平瓦が出土しており、中心伽藍造営に関係する窯と考えられる。７世紀後半から８世紀初期頃に操業した窯と考えられる。美濃山瓦窯跡群では最古の瓦窯とみられる。

今回調査した２～５号窯は、美濃山廃寺の推定寺域の北東側に位置する。中心伽藍造営後に、火気を避けるために移転したものと考えられる。この位置に移転して最初に操業したのは３号窯である。有段式の半地下式窖窯である。窯体内からは１号窯で焼成された瓦と同じ軒平瓦のH-B1・2類が出土することから、美濃山廃寺に瓦を供給した窯の可能性が高い。操業は８世紀前半頃とみられ、美濃山廃寺の整備や補修に伴う瓦を供給した窯と考えられる。

１・３号窯は窖窯であるが、２・４・５号窯は平窯である。前述のとおり、２ａ号窯では１口の通焔孔に２条の炎道が対応している。出土した軒丸瓦Ⅶ型式は、先述のように山城国分寺で使用されているが、創建時ではなく、補修時のものと考えられていることから、８世紀末頃に操業した瓦窯と考えられる。一方、５号窯では１口の通焔孔に１条の炎道が対応する。４号窯も同様と考えられる。通焔孔と炎道が１対１の構造になるのは平安時代初期以降といわれるが、このことは、須恵器や「西寺」銘瓦などの出土遺物からも首肯できる。なお、４・５号窯跡は構造が類似しており、近接して存在するため、２基１対で操業した可能性もある。

検出した平窯は、官窯として確認された大山崎町大山崎瓦窯のように、通焔孔と炎道の対応が必ずしも一致していないことや、大山崎瓦窯の焼成室に敷設された有畦自体の員数が少ないことなどから、「西寺」銘の平瓦が出土しているものの、官窯的な要素は少なく、基本的には美濃山廃寺に瓦を供給した体制を維持しながらの生産体制であったと考えられる。なお、美濃山瓦窯跡群の瓦の総生産量は、窯自体の規模が小規模であることから広い地域に、あるいは特定の寺院等

に対して中核的に瓦を生産したのではなく、補充瓦等をおもに生産していた瓦窯群であったと考えておきたい。

2)出土瓦について

2a号窯では軒丸瓦Ⅶ型式と軒平瓦Ⅳ型式を焼成したと考えられる。この型式の瓦は、八幡市志水廃寺でも出土している。八幡市教育委員会で実見したが、瓦当の文様や胎土などから同笵とみられる。同文の瓦は、京田辺市興戸廃寺や普賢寺跡、木津川市山城国分寺跡でも出土している。特に、京田辺市教育委員会で実見した興戸廃寺例は、笵傷が一致しており、基本的には同じ笵を使用した可能性が高い。[注33] ただ、成形や胎土に相違があるため、違う窯で生産されたものとみられる。このような笵の移動は、南山城における工人の移動をも想起させる。一方で、美濃山廃寺からは軒平瓦Ⅳ型式は出土していない。美濃山廃寺よりも周辺地域に瓦を供給した側面の方が強い傾向がうかがえる。

2b号窯で生産されたと考えられる軒平瓦Ⅴ型式は、厚さに比して幅が狭い。また、この軒平瓦に伴うと考えられる軒丸瓦Ⅶ型式も径が小さい。周辺での出土例は、今のところ確認できていない。特殊な建物に使用された瓦の可能性がある。[注34]

3)瓦窯の立地について

美濃山瓦窯群が所在する丘陵には、大阪層群の水平堆積の一部に良好な海成粘土が見られる。特に5号窯の南西側の攪乱坑の断面には、当該粘土の堆積が観察できる。また、瓦窯群の南東側谷部には、形成時期は不明であるが、2か所に溜池が所在している。これらから瓦窯付近の周辺域で粘土を採掘する条件下にあり、また、瓦を整形する際に必要な水についても谷を中心とする範囲から比較的容易に入手できたと考えられる。一方、瓦窯が構築される付近の基層は、崩壊しやすい砂礫層が厚く堆積しており、必ずしも瓦窯を構築する条件としては良好といえない。美濃山廃寺の隣接地に構築し、供給を容易にする背景があったと考えられる。

なお、美濃山廃寺以外に焼成された製品を運び出す経路としては、丘陵部に構築されているとはいえ、足利健亮氏が想定されている古山除道に隣接していることから、官道を利用したと考えられる。しかし、瓦自体を多量に生産し、焼成した製品を集積するような空間は、瓦窯周辺には見出すことができない。今後、周辺の地形などを考慮し、検討していかなければならないが、美濃山廃寺で確認されている建物群の一部が工房的に使用された可能性もある。

4)「西寺」銘瓦について

文字瓦については、1970年に平安博物館によって実施された京都市立唐橋小学校のプール建設に伴う調査で出土した瓦片に同様の押印を持つものがある。[注35] 出土地は西寺の南東隅部にあった灌頂院の北築地部分にあたる。このことから、今回出土した文字瓦は本来西寺のために焼成されたものと考えられる。

出土した文字瓦は、瓦窯の構築材として出土しており、4号窯で焼成されたものかどうかは明確ではない。また、4・5号窯ともに灰原が残存しておらず、どのような瓦を焼成したか特定できない。これらの瓦窯から出土した瓦は、窯の構築材や補修材として使用されたものが多数を占

める。

文字瓦の胎土は、他の出土瓦に較べてやや砂粒を多く含んでいる。４号窯から同じ胎土の瓦が複数出土しているが、他の瓦窯で焼成された瓦が持ち込まれた可能性も検討する必要がある。西寺の瓦を焼成した窯としては、美濃山瓦窯跡群から西へ約５kmの大阪府枚方市阪瓦窯が従来から知られている。阪瓦窯に近接する枚方市九頭神廃寺でも西寺関係の文字瓦が出土している。字体などから、美濃山瓦窯跡群出土瓦の印とは異なっているが、西寺関係の瓦が周辺寺院にも供給されていることがわかる。(注36) 美濃山瓦窯跡群の本来の供給先であった美濃山廃寺は、創建時に九頭神廃寺と同文の軒瓦を使用しており、係わりが深いことが指摘されている。このような地域的な係わりのなかで、美濃山廃寺に阪瓦窯から瓦が供給された可能性も考えられる。供給された瓦が４号窯の構築材に転用されたという見方もできる。また、美濃山瓦窯跡群は、窯構築に「西寺」銘瓦を転用しただけで、直接西寺の瓦生産には係ってはいないという見方もできよう。

このように、今回出土した「西寺」銘瓦は、様々な可能性を考えさせる資料である。また、阪瓦窯や九頭神廃寺がある北河内地域と美濃山廃寺・瓦窯がある南山城地域の国を超えた交流を想定させる資料でもある。今後とも検討を要する資料といえる。　（引原茂治）

（3）美濃山遺跡第３次

１．調査経過

今回の発掘調査では、Ｃ・Ｄ・Ｅ地区として呼称し、調査を実施した。平成23年度の調査は、Ｃ地区に12トレンチ、Ｄ地区に13トレンチを設定して実施した。明確な遺構は検出できなかった。

平成24年度は、Ｅ地区に第１～４トレンチを設定して実施した。Ｅ地区の北方には、平坦地が広がっており、集落の中心が展開すると考えられる。Ｅ地区では、南東方向と南方向に傾斜が認められることから、集落の縁辺部にあたると考えられる。第１トレンチでは、西方の平坦地から南東に傾斜する傾斜変換線付近において、竪穴建物やピット、土坑を検出した。第２トレンチでは、遺構は検出できなかった。第３トレンチでは、トレンチ中央部において深さ約２ｍの谷地形を確認した。第４トレンチでは、第３トレンチで検出した谷地形の肩部を検出した。

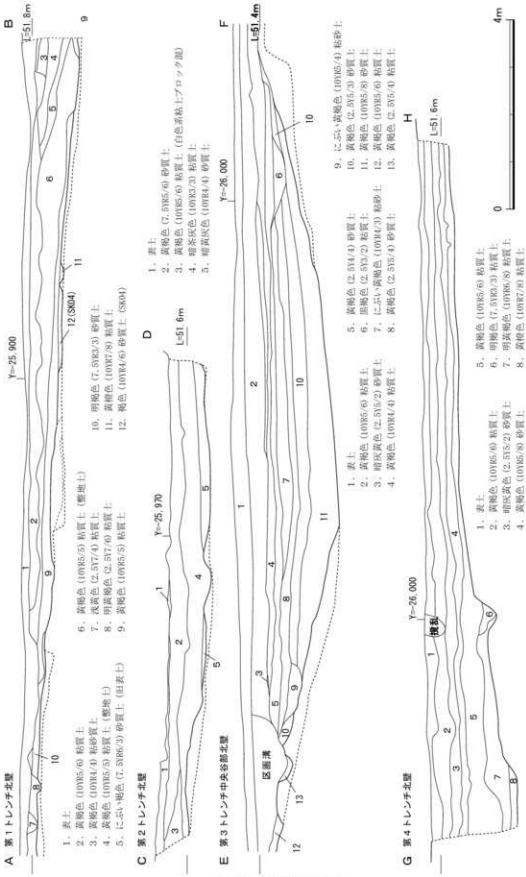
発掘調査がほぼ終了した平成25年１月15日に美濃山地区の方々を対象にＥ地区において現地見学会を開催した。

２．基本層序

基本的な層序は、Ｃ地区12トレンチ及びＤ地区13トレンチでは、トレンチ設定か所の地形によって堆積状況は異なっているが、複数の竹林の搬入土下に地山が広がっている。一方、Ｅ地区第１トレンチから第４トレンチにおいての基本層序は共通しているが、第１トレンチ南東半と第４トレンチ南西部、ならびに第３トレンチ中央部の谷地形部分において、各々、堆積状況に違いがみられる。第１トレンチの北壁で観察すると、調査区中央以東において徐々に傾斜が始まり、地山での傾斜角は、おおむね10°程である。傾斜が始まる地点から第６層が薄く堆積しており、東方に厚く堆積している。一方、第６層の直上に堆積する第５層は、旧表土と考えられる。第１トレンチの遺構は、地山面で検出するとともに、地山直上にわずかではあるが、遺物を含む第９層の包含層が堆積している。第２トレンチでは、地山面までおおむね３層の堆積が認められたが、遺物包含層は確認できなかった。第３トレンチでは、トレンチ中央部において、幅約16ｍの範囲において北方から南方に落ち込んでいく谷地形を検出した。傾斜が始まる地点から第11層が薄く堆積しており、中央部に厚く堆積している。当該堆積層は、旧表土と考えられる。地山直上層において出土遺物は確認できなかった。

なお、谷地形が伸びる方向を確認する目的で第３トレンチの南約10ｍの地点に第４トレンチを並行して設定した。トレンチ北壁で観察すると調査区中央付近において第３トレンチと同じ傾斜をもつ谷地形の東傾斜面を確認することができた。なお、調査地の南に位置する台地縁辺部において、この谷地形の延伸部と考えられる凹みが認められた。谷部からの出土遺物はなく、谷地形の埋没時期については不明である。

（小池　寛）



第60図　土層断面実測図

3．検出遺構

1）C地区12トレンチ（第61図）

柿谷古墳から南西に約120m離れた竹林に設定したトレンチである。トレンチの規模は長さ約16m、幅約４ｍを測る。調査の結果、調査地は後世の竹林への土入れによる大規模な地形の改変が行われたことが判明した。トレンチの中央から北東部にかけては地表下0.5m（標高35.7m）付近で平坦な地山面を検出した。一方、トレンチ中央部から南東にかけて、南方向に大きく下降する地山斜面を検出した。この地山面の下がり傾斜から、トレンチの南側に丘陵を西に切り込む旧谷地形が存在すると考えられる。精査を行ったが、遺構・遺物は確認できなかった。

2）D地区13トレンチ（第61図）

C地区から南西方向に約170m離れた、市道と林道が接続する三叉路の東側に、古墳状の小規模な高まり（直径約３ｍ、高さ約2.4m）が存在した。この高まりが遺跡であるか否か確認することを目的として、トレンチ調査を実施した。トレンチの規模は長さ10m、幅１ｍを測る。調査の結果、この高まりは丘陵上に登る林道の開削によって丘陵から切り離された裾の一部であることが判明した。トレンチ西部では、最高所から約1.8m下がった標高35.3m付近で地山面（第12層上面）を検出した。また、トレンチの東部は攪乱によって大きく削られていた。遺構は検出できなかったが、トレンチ西部の第11層中から土師器片が少量出土した。（竹原一彦）

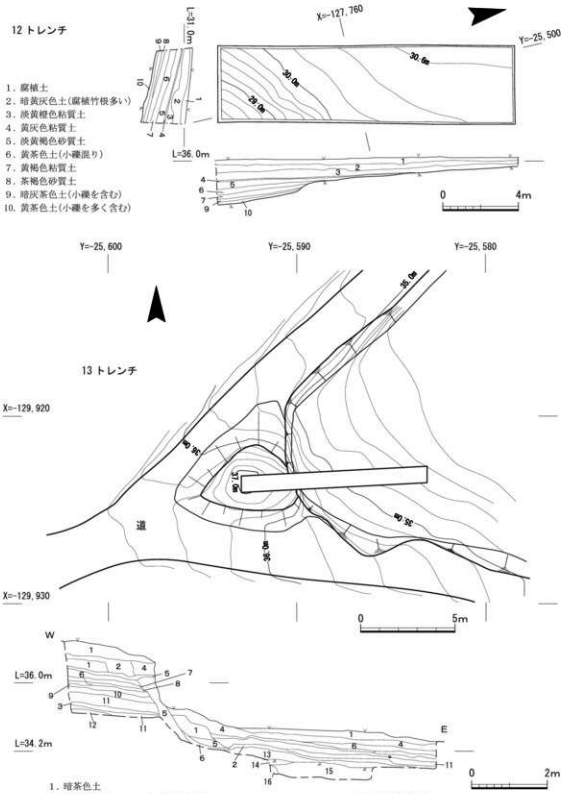
3）E地区第１トレンチ（第62図）

トレンチの北西部は、平坦な地形が広がっているが、調査区中央から東側は徐々に傾斜が始まっている。この傾斜は、真東西から南に約30°に傾斜変換線を有しており、傾斜角度は10°程である。傾斜変換線付近において竪穴建物２基、土坑２基、約20基程度のピットを確認した。

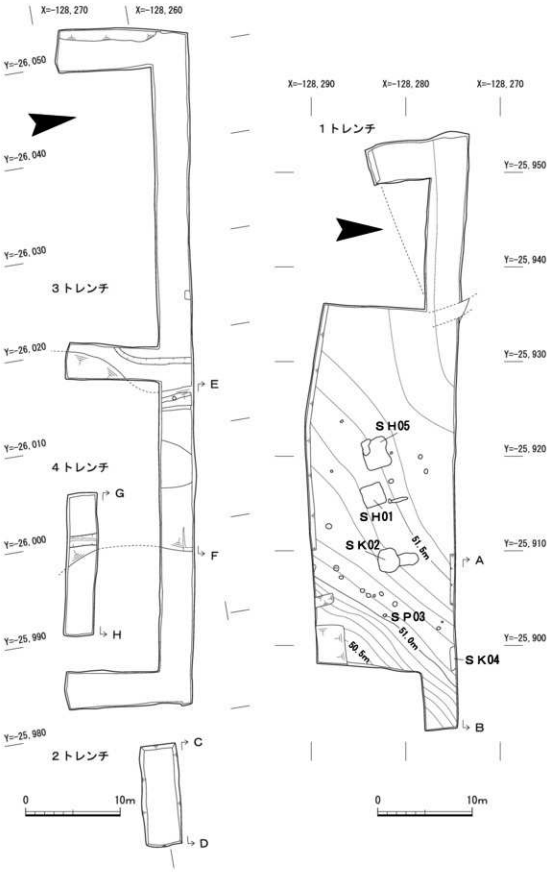
竪穴建物ＳＨ01（第63図）　平面形は東西2.3m、南北2.4mの隅丸方形である。竪穴建物の周壁溝は検出できなかった。また、屋根を支える支柱穴も床面において検出できなかった。なお、竪穴建物の北端には、最上面が赤褐色に変色する堆積を確認しているが、基本的には当該堆積層の直下に堆積する層と同質である。床面から土師器片が出土した。

竪穴建物ＳＨ05（第63図）　平面形は東西2.7m、南北約３ｍの隅丸方形である。竪穴建物ＳＨ01と同じく、周壁溝は検出できなかった。また、屋根を支える支柱穴も床面において検出できなかった。周壁部は、壁が直立する状況ではなく、緩やかに傾斜することから通有にみられる竪穴建物とは異なった状況である。床面には一辺0.8mを測り、北から西へ45°の主軸をもつ方形土坑を検出した。また、建物の北辺中央部が幅0.9mにおいて内側に0.3m凹んでいる。その用途については、現時点で明らかではない。なお、床面から弥生時代末期～古墳時代初頭の甕底部と律令期の土師器が出土している。

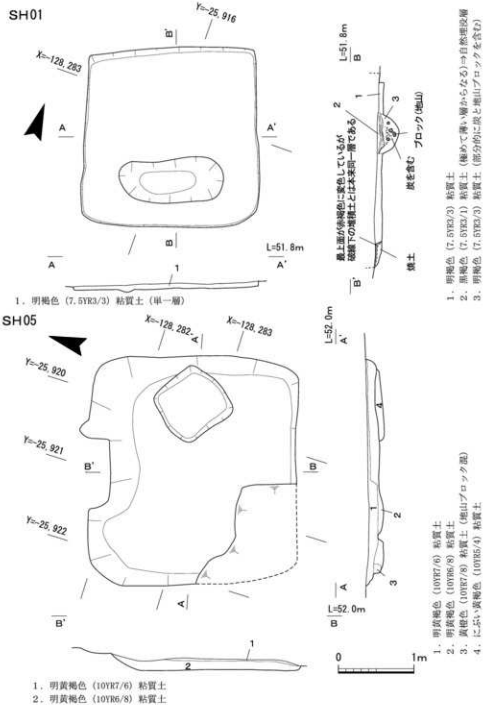
土坑ＳＫ02（第64図）　平面的には長軸２m、幅1.3mの南北に主軸をもつ土坑と一辺2.2mの隅丸方形の土坑からなる。土層堆積状況から、南に位置する不整形土坑が北側土坑を掘り込んでいるが、双方の土坑底面が完全に一致することと、双方の土坑東側の輪郭が一致することから、元来は同一遺構であったものの、最終的に南側土坑が拡張されたと考えられる。土坑内から須恵器



第61図　12・13トレンチ実測図


X=-128,270
X=-128,260
Y=-26,050
Y=-26,040
Y=-26,030
Y=-26,020
Y=-26,010
Y=-26,000
Y=-25,990
Y=-25,980
3トレンチ
4トレンチ
2トレンチ
E
G
F
H
C
D
0
10m
X=-128,290
X=-128,280
X=-128,270
1トレンチ
Y=-25,950
Y=-25,940
Y=-25,930
Y=-25,920
Y=-25,910
Y=-25,900
SH05
SH01
SK02
SP03
SK04
51.5m
51.0m
50.5m
A
B
0
10m

第62図　遺構配置図

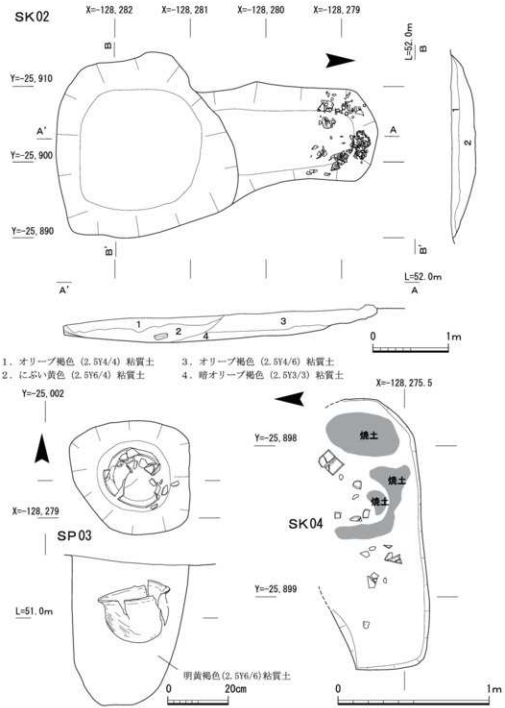


第63図　竪穴建物ＳＨ01・05実測図

杯Ａ・Ｂとともに土師器鍋や甕が複数個体出土している。なお、土師器は口縁部が30～60％残存する個体があるものの、遺構上層の出土状況は、細片化された状態であった。

柱穴ＳＰ03（第64図）　直径0.4m、深さ0.5mを測る不整形な平面形を呈している。柱穴内には明黄褐色粘質土の堆積がみられた。なお、柱穴内にはほぼ完形の土師器甕が出土しており、土器を埋納する用途が想定できる。周辺において、柱穴が点在しているが、建物として復元できる状況ではなかった。

土坑ＳＫ04（第64図）　トレンチ北壁直下で検出した土坑で、北端部は調査区外である。長辺

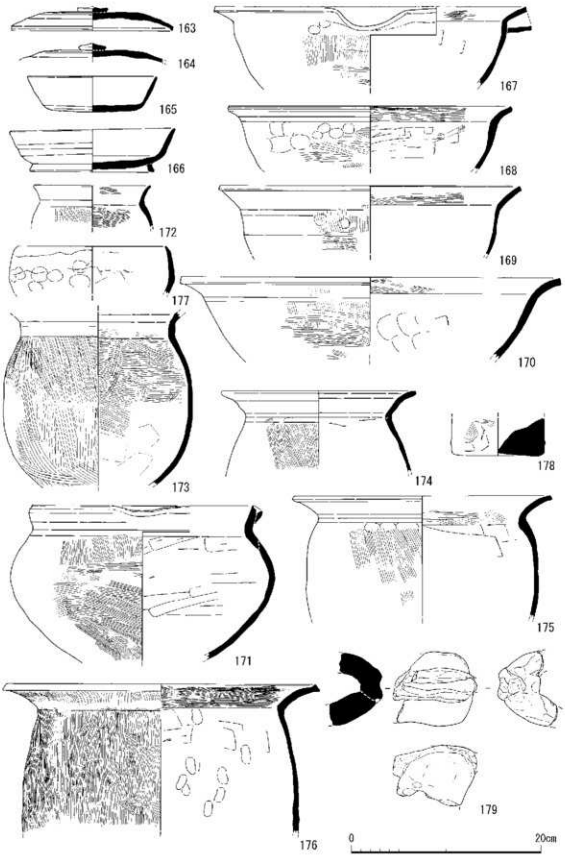


第64図　土坑ＳＫ02・04、柱穴ＳＰ03実測図

1.8m、短辺0.7m以上を測る。土坑埋土は、第60図断面図に示した12層である。床面上には、焼土が部分的に堆積しているが、床面自体は被熱による変色ならびに硬化は認められない。また、床面から土師器杯などが出土している。

4）E地区第２トレンチ（第62図）

第１トレンチ西方に設定したトレンチである。遺構・遺物は確認できなかった。



第65図　出土遺物実測図１

5）E地区第３・４トレンチ（第62図）

調査地の地形は、南西方向に傾斜しており、北側に広がる台地の縁辺部に位置している。だい３トレンチは調査区の中で平坦な地形を残している北端に東西約70mのトレンチを設定し、そこから等間隔に傾斜の低い南方に３か所のトレンチを設定した。第２トレンチと同じく明確な遺構、遺物は検出しなかったが、中央部において北方から南方に落ち込んでいく幅約16mの谷地形を検出した。最深部は地表下２m、標高約50mである。遺物は出土していない。なお、第４トレンチにおいても谷地形の延長を確認したが、他の遺構や遺物は確認できなかった。

４．出土遺物

土坑ＳＫ02出土遺物（第65図163～179）

須恵器杯、土師器鍋や甕、製塩土器、土製品がある。163・164は天井部につまみを有する須恵器蓋である。165・166は杯である。これらは平城宮土器編年Ⅱに比定できる。一方、167～170は口径が30～40cm前後を測る土師器鍋である。167は片口である。171は口径24cmを測る片口の土師器鉢である。172～176は口径が12～33.6cmを測る土師器甕である。基本的には外面をタテハケで調整している。177は口径15.6cm、橙色（10YR7/4）の製塩土器である。１mmの暗灰色の砂粒を多く含み、外面にオサエが顕著である。178は底径9.9cmを測るにぶい橙色（5YR 6/6）の円筒状土製品である。179はにぶい黄橙（10YR 7/4）を呈する土馬の臀部様の土製品である。

土坑ＳＫ04出土遺物（第66図180・181）

180は口径18.1cm、にぶい橙色（7.5YR 7/4）を呈する土師器杯である。181は外面は側辺に並行するハケ、内面は斜行するハケにより調整する不明土製品である。端部は、接合を意図して尖り気味に処理し、両側面もナデ調整を施している。幅は11.2cmである。製作技法上、瓦には分類できず、土製品とした。

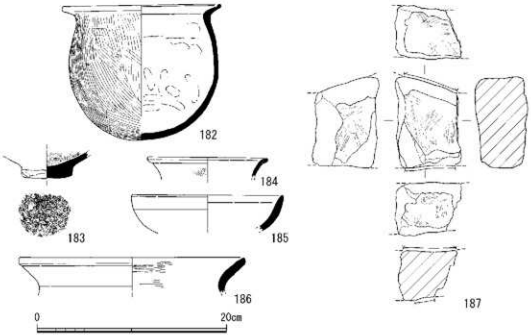
柱穴ＳＰ03出土遺物（第67図182）

182は土師器甕である。口径は16.4cmで、色調は明黄褐色（10YR 7/4）を呈している。外面を斜めハケ、内面をオサエ調整している。

竪穴建物ＳＨ05出土遺物（第67図183～187）

183は弥生時代末期～古墳時代初頭の甕底部である。色調はにぶい橙色（10YR 7/3）を呈しており、底部最大径は5.4cmである。184～186は土坑ＳＫ02で出土した土器に近似する土師器であり、同時期性を示している。187は最大長9.6cm、厚さ5.7cmを測る砥石である。色調はにぶい黄橙（10YR 6/3）である。

第66図　出土遺物実測図２



第67図　出土遺物実測図３

５．小結

今回、実施した美濃山遺跡の発掘調査では、Ｅ地区第１トレンチの傾斜変換線付近において奈良時代の竪穴建物、土坑、柱穴などを検出した。竪穴建物は、通有にみられる住居とは異なり、周壁溝がなく、支柱穴がないことから、集落の縁辺部に営まれた工房を意図した施設であった可能性も指摘できる。なお、検出遺構もわずかであり、一時的に土地利用があったものの、基本的には傾斜地上にあるため、土地利用を行うには困難な地勢であったことがわかった。なお、現地表にはみられない谷地形を第３トレンチで検出しており、周辺部一帯における旧地形復元を行う上で、一定の根拠を得たといえる。

総 括

この事業に係る平成23年度の発掘調査では、当該調査地の南西に広がる美濃山廃寺に関連する掘立柱建物４棟をはじめ、柵列、土師器焼成坑、土坑、溝などを確認した。特に、検出した掘立柱建物の主軸が、美濃山廃寺で確認された建物群とおおむね一致し、出土遺物からも同廃寺と併行する時期に存続していたことが明らかにできた。これらの調査成果は、美濃山廃寺周辺域における土地利用のあり方を考えるうえで重要であるばかりでなく、美濃山廃寺自体の構造的検討を行ううえで基礎的な資料を得ることができたといえる。

一方、当該調査地の東端では、今までその存在が知られていなかった奈良時代から平安時代の瓦窯群を検出した。特に、２号窯では、奥壁を壊し、新しく焼成室を複数回にわたって構築したことが把握できた。このように瓦窯の一部を拡張して新たな焼成室を増築した事例は、全国的にみても稀有であり、当時の瓦窯の構造を考えるうえでの基礎資料として重要であり、当時の瓦生

産体制を考えていくうえでも重要な調査成果となった。なお、２号窯以外に３か所で被熱により赤化した地点を確認しており、複数の瓦窯が存在することを把握した。これらの瓦窯の発掘調査自体は、関係者のご理解のもと、平成24年度においても実施することとなった。

なお、美濃山廃寺の下層には、弥生時代後期の集落が確認された美濃山廃寺下層遺跡が存在している。今回の発掘調査においても同時期の竪穴建物を９棟確認することができた。竪穴建物自体の残存状態は、必ずしも良好とはいえないが、美濃山廃寺下層遺跡の広がりを確認できた。周辺地域における弥生時代の遺跡の動態を捉えるうえで重要な調査成果となった。

一方、平成24年度の発掘調査では、先に述べた４基の瓦窯の調査と美濃山遺跡の南端部において、律令期の遺構を検出した。美濃山瓦窯跡群の発掘調査では、窖窯１基、平窯３基からなる瓦窯群であることが明らかになった。また、出土した瓦から、瓦窯が造営された当初は、美濃山廃寺に瓦を供給することを目的に造営されたことがわかった。しかし、次の段階では八幡市域や京田辺市域に点在する古代寺院にも瓦を供給していることが明らかになるとともに、美濃山廃寺出土の同型の軒丸瓦が、南山城の古代寺院からも出土していることが明らかになり、南山城における瓦生産体制を考えるうえで欠かすことができない生産遺跡となった。また、４号窯から平安京「西寺」銘の平瓦が出土したことは、遺跡の性格を考える上でも重要な発見となったが、灰原等の調査ができなかったためその性格を正確に捕捉することはできなかった。なお、美濃山遺跡の南端では、南方に傾斜する旧地形を検出するとともに、律令期の竪穴建物２棟と土坑等を検出した。主柱穴や周壁溝がないことから工房などの住居以外の機能が想定できる。同遺跡の縁辺部の土地利用のあり方を把握することができた。

以上のように、当該事業に係る発掘調査では、重要な調査成果を得ることができた。今後、これらの成果が基礎的な考古資料として活用されることに期待したい。　（小池　寛）

注１　柴暁彦「新田遺跡第７次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第140冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2010、引原茂治「柿谷古墳・美濃山遺跡発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第146冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2011

注２　三田村宗樹「京阪奈丘陵の大阪層群の層序と地質構造」（『第四紀研究』31（３）　日本第四紀学会）　1992

注３　市原実編『大阪層群』創元社　1993

注４　市原実「大阪層群と大阪平野」（『アーバンクボタ』No.11（株）クボタ）　1975

注５　吉岡敏和「京都盆地周縁部における第四紀の断層活動及び盆地形成過程」（『第四紀研究』26　日本第四紀学会）　1987

注６　注２文献に同じ。

注７　木谷幹一「大阪層群Ma9層相当層の花粉分析–京都府南部八幡男山丘陵と神戸市西北部高塚山層の露顕を例として」（『自然と環境』４　シンクタンク京都自然史研究所）　2002

注８　注２文献に同じ

注９　絢野義夫・三浦静・藤井昭二　「丘陵と平野のなりたち―第四紀の北陸の変遷―」（『アーバンクボタ』NO.31　（株）クボタ）　1992、市原実編『大阪層群』創元社　1993

注10　注２文献に同じ

注11　池田碩・植村善博「南山城、木津川流域の段丘地形」（『奈良大学紀要』第９号　奈良大学）　1980

注12　「美濃山廃寺第６次・美濃山廃寺下層遺跡第９次」・「美濃山廃寺第７次・美濃山廃寺下層遺跡第10次」（『京都府遺跡調査報告集』第154冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2013

注13　木立雅朗「土師器焼成坑を定義するために」（『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編　真陽社）

1997

注14　森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年-近畿編Ⅱ－』木耳社)　1990

注15　奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅹ Ⅵ』(『奈良文化財研究所学報』第70冊)　2005 117頁～122頁

注16　備前知世・小森俊寛「第３章第４節遺構」(『美濃山廃寺第８次・美濃山廃寺下層遺跡(第11次)発掘調査報告書』八幡市教育委員会)　2013　13頁

注17　村田和弘「美濃山廃寺下層遺跡第９次調査」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2012　129頁第119図

注18　望月精司「土師器焼成坑の分類」(『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編　真陽社)　1997

注19　注12文献に同じ。

注20　伊野近富・筒井崇史「瓦類」(『美濃山廃寺第６次・美濃山廃寺下層遺跡第９次発掘調査報告』(『京都府遺跡調査報告』第154冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2013

注21　筒井崇史「美濃山廃寺の遺構の変遷について」(『美濃山廃寺第７次・美濃山廃寺下層遺跡第10次発掘調査報告』(『京都府遺跡調査報告』第154冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2013

注22　軒瓦の型式分類にあたっては、八幡市教育委員会による美濃山廃寺第１～５次調査の報告と同志社大学歴史資料館による美濃山廃寺報告を基本的には踏襲し、第６～９次の調査成果を加えて設定したものである。
大洞真白『美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査(１～５次)報告書』(『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第39集　八幡市教育委員会)　2006、同志社大学歴史資料館編『南山城の古代寺院』(『同志社大学歴史資料館調査研究報告』第９集)　2010

注23　竹原伸仁『九頭神遺跡－九頭神廃寺－』(『枚方市文化財調査報告』第32集　枚方市教育委員会)　1997

注24　上原真人『恭仁宮跡発掘調査報告　瓦編』(京都府教育委員会)　1984
なお、この恭仁宮KM11(美濃山廃寺の軒丸瓦Ⅷ型式)について、中島正氏は山背国分寺塔跡の周辺から大量に出土すること、８世紀末ないし９世紀初頭の瓦と推定されること、延暦10(791)年 に山背国内の塔の修造を指示した勅が存在することなどから、延暦10年の勅にもとづいて製作され、塔の修理に使用された瓦の可能性を指摘されている。
中島正「南山城における平安初期古瓦の様相」(『平安京歴史研究』　杉山信三先生米寿記念論集刊行会)　1993

注25　志水廃寺：江谷寛『志水廃寺発掘調査報告』(『八幡町文化財調査報告』第１集　八幡町教育委員会)1977、興戸廃寺：田辺町教育委員会編『田辺町遺跡分布調査概要』(『田辺町理蔵文化財調査報告』第３集)1982、普賢寺：星野献二『鹽澤家蔵瓦圖録』　2000

注26　筒井崇史「軒瓦の特徴と年代」(『美濃山廃寺第６次・美濃山廃寺下層遺跡第９次発掘調査報告』『京都府遺跡調査報告』第154冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2013

注27　奈良県教育委員会『大和における古代窯跡』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第11輯)　1959

注28　同志社大学歴史資料館編『南山城の古代寺院』(同志社大学歴史資料館調査研究報告　第９集)　1971

注29　注24上原文献に同じ。

注30　資料の実見にあたっては八幡市教育委員会小森俊寛氏、大洞真白氏にご配慮いただいた。

注31　注20文献　67～69頁

注32　平安博物館『平安京古瓦図録』1977、京都府京都文化博物館植山茂氏のご配慮により実見させていただいた。

注33　資料の実見にあたっては京田辺市教育委員会鷹野一太郎氏にご配慮いただいた。

注34　京都府京都文化博物館植山茂氏のご教示による。

注35　注30に同じ。

注36　公益財団法人枚方市文化財研究調査会西田敏秀氏のご配慮により実見した。

参考文献

経済企画庁総合開発局国土調査課『土地分類基本調査　地形・表層地質・土じょう　京都西南部』1972
木立雅朗「「京焼」の上絵窯について」(『金沢大学考古学紀要』第26号　金沢大学考古学講座)2002
佐々木達夫「江戸時代の小型窯跡の系譜を探る」(『金沢大学考古学紀要』第26号　金沢大学考古学講座)2002
望月精司・木立雅朗「まとめにかえて」(『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編　真陽社)　1997

図　　版

八幡インター線関係遺跡　図版第１

美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第 12 次

(1) Ａ地区調査前南半部(南西から)

(2) Ａ地区調査前北半部(北東から)

(3) 竪穴建物ＳＨ30全景(北東から)

(1) 竪穴建物ＳＨ30遺物出土状況
(北西から)

(2) 竪穴建物ＳＨ60全景(北東から)

(3) 竪穴建物ＳＨ60遺物出土状況
(北西から)

八幡インター線関係遺跡　図版第３

美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第 12 次

(1)竪穴建物ＳＨ35全景(北西から)

(2)竪穴建物ＳＨ40全景(北東から)

(3)竪穴建物ＳＨ50・土坑ＳＫ38
全景(南西から)

美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第１２次

(1)掘立柱建物ＳＢ105・107全景
(北東から)

(2)溝ＳＤ039・土坑ＳＫ470遺物
出土状況(北東から)

(3)土師器焼成坑ＳＹ45検出状況
(北から)

(1)土師器焼成坑ＳＹ45全景
（北から）

(2)煙管状窯ＳＹ55全景（東から）

(3)煙管状窯ＳＹ55全景（南から）

八幡インター線関係遺跡　図版第６

美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第 12 次

(1) 煙管状窯ＳＹ55焼成室断面
（東から）

(2) Ｂ地区調査前全景（南西から）

(3) １トレンチ全景（北東から）

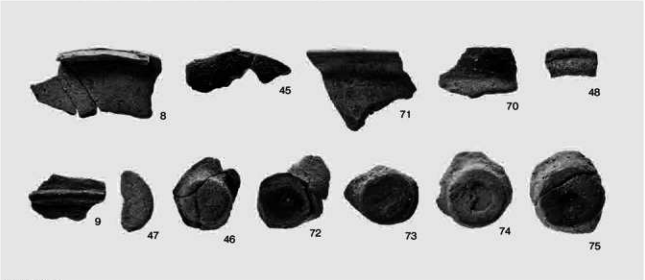
八幡インター線関係遺跡　図版第７

美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第 12 次

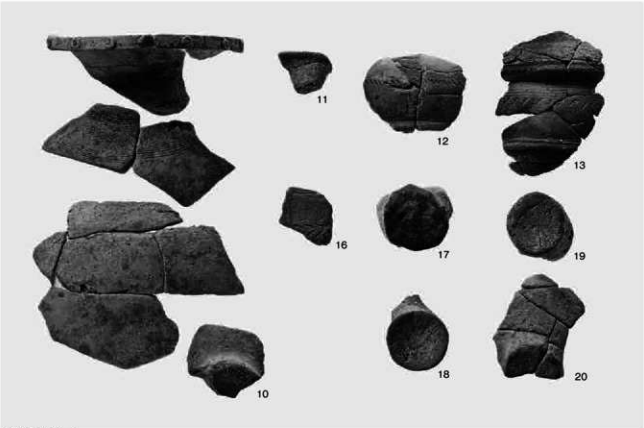
(1) ２トレンチ全景(北東から)

(2) ３トレンチ全景(北東から)

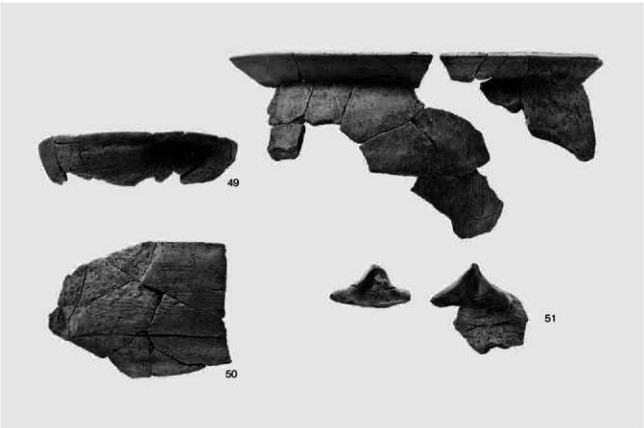
(3) ４トレンチ全景(南東から)



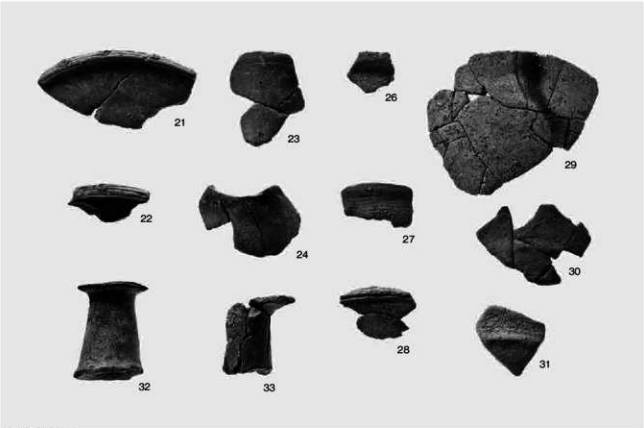
出土遺物１



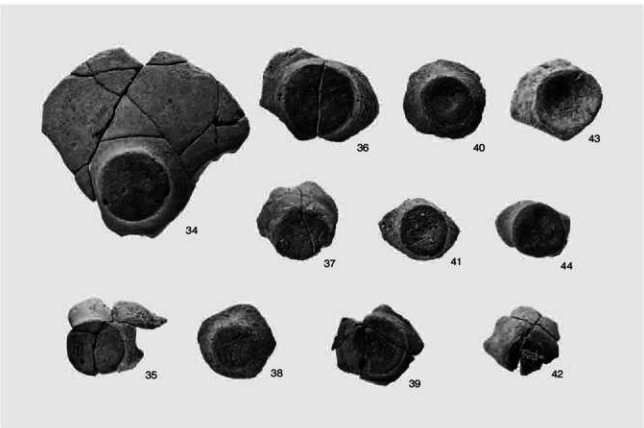
(1) 出土遺物２



(2) 出土遺物３



(1) 出土遺物４



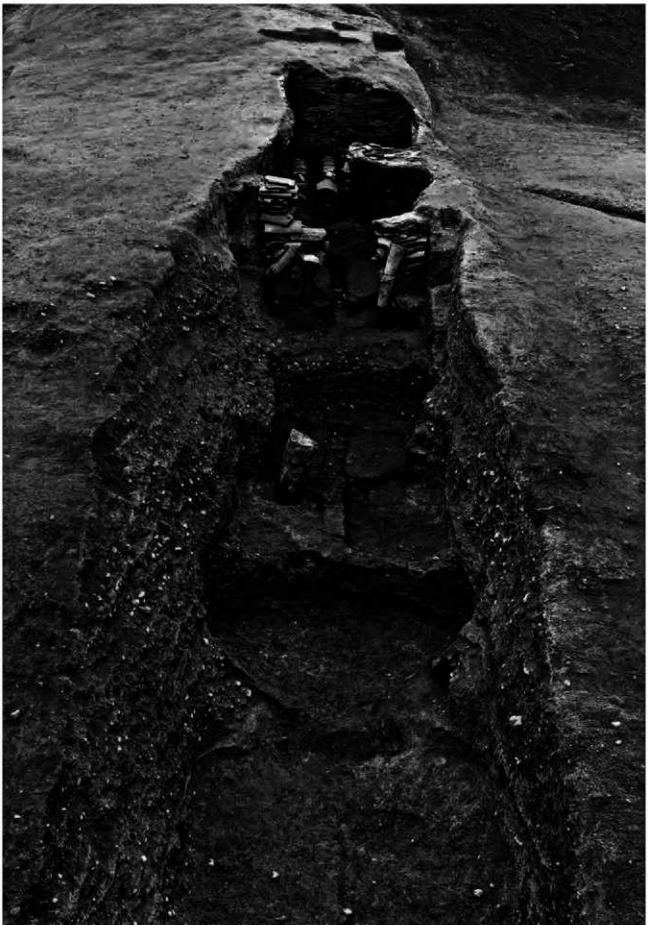
(2) 出土遺物５

美濃山瓦窯跡群

(1) 美濃山瓦窯跡群全景(空撮・北東から)

(2) 2号窯検出状況(北から)

美濃山瓦窯跡群



２号窯全景（東から）

美濃山瓦窯跡群

(1) 2 a 号窯全景(東から)

(2) 2号窯正面景(東から)

八幡インター線関係遺跡　図版第14

美濃山瓦窯跡群

(1) 2 a 号窯焚口崩落状況
(北から)

(2) 2 a 号窯焼成室側壁(北から)

(3) 2 a 号窯焼成室(西から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 2 a 号窯隔壁(北東から)

(2) 2 a 号窯隔壁構築状況
(南から)

(3) 2 a 号窯分焔柱構築状況
(東から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 2号窯ひさご形土製品出土状況
(北から)

(2) 2号窯埋土断面(南から)

(3) 2b、2c号窯(東から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 2 a 号窯埋土断面(北から)

(2) 2 a 号窯焼成室遺物出土状況
(北から)

(3) 2 a 号窯焚口構築状況
(北東から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 3 号窯検出状況(東から)

(2) 3 号窯埋土断面(南東から)

(3) 3 号窯灰原断面(南から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 3号窯遺物出土状況(東から)

(2) 3号窯全景(東から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 4・5号窯検出状況(北から)

(2) 4号窯全景(東から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 4号窯焼成室埋土断面および遺物出土状況(南から)

(2) 4号窯焼成室埋土断面(東から)

(3) 4号窯焼成室畦構築状況(西から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 5 号窯全景(東から)

(2) 5 号窯燃焼室断面(東から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 5号窯焼成室埋土断面
（北西から）

(2) 5号窯燃焼室埋土断面
（北東から）

(3) 5号窯焼成室（西から）

美濃山瓦窯跡群

(1) 5号窯焼成室須恵器出土状況
(北から)

(2) 5号窯燃焼室(東から)

(3) 5号窯燃焼室側壁・天井部
(北東から)

美濃山瓦窯跡群

(1) 5 号窯焼成室畦構築状況
（西から）

(2) 5 号窯分焔柱断面（南から）

(3) 5 号窯窯体断面（北東から）

美濃山瓦窯跡群

79

80

82（凸面）

82（凹面）

82（瓦当）

81

出土遺物　軒瓦 1

88（凸面）

88（凹面）

88（瓦当側面）

83

90（凹面）

90（凸面）

90（瓦当）

出土遺物　軒瓦２

美濃山瓦窯跡群

89(凹面)

89(瓦当)

89(凸面)

113(凹面)

113(瓦当)

113(凸面)

出土遺物　軒瓦３

美濃山瓦窯跡群

95(凹面)

95(凸面)

95(瓦当)

97

99

96

出土遺物　軒瓦 4

美濃山瓦窯跡群

118(凹面)

118(凸面)

120(凹面)

120(凸面)

出土遺物　平瓦 1

美濃山瓦窯跡群

124(凹面)

124(凸面)

125(凹面)

125(凸面)

出土遺物　平瓦 2

119(凹面)

119(凸面)

134(凸面)

134(凹面)

出土遺物　平瓦３・丸瓦

146（凸面）

146（凹面）

140（凹面）

140（凸面）

140（西寺）

141

出土遺物　鬼板・「西寺」銘瓦・塼

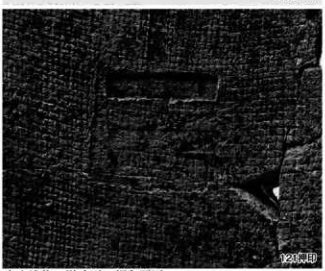
美濃山瓦窯跡群

148（凸面）

148（凹面）

151（凸面）

151（凹面）



123押印

136押印

出土遺物　熨斗瓦・押印平瓦

美濃山遺跡第３次

(1) C 地区調査前全景(北東から)

(2) C 地区全景(北東から)

(3) D 地区全景(南東から)

美濃山遺跡第３次

(1) E 地区東半部調査前全景
（東から）

(2) 1 トレンチ全景（東から）

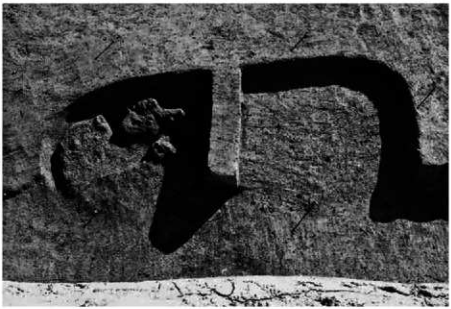
(3) 1 トレンチ全景（西から）

美濃山遺跡第３次

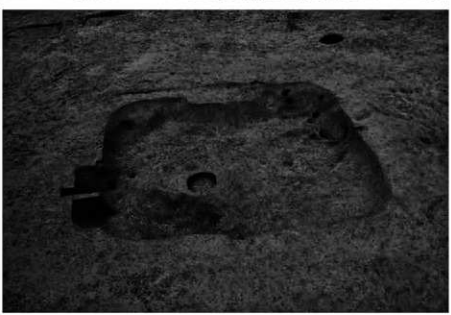
(1)竪穴建物ＳＨ01全景(西から)

(2)土坑ＳＫ02全景(東から)

(3)土坑ＳＫ02埋土断面および
遺物出土状況(北東から)



(1)土坑ＳＫ04全景(北から)



(2)竪穴建物ＳＨ05全景(南から)

(3)Ｅ地区西半部調査前全景
(西から)

美濃山遺跡第３次

(1) ２トレンチ全景(南から)

(2) ３トレンチ谷状地形(南西から)

(3) ４トレンチ全景(北西から)

163

165

166

177

187

182

171

179

179

出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	
書　　名	
副　書　名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第160冊
編 著 者 名	
編 集 機 関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所　在　地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40番#3　Tel. 075(933) 3877
発 行 年 月 日	西暦2014年3月28日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
みのやまはいじだいくじ・みのやまはいじかそういせきだいじゅうにじ 美濃山廃寺第９次・美濃山廃寺下層遺跡第12次・	やわたしみのやまふるでら・ほそだに・おおつか 八幡市美濃山古寺・細谷・大塚	26210	29 44	34° 50′ 46″ 34° 50′ 44″	135° 43′ 20″ 135° 43′ 11″	20110808 ～ 20120302	2,500	道路建設
みのやまがようあとぐん・みのやまいせきだいさんじ 美濃山瓦窯跡群・美濃山遺跡第３次	やわたしみのやまふるでら・でじま 八幡市美濃山古寺・出島	26210	24	34° 50′ 46″ 34° 50′ 35″	135° 43′ 20″ 135° 42′ 59″	20120806 ～ 20130126	2,085	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
美濃山廃寺第９次	寺院	奈良	掘立柱建物・柵列・溝・土坑・土師器焼成坑・煙管状窯	土師器・須恵器・陶磁器・瓦	
美濃山廃寺下層遺跡第12次	集落	弥生	竪穴建物	弥生土器・土師器	
美濃山瓦窯跡群	窯跡	奈良～平安	瓦窯４基	土師器・須恵器・ひさご形土製品・覆鉢形土製品・瓦	「西寺」銘瓦出土
美濃山遺跡第３次	集落		竪穴建物・土坑・柱穴	弥生土器・土師器・土製品・石製品	

所収遺跡名	要　　約
美濃山廃寺第９次 美濃山廃寺下層遺跡第12次 美濃山瓦窯跡群 美濃山遺跡第３次	平成22年度調査では美濃山廃寺に関連する掘立柱建物４棟のほか柵列、土師器焼成坑、土坑、溝を調査した。調査の過程で新たに奈良時代から平安時代までの瓦窯４基を検出した。美濃山廃寺下層遺跡では弥生時代後期の竪穴建物９基を調査した。 平成23年度調査では引き続き瓦窯３基の調査を行い、「西寺」刻印瓦を含む貴重な瓦資料が出土した。隣接する美濃山廃寺に瓦を供給しただけではなく、南山城の諸寺に供給していたことが明らかになった。 美濃山遺跡の調査では、竪穴建物２棟と土坑を検出した。竪穴建物は律令期のもので、柱穴や周壁溝がないことから、工房などの住居以外の機能が想定できる。。

京都府遺跡調査報告集 第160冊

平成26年3月28日

発行　公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141